

青薔薇の少女達と紡ぐ  
病み物語：N

ka—主

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

自分の夢を叶える為に……そして、幼馴染みの2人と交わした『約束』を果たしに……  
大江神楽は、第2の故郷長野県を独り立ちし、故郷へもどる。

これは……そんな彼と青薔薇の少女達、故郷で合う人物らが紡ぐ病みの物語……。

# 目次

序章

10話目	9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話	0話
156	146	134	97	76	58	50	37	22	10	1

11話

幕間1話

第1章

12話

幕間2話

13話

14話

15話

第2章

16話

17話

18話

19話

371	355	340	326		303	286	265	242	220	200	168
-----	-----	-----	-----	--	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

20話

番外編

番外編・少女達と夏休みと怪奇遊戯（ホ

ラーゲーム）①

410

白金燐子誕生日回：奏でるは祝福の鍵

盤音

427

393

## 序章

## 0 話

6年前……。

(???) 『神樂……ホントに行っちゃうの?』

(神樂) 『うん……お父さんとお母さんの、仕事の都合で……』

(???) 『ヤダ……神樂! 行っちゃヤダ! 神樂が行くなら、アタシも行く!!』

(???) 『リサ……我儘言わないで。私だって……神樂ともっといたい……!』

とある住宅街の公園の前にて、3人の男女が話していた。歳はどちらも12歳程。男の子はどうやら、両親の都合上引越すことになったそうだ。

そして、引越し当日。恐らくは幼馴染みであろう2人の女の子と、別れの挨拶を3人で遊んだ公園でしていた。

やはり別れるのが惜しいのだろう。リサと呼ばれた栗色の髪の子と銀髪の髪の子の2人は、泣きながら神樂に訴えていた。

(神楽) 「俺だって……リサと友希那と別れたくないよ……!」

しかし、とうの神楽も同じ気持ちだったのだろう。2人に自分も別れたくないと訴えていた。

「神楽〜!そろそろ出発するわよ〜!」

(神楽) 「ごめん……そろそろ行かないと。でも、長野県に居ても、2人の事は忘れないから。3人で交わした『約束』……果たす為にここに、羽丘に戻ってくるから!」

(リサ) 「ホント……?約束だよ?」

(友希那) 「約束忘れたりしたら……承知しないからね?神楽!」

互いにそう言葉を交わして、神楽は両親が乗る車に乗った。

その瞬間……神楽が車に乗ろうとした直前、神楽が何か思いついたのか、2人の元へ戻ってきた。そして――

(リサ) 「か、神楽!?! / / /」

(友希那)「く、苦しいわ神楽……! / / /」

ほんとに最後の別れ……なのだろう。神楽は2人を思い切り抱きしめた。

(神楽)「必ず帰ってくるから。帰ってきて……『約束』を……2人を幸せにするって約束……果たしに、絶対かえってくるから!」

(リサ)「うん……うん……ッ! 約束だよ、神楽!」

(友希那)「絶対に……戻ってきてね、神楽……!」

(神楽)「ああ、それじゃあ……行ってくる!」

そう言つて神楽は、今度こそ車に乗った。

神楽を乗せた車は、神楽が乗った事を確認して直ぐに、公園から離れていった……。

その際……リサと友希那は、泣きながら……しかしどこか微かに期待している顔で、手を振りながら神楽を乗せた車を追いかけている姿が、ルームミラーとサイドミラーに映し出されていたのだ……。

(リサ)「神楽……行っちゃたね……」

(友希那)「そうね……。でも、神楽は必ず帰ってくるわ。」

私とリサの3人で交わした『約束』を果たしに……」

(リサ)「そおだね……。約束だよ神楽……。必ず……。帰ってきてね？待ってるから……！」

車が見えなくなつて、2人は走るのをやめて、互いにその言葉を交わした。

何時か帰ってくるであろう……。愛しの幼馴染みが去つていった先を、期待の瞳で……  
少し目を濁らせながら見つめていた……。



そして、6年の時が過ぎーーーー現在……3月。

『まもなく……東京新宿行きの新幹線が到着いたします。ご乗車の方はーーーー』  
(神楽)「よし……荷物の最終チェックよし。母さん、そろそろ時間だから行くね？」

早朝……朝5時頃の上田駅の新幹線乗車券売り場の前にて、荷物の最終チェックを済ませた少年、大江神楽は見送りに来た母親に別れの挨拶をした。彼の服装は、早朝というのもあって、黒のジャケットに黒のジーンズ。右肩にはボストンバッグをさげて、左手には同じく黒のキャリーケースがあつた。

「いざ当日この瞬間になると……別れるのがおしくなるわね……東京に行つても連絡は定期的にするのよ？何かあつてからじゃ、遅いんだから……あと……あと……」

（神楽）「大丈夫だよ母さん。持ちきれなかつた荷物や最低限の家具とかは既に引越し屋の人が手筈通りに置いてくれてるんだから……着いたらおいおいやるつもり。それに……着いたらあの2人の両親に挨拶は忘れずにするつもりだよ」

「ご両親だけじゃなくて、リサちゃんや友希那ちゃんにも……可能なら新宿に着いたら連絡するのよ？一応向こうには今日そちら側に来る事を連絡してあるから……大丈夫だろうけど……」

どうやら彼は、単身で東京へ引越すらしい。生活に困らない程度の荷物は既に引越し屋の人が運んでくれたとの事だ。

にもかかわらず、どうやら彼の母親は極度の心配性なのか……実の息子が旅立つ直前になって色々心配になっているそうだ。

(神楽) 「そんなに心配しなくてもいいよ、母さん。俺は自分の夢と……2人と交わした『約束』を果たす為に東京……羽丘へ帰るんだ。大丈夫、母さん達に心配書けるようなことは万一でも内容にするからさ」

「それを聞いて嬉しいよ。あと神楽が2人に交わした『約束』……貴方も男の子なんだから、余り長引かせちゃだめよ？ 女の子は、そうなるを取り返しがつかなくなる生き物なんだから」

(神楽) 「うん、善処するよ」

母親がそう指摘すると、神楽は苦笑いでそう返事した。

そう返事した直後、遠くの方からキイイイイイ……ツというブレーキ音が聞こえた。

それを聞いた神楽は、ポストンバッグを下げ直し、キャリーケースを左手にもって母親に別れの挨拶をした。

(神楽)「それじゃあ母さん……行ってくる」

「行ってらっしゃい、神楽」

母親に手を振って、俺はホームに続くエスカレーターへ向かっていった……。

『○○号東京新宿行き。此方の列車は——』

車両内で放送されているアナウンスをBGMに、神楽は自分の座る席の荷物置き場に荷物を置き、席に着いた。

程なくして、新幹線が動き出した。

(神楽)「さよなら、俺の第2の故郷。そして……」

そう呟いた神楽は、首に下げていたロケットペンダントを取り出して開いた。

そこには、幼き姿の神楽とあと2人……同じ年頃の女の子2人。

(神楽)「夢を叶えるために……『約束』を果たす為に……今戻るからな、俺の故郷……」

そうつぶやき、ロケットペンダントを仕舞い、スマホに入れた音楽を聞きながら、目的地に着くまで車両内で一息着いたのだった……。

〈END〉

# 1話

〜リサ&友希那 side〜

(リサ&友希那) 「~~~~~♪♪」

アタシ達は……この時をずっと楽しみにしていた。

6年間……色々あったけれど、私達は互いに彼の事を忘れてなんて……彼と私達3人で交わした『約束』を忘れたことなんてなかった。

アタシ達の両親から、昨日彼の家から1本の電話が掛かってきた。

内容は……『明日、神楽が羽丘に帰ってくる』との事だった。そして今日、朝早くから私とリサはリサの家の前にてそれはもう、舞い上がりそうなくらい高揚した気分での時を待っていた。

(リサ)「楽しみだね、友希那♪」

(友希那)「ええ、どんな感じで出迎えてあげようか考えすぎて眠れなかったわ♪」

(リサ)「アハハ♪アタシもアタシも!どんな服装で迎えてあげようか……考えてたらさ、いつの間にか朝になってた……なんてね♪」

等と、アタシは半分冗談交じりで友希那にそう言った。

眠れなかったのは本当だが、リサ見たく朝まで寝れなかった訳じゃないが……ドキドキが収まらなくて、寝たのが5時辺りだったのは覚えている。

でも結局……いつも着ている服装にする事にした。

彼なら……幼馴染みがどう変わろうとも、忘れる訳がないから。

(リサ)「神楽……アタシ達の事、忘れてないよね?」

(友希那)「当たり前でしょ?『約束』を忘れない限り……私達2人を忘れるなんてこと、神楽がする筈ないわ」

(リサ)「そう……だよね!ウン!早く来ないかな〜神楽♪」

アタシが心配した事は、おそらく杞憂に終わるだろう。だって、神楽は記憶力だけは誰よりも優れてる方だから。

どんな姿になっても、私達3人が交わした『約束』がある限り……絶対と言って良いく

らい私とリサの事を忘れたりなんてしない。それが私とリサが知る神楽だ。

(リサ)「たまに届く写真みて思うんだけど…神楽、昔よりもとつてもかっこよくなつたよね！」

(友希那)「奇遇ね…私もよ？流石私達のd---幼馴染みよね。惚れ惚れしてしまうわ…／／／」

今までは写真だけだったが、今日からはn---本物を拝めれるのだ。

ああ…早く来ないかな…神楽♪神楽の姿をこの目で、直にみたい。早く目に焼き付けたい……。

「リサ〜！友希那ちゃん！神楽君新宿に着いたらいいから、そろそろ迎えに行くわよ〜！」

(リサ)「は〜い！」

(友希那)「分かりました……！」

そうこう考えてるうちに、アタシのお母さんから神楽が新宿に着いたと言う連絡を受



けたと言う知らせを聞いた。

それを聞いた私達は、リサの家の車にのって、羽丘駅へ向かった。

(リサ&友希那) (ああ、早く会いたいな(わ)、神楽♡♡)

---

〈神楽side〉

(神楽) 「……あと少しだな……」

新宿につき、手筈通りにリサと友希那のお母さんに電話を一通入れて……今俺は、羽丘行きの電車に乗っている。

2、3時間の新幹線、及び電車旅が……もうすぐ終わりを迎える。

羽丘に着くまでもう少し時間がある為、俺は編入先の学校の書類の再確認をし、残りの時間を読書などに費やした。

長野にいる間、2人の親からリサと友希那の写真が送られてきたりした。2人とも……6年前よりも色々と成長していた。聞く話によると、2人共、残り3人の女子と一

緒に『Roselia』と言うバンドを結成し、音楽の祭典『F・W・F』「フューチャー・ワールド・フェス」に出場に向けて、どのバンドよりも引けを取らない練習をし、今は誰もが彼女達のことをよく知る有名な音楽バンドとして活動してゐるらしい。

(神楽) 「頂点を目指すガールズバンドRoseliaか……」

これも、2人の親が言っていた事だ。Roseliaは、ただ有名なバンドと言うだけでない。圧倒的なパフォーマンス、技術力、その他諸々が本格派なバンド……。

故に……その5人が目指してるのはF・W・Fに出て有名なガールズバンドになると言う訳じゃない。あの5人が目指しているのは頂点。ガールズバンド界隈の頂点に君臨すると言うのが彼女達の掲げた目標らしい。

(神楽) 「目標は違えど……形は似てるな……」

そう呟きながら俺は、2人の親からその話を聞いた時から……2人に。否、Rose liaに出会ったらやりたい事があるのを思い出した。

(神楽)「それを実現させる為にも……早く2人に会わないと、だよな……」  
『まもなく。羽丘、羽丘です。降り口は、左側です……』

車両内から、間もなく羽丘に着くアナウンスが流れた。  
もうすぐだ。もうすぐで、俺の故郷に着く。

(神楽)「早く会いたいな……。リサ、友希那。そして……」

キキイイイイ……ツ

……プシユウウウ……ツ!!

『御乗車ありがとうございます。羽丘、羽丘です。降り口は左側です。お荷物のお忘れのないよう、お願いします』

(神楽)「よし……行くか!」

本をポストンバッグに仕舞い、荷物をもって……俺は電車をおり、約3時間程に及んだ新幹線・電車での移動に……幕を下ろしたのだった……。

リサ&友希那 side

(リサ)「いよいよだね、友希那……」

(友希那)「ええ、早く会いたいわ……神楽……」

今しがた、駅のホームの下り線から電車が来て、アナウンスが流れた。

時間的にも、あの電車に神楽が乗ってるに違いないと思った私達は、偶然にもそう思ったリサのお母さんと一緒に車から降りて、駅の入口前で彼が来るのを待った。

(リサ)「ねえねえ友希那！神楽……アタシ達見て、どんな反応するかな？」

(友希那)「そうね……私達が来る事は神楽は知らないから……当然驚くと思うわ」

そう、実を言うと先の電話でアタシのお母さんは、「2人はバンドの練習で来られない」と返してくれた為、神楽はアタシ達も迎えに来てる事を知らない。

だからきつと……居ないはずの私達を見て、ドギマギしながら驚くと思う。だって、あれから6年前……自分で言うのもあれだけれど、大人びたから。きつと、色んな意味

で驚くと思う。

アタシ達がそう思っていた最中だった……その時が訪れたのは。

(神楽) 「……ッ!?!」

(リサ&友希那) 「ッ!!!」

予想通り、彼はアタシ達の姿をみて驚いていた。

でも、私達も同じくらい驚いていた。いいえ、驚いた……というより、やっと再会出来た……の方が適切かもしれない。

例えるなら、結婚が約束された主人公とヒロインが、周期感覚で漸く再会できたそれだ。

それくらい……私達3人がこうして巡り会えたこの瞬間が儚く、尊く……

愛おしく、懐かしい。今か今かと待ち遠しかった。

だから————

(リサ&友希那) 「神楽ツ!!!」

(神楽) 「うお……ツ!」

アタシと友希那は、これでもかと言うくらい力で神楽を抱き締めた。

6年前の面影何て既になかったが……写真を見ていたお陰で彼が私達の幼馴染み、大江神楽である事に間違いなかった。

(リサ) 「神楽ツ！神楽ア……ツ！」

(友希那)「会いたかった!……ずっとずっと、貴方に会いたくて……この時がいつ来るのか待とうしかった!」

(神楽)「リサ、友希那……ただいま。6年……長かったけど、戻って来れたよ。故郷に、2人と過ごした……思い出の地に」

そう言って神楽は、アタシ達を抱き締め返してくれた。

力が強かったのか、少し息苦しさを感じたが……神楽を直に、より濃く感じれるから、私達はそれでも良いと思った。

それと同時に……確かめたいことがあった。

本当に、彼が神楽なら……

6年前の『約束』を……

覚えているだろうか……

(リサ)「ねえ神楽?アタシ達と交わした『約束』……覚えてる?」

(神楽)「約束……?」

(友希那)「そうよ。『私達2人を幸せにする』って約束……それを果たす為に、私達の元へ戻ってきたのでしょ? 神楽?」

誰よりも記憶力に優れた神楽だもん。

ましてや未来の……でもある私達との約束を忘れるなんて有り得ない。

この瞬間まで……そう疑わなかった……。



(神楽) 「……………ごめん、何の事だか分かんないや……」

(リサ&友希那) 「……………え???'」

神楽の口からそう告げられた瞬間—————  
私達の頭の中は、真っ白になった……。

〈END〉

## 2話

場所変わり羽丘商店街——

①①①「はあ…、はあ…、はあ…！」

ピンク色の髪をなびかせて、小柄な少女は走っていた。服装が春の洋服を着てる辺り、ランニングをしてる訳ではなさそうだ。

①①①「や、やばい……ち、遅刻……しちやう……！」

理由は分からないが、彼女は何かに遅刻しそうで、今こうして走っているそうさ。そして顔色からして……既に遅刻をしてしまったか否か……、とても深刻そうな顔でかつ青ざめていた。

①①①「はあ、はあ……！あと少して羽丘駅……！颯樹君に千聖ちゃん……怒ってるだろ

うな……」

恐らく待ち人であろう人物2人の名前を言いながら、彼女は羽丘商店街を抜け、駅まで走っていったのだった……。

---

所戻って……羽丘駅。

くリサ&友希那 side

(リサ)「神……楽？」

(友希那)「貴方……今、なんて……」

(神楽)「済まない……2人と交した約束が……なんの事だか分からないんだ。何か、大切なことだったはずなのに……」

空いた口が塞がらないってこう言う事を言うのね……。

神楽がそう打ち明けた時から、アタシと友希那は動揺が隠せなかった。

あの記憶力に長けてた神楽が、私達と交わした約束を忘れるはずがない。そ、そうだ。これはきつと、なにかの間違いだ。きつと……そうに違いない。

(リサ)「ね、ねえ神楽？冗談きついよ？そんな事してアタシ達にサプライズしようとしてるんだよね？ネ？」

(友希那)「そ、そうよ……冗談きついじゃない。ほら、早く……冗談つて、言つて頂戴？」

……だけど……現実はその簡単に都合よく出来ていなかった。

直ぐにそれを……私達は思い知らされる事になった。

(神楽)「ごめん……ホントに、なんの約束したのか覚えてないんだ……なんの約束したのか、教えてくれ」

(リサ&友希那)「」「」

嘘……だよ？ねえ、誰か嘘つていつてよ……。

私達の幼馴染みが……神楽がそんな事言うはずがない。誰か……知ってるんでしょ

?これは、冗談なんですよ?

……あ。

そんな時、アタシはとても良い事を思いついた。

神楽はさつき、「教えてくれ」といった。なら、私達が教えればいい。

きつとこれは……アタシ達から離れた6年間、神楽に他のオンナが、何かをしたに違いない。

私達の愛しの神楽に、他のオンナが変なことしたから……神楽は私達と交わした約束を、わすれてしまったのだけわ。

(リサ&友希那) (だったら……やる事は1つ♡)

同じ事を、友希那も考えていたのか……アタシと偶然目があった。

リサとアイコンタクトをとって、私達は神楽に抱きついた。

そして……

(リサ&友希那) 「んちゅ♡♡ジュルジュル♡♡……」

(神楽) 「ンンっ!?!」

ああ……懐かしい神楽の唇♡6年ぶりに、神楽とキスが出来て……アタシはとっても嬉しかった。

公共の目? そんなの……今はどうだっていいわ♡今は神楽とこうして……2人の愛を今1度神楽の忘れてしまった記憶に……『上書き』するのが先決なのだから。

(リサ)「教えてあげる。神楽、貴方はアタシと友希那と付き合ってるの」

(神楽)「付き合ってるか否か分からないけど……告白されたのは……朧けに覚えてる

……／／

ハハッ♪神楽ったら、成長したのは貴方だけじゃないんだよ？

顔を赤くしてる神楽……とても可愛いわね♡見た感じ……何処とは言わないけど、女性として成長した私達の身体の一部に触れて(私達が密着させた)、神楽は男の子らしくドギマギしてる……って感じかしら？

(友希那)「告白したの。でも……将来結婚して、子供を授かって、素敵な家庭を気付く為には、神楽は選ばなきゃいけないわ。私か、リサのどちらかを……」

(神楽)「う、うん……？」

何とか理解してるって感じかな？なら、あと少し……だネ♪

私達は、未だに密着させた身体を更に密着させ、お互い神楽の耳元で囁いた。

(リサ)「小学校6年生の頃……別れる前に、神楽はアタシ達に『何時か2人のうちどち

らかを幸せにする為に、此処へ戻ってくる』って約束したんだよ?」

(友希那)「あと、もう1つ……『戻って来たら、私達を許嫁として、6年前よりも愛してくれる』って約束したの。覚えてない……のよね?」

(神楽)「うん……でも、何となく微かに、そんな約束をしたような……そう出ないような気がする。家に帰ったら、6年間何があったのか……ちゃんと話すから、ね?」

(リサ&友希那)「約束……だよ? (よ?)」

それを聞いたアタシは、密着させた身体を離れた。

神楽? 今度こそ約束……守るのよ? 私達が、許嫁である私達が、貴方の事を約束と共に……守って上げるからね?

……しかし、神楽がつい今し方約束した事が……

私達幼馴染みの絆を、大きく左右させるとは、思いもしなかった……。

〈神楽 side〉



羽丘へ戻つてきて早々に幼馴染みの2人から、とんでもない仕打ち(?)を受けた。まあそんな事するのも頷ける。だって……2人だって、年相応の女の子だ。6年間、ずっとずっと、我慢していたのだろうから当然……そう俺は思った。

兎にも角にも……俺はさつき、2人に忘れてしまった記憶とは別に、もう1つ約束をした。

それが……『別れてから今に至るまでの約6年間の出来事を話す』と言う約束だ。

この約束に関しては……正直、するべきじゃなかった。どんなに成長した2人でも、俺の過去を知れば……2人は自分を忘れるくらい正気を保って居られないと思ったから。それがきつかけで、幼馴染みとして、彼氏として……2人の傍に居られないと思つたから。

(神楽) (だけど、俺は……2人を信じる。今は選べないけど……2人を幸せにする為に)

恐怖する気持ちを抑え、俺はそう心の中でケツイしたのだ。

その時———。

ドンッ!

(???) 「きゃあッ!」

(神楽) 「うわあ……ッ!」

後ろから、誰かがぶつかってきた。物凄い勢いで走ってきたのだろうか……俺と、声からして女の人は大きく体勢を崩し……女の人は尻餅をついた。

(神楽) 「いつつ……だ、大丈夫君?」

(???) 「いったあく……、もう……!こうなるくらいだったら……もつと前から颯樹君と千聖ちゃんとかける為の準備、しとくべきだったろ!」

(リサ) 「あれ?誰かと思ったら、彩じゃん!」

(友希那) 「そんなに急いでどうしたの?丸山さん」

(彩) 「ふえ?リサちゃんに友希那ちゃん?どうしたの、こんな所で……」

(神楽) 「えつと……2人とも、この子の知り合い?」

リサと友希那に彩、丸山さんと呼ばれたピンク色の髪の女の子は、どうやら2人の知り合いらしい。と言うか……何処か懐かしいワードが聞こえたのは……気の所為かな？

(リサ)「うん！この子は、丸山彩つて子で、『Pastel\*Palette』つて言うアイドルバンドのボーカル担当の高校三年生なんだ♪」

(彩)「初めまして♪まん丸お山に彩りを！Pastel\*Paletteふわふわピンク担当、丸山彩です！イエイツ！」

(神楽)「え、えつと……大江神楽。リサと友希那とは幼馴染みなんだ。今日長野県から帰ってきたんだ。宜しく、丸山さん」

(彩)「彩でいいよ！宜しくね？神楽くん♪」

なんだか……不思議な女の子だな。

率直な感想として、俺はそう思った。しかしPastel\*Paletteとて言いさつきのワードとて……何か引つかかるな……。

そんな事を考えていると、何やら後ろから、人が来る気配を感じた。1人ではなく、2人だ。

(???) 「彩ちゃん？」

(彩) 「ひ、ヒイツ!？」

(???) 「全く……1時間の遅刻。それだけじゃなくて他人に当たって迷惑をかけるのセツト……彩の事だからもしやと思つてちーちゃんと探し回つてたけど……何か言いたいことはあるかい？」

(彩) 「ち、千聖ちゃんに颯樹君……!?こ、これは……その……」

どうやら今度は、彩さんの知り合いらしいこの2人は。1人は金髪の髪を背中まで伸ばした女の人。スラツとした見た目で、女優さんか何かの仕事をやつてるのではと思わせる程。もう1人は、黒髪黒目で、見た感じ俺と同年……に見えなくもないが、容姿が大人っぽいというか、落ち着いてると言うか……。

(神楽) (てか……ちよつと待て。彩、颯樹、千聖、Pastel\*Palette……)

心の中でそのワードを数回繰り返し返して……俺は漸く、さつきまでの懐かしさ反面と、謎の引つかりの正体が分かった。

(リサ)「?……どうかしたの、神楽?」

(神楽)「人違いじゃなければ……上田城の観光ロケ以来かな? 久しぶり、颯樹」

(友希那)「え?」

(颯樹)「あの日のロケの出来事を覚えてたなんてな……こちらこそ、久しぶり神楽」

友希那に至っては口をポカンと開けた状態だ。

まあ此処で取り繕っても仕方ないから、答え合わせとして、彼の紹介をした。

(神楽)「彼の名前は盛谷颯樹。Pastel\*Paletteのマネージャーで……去年の夏頃かな? 上田城にパスパレが観光ロケに来ててね。その際にたまたま散歩でそこを歩いてたら、ロケを手伝って欲しいって頼まれてね……」

(颯樹)「あの時は、ホントに助かったよ。まさかのその日当日になって担当のタレントが体調不良でドタキャンするとは思わなかったから……」

そう……あれは高校2年の夏の頃だ。音楽関連で少し行き詰まったと思いき分転換にと上田城へ散歩に行った。散歩の最中、何やらロケの準備か何かをしている人達とタ

レント……と言うよりかはアイドルが何やら困った表情で話し合っているのを見かけた。それが颯樹と彼女達 *P a s t e l \* P a l e t t e* だったのだ。

(颯樹) 「それよりも、君は長野県出身じゃなかったのかい？」

(神楽) 「いえ、故郷は此処です。俺が彼処に居たのは、両親の仕事の都合だったので」

(颯樹) 「そうか、なら……これも何かの縁ってやつだ。何処かでまた会えるといいな」

(神楽) 「はい。まあその時はアシスト以外で御願したいものですね……」

そう言いながら何気ない会話を2人でしていた。

そして、颯樹が「さて……」と言って、彩さんの方に向き直った。

(颯樹) 「彩？遅刻した件といい、神楽に迷惑をかけたことといい……何か、言いたいことはあるかな？」

(彩) 「だって……まさか服選びとかで寝坊するなんて思わなかったし……人に当たるとは思わなかったー」

(千聖) 「見苦しいわよ彩ちゃん？多少の遅刻はまだしも、1時間。目的地へ行くための電車も既に発車したのよ？オマケに……私達やダーリンを助けてくれた神楽君にも迷

惑かけるなんて……それでも何か、言い訳がしたいと言うのかしら？」

(彩)「ひ、ヒイ……ッ!？」

あ……これ、多分彩さん終わったな。何処ぞのドラマやアニメで見たことある。何かしらの不祥事を犯した人が罰を受ける前のそれだ。

(颯樹)「彩、次のレッスンの日……練習量2倍ね」

(彩)「は、ハイ……」

(神楽)「アハハ……。さて、2人とも、そろそろ行こっか？」

(リサ)「そおだね」

(友希那)「リサのお母さんがまつてるわ。行きましよう」

彩さんの処罰(?)を見届けた俺達は、リサのお母さんが待つ駐車場へと向かっていった……。

その際、ポストンバッグとキャリーケースを2人が持ちたいと言い有無言う前に取り上げられ、空いた腕で俺の両腕に抱きついて……皮肉ながら、所謂両手に花という物を帰省早々にされたのだった……。

∫  
E  
N  
D  
∫



## 3 話

（神樂）「いつ見ても、此処は変わらないな……」

羽丘に帰ってきた俺は、リサのお母さんが運転する車に乗り、昔の我が家まで送ってくれた。母さんの話だと、そこに必要最低限の家具……俺達の荷物が送られてるとの事だ。

因みに、俺の家はリサの家の隣。昔はよく、互の家を交互にお邪魔して、お泊まりとかしたっけ？

そんな懐かしい思い出を振り返りながら、車から降りてトランクに積んだ、自分の荷物を下ろした。

（神樂）「それじゃあ叔母さん。後でまた挨拶に周りに伺いますね？」

「ええ。積もる話とかもあるだろうから……その時はお茶とか用意して待ってるわね」

（神樂）「はい、それでは後ほど……」

そう言つて俺はリサのお母さんにお辞儀をした。そして、リサと友希那も一緒に車から降りた。

(リサ)「それじゃあ神楽？中に入る？」

(友希那)「お邪魔するわね、神楽？」

(神楽)「ああ。多分中は運ばれた荷物とかでいっぱいだろうから、話は少し中を整理してからね？」

勿論忘れてはいない。ひとまず家の整頓を一通り済ませたら、2人に話すつもりだ。しかし……いざその時が刻一刻とせまるに連れて、話ずらさが勝ってくる。

2人は……俺のあの過去を、親身になって聞いてくれるだろうか……そして、それを感じた2人はどんな反応をするのか……。

考えただけで、やはり話すのはやめようとか考えてしまふ自分もいる。だけど……俺、大江神楽は1度決めた事は例え面倒な事でもやり通す性分だ。その時が来たら、覚悟を決めよう。

(神楽)「……ただいま。かつての愛しの我が家……?」

(リサ)「?どおしたの、神楽……?」

扉を開けて直ぐに……俺はある違和感を覚えた。母さんは確かに、必要最低限の家具と俺達の荷物が運ばれである……。

だから、目の前には少なくともいくつかの家具やらが入ったダンボールがあつてもいい筈……なのだが、目の前にはそのダンボールは愚か、そのダンボールが潰されて綺麗に縛られている状態で端に置いてあるのだ。

(神楽)(……ん?ちよつと待て?母さんの言葉……確か「必要最低限の家具と俺達の荷物が運ばれてる」だったよな?俺……達?)

ここで俺は、母さんの言つた言葉のとあるワードに違和感を覚えた。この家に住むのは俺ただ一人。つまり、俺達……神楽達と言う必要がない筈。なら何故、達をつけた?

そう考えていると……その答えが突如として現れた。

(???) 「神楽君くくくッ!!」

(神楽) 「うわぁ……ッ!?!」

(リサ&友希那) 「神楽!!?!」

その人物は、余程俺が来るのをこれでもかと待ちに待ち侘びたのだろう。背中まで下げた蒼い髪をなびかせて、藍色の瞳をこれまた一際輝かせて、俺目掛けてジャンピングハグをかましてきた。

俺はそれをもろにくらい、家の外……なんなら門通り越して向かいの家の塀に激突した。幸い、気絶は何とか免れた。

(神楽) (藍色の瞳、蒼い髪……そして破天荒と言わんばかりの明るい声……もしかして!)

俺は、ジャンピングハグをかました彼女の事を知っていた。  
約6年前からの親友とも言える彼女……

(???) 「神楽君! 会いたかったよ!」

(神楽) 「み、海来!?!どおして此処に!?!」

そう……此処に居るはずのない彼女。親友の蒼導<sup>そうどうみらい</sup>海来が、俺の目の前にいたのだった……。

---

〜リサ side〜

(海来) 「はいどうぞ!緑茶だよ♪」

(リサ) 「ありがとう……」

(友希那) 「頂くわ……」

(神楽) 「……」

さっきの一件から少しして……アタシ達は、リビングで海来って娘からお茶を<sup>ご</sup>馳走になった。

お茶を<sup>ご</sup>馳走になったはいいものの……未だに、信じられない。自己紹介は済んで、彼女から今日に至るまでの話を一通り聞いた事に対して……だ。

聞く話によると……海来は、神楽が此処へ引越す大体1ヶ月前から神楽のお母さんと話をつけていたらしくて、それを行うが為に神楽が通っていた小茂呂高校音科で主席に値する位の好成績を残しているにも関わらず、花女への編入の話をつけたのだ。

そして、引越す1週間前位に、必要最低限の荷物と神楽の荷物と共に、自分の荷物も此処へ送って貰い、海来自身も後を追うように此処へ来たらしい。

偶然にも、アタシ達はその時学校やらバンドの練習やらで海来が神楽の家に居ることに気が付かたなかった。

神楽も神楽で……引越すとは聞いていたものの、編入……もつと言うなら引越す場所やその日時、神楽と暮らす事すらも聞かされてなかったらしい。自分の荷物を置いて直ぐに神楽が叔母さんに抗議の電話をしていたけど、「黙っててごめんね？海来ちゃんのこと、よろしく♪」と言われて通話が終わったのは、また別の話だ。

（神楽）「改めて、紹介するよ。彼女は蒼導海来。中学の頃から知り合って、前いた高校も一緒に、親友になったんだ」

（海来）「蒼導海来です！神楽君も言ってたけど、中学の時から知り合った、神楽君の親友だよ♪」

（リサ）「今井リサだよ♪アタシと神楽の隣に居る友希那とは小さい頃からの幼馴染みな

んだ♪よろしくね♪」

(友希那)「湊友希那よ。リサも言ってたけど、神楽とリサとは昔からの幼馴染み。そして、リサとはRoseliaと言うバンドをやってるわ」

神楽覗く3人で自己紹介をし終えた。どうやら海来は、神楽とは親友で、中学から知り合ったらしい。

(リサ)「それにしても驚いたよ♪神楽にこんな可愛い親友がいたなんて」

(友希那)「ホントね。容姿は燐子とよく似てるけど……性格が全く別物ね」

何気ない褒め言葉を投げかけてみた。何気ない……けど、正直ホントの事だ。とても可愛いし、性格はまるで違うけど、燐子とよく似てる。長い蒼髪を背中まで下ろしてて……あと、おつきい(何がとはいわない)。他にも色んな所が燐子と良くにってるけど……それが思わずアタシが魅力した所だ。

(海来)「燐子……?もしかして、白金燐子ちゃんのこと?」

(リサ)「知ってるの?」

(海来)「うん！燐子ちゃんとは小学校の頃、長野県の松本市で行われてたピアノの講習会で知り合ったんだ！」

まさか、燐子とも知り合いだったなんて……世間って、アタシが思うより広い……のかな？

アタシがそう思っていると、友希那が口を開いた。

(友希那)「貴女とはもう少し、長く話してきたいのだされど……私達は神楽の過去を知りたくてここに来たの」

(海来)「神楽君の……過去？」

友希那がそう言った瞬間……さつきまで明るい声で話してた海来が、トーンを落とすてそう尋ねた。そして……

(海来)「もしかして……神楽君が長野県にいた頃のことを聞きたいの……なんで？」

(リサ)「さつきも言ったけど、アタシ達神楽の幼馴染みの。向こうで何してたのか

……気になるのが普通……」



(海来)「……そんな気持ちで神楽君の過去をしろうとしないで」  
(リサ&友希那)「!?!?」

海来の質問に対して、アタシはもつともな答えを述べた瞬間……海来がそう吐き捨てた。

声で分かる……神楽はおそらく向こうでは沢山苦労したんだって事が。

(海来)「2人には言い忘れてたけど……神楽君のその手の話は、そう簡単にできるものじゃないから。例えそれが……幼馴染みだろうと……ね?これは、私が神楽君の親友である以前に、『理解者』として貴女達にいつてるの。そんな生半可な気持ちで……土足で神楽君の過去に踏み入る様な真似hー」

(神楽)「そこまでだ。海来」

(海来)「神楽君……」

海来がアタシ達に、キツく反論してる最中……神楽が中に入って、それを中断させた。  
てか……理解者って事は……神楽と海来って、親友以上に深い関係に居るってこと  
……アタシ達幼馴染みがいながら……そんな事……。

(神楽)「海来の言いたいことは痛い程にわかる。だからこそ……ここから先は俺に任せたい」

(海来)「……わかった。なら、神楽君の過去……私にも語らせて？ 神楽君本人だけにあの過去を語らせるのは辛すぎるから……」

(神楽)「うん……それじゃあ、2人とも？ 今から俺の約6年間彼処で起きた過去を話す。聞く際に――」

そう言って神楽は、一旦セリフを区切った。

(神楽)「何かあってからじゃ遅い。今後の俺達の関係がどうなるか――その他諸々で恐れてる事があるなら……海来の言う通りにしてくれ」

(リサ&友希那)「……ッ!!」

神楽の目……本気だ。こんな本気そうな……うん、真剣で深刻な顔の神楽は初めて見た……。

それほど……その話は、神楽の過去って壮絶なものなの？

アタシ達の関係が……壊れかねない位に？

ああ……ダメだ。色んなネガティブ思考がアタシの意思をダメにしてく。

(リサ)「アタシ……ッ!!」

(友希那)「リサ……ッ!?!」

とうとうアタシは……怖くなって、その場から立ち去ってしまった……。

く 神楽 s i d e く

(友希那)「リサ……」

(神楽)「友希那は……どうしたいんだ？」

リサが家を飛び出して、暫く沈黙の時間が続いた。

そして、自分が聞こうとしてる俺の過去に対して飛び出したりサに情けをかけたのかは定かではないが、友希那が彼女の名前を呟いた。

それを聞いた俺は、再度友希那に自分の過去を聞く覚悟が出来たかを聞いた。

(神楽)「強制はしない。誰だつて怖い。俺だつて、未だ決心がつかないんだ。だけどそれは……あと一人、友希那。お前の意見を聞けてないから。お前が聞きたいと答えれば、覚悟を決めて話すつもりだ」

(友希那)「私は……聞かわ。でもこれは当然の事だけど、決して生半可な気持ちでの答えじゃない。1人の幼馴染みとして……貴方の身に何があつたのか、私にはそれを知る権利がある。そして……」

そこまで言つて友希那は、深呼吸をした。

(友希那)「貴方を……今度こそ傍で守つてみせる。神楽には、幼い頃から守られっぱなしだから……どんな過去であろうとそれを真正面で受け止めて、寄り添う覚悟よ」

(神楽)「そうか……」

友希那……成長したな。

彼女の意見をきいて、俺はそう思った。

なら俺は……それに応えるまで。

(神楽)「わかった……そこ迄言うなら、俺の過去を話そう。海来、一緒に頼めるかい？」

(海来)「うん。でも……友希那ちゃんは、いいの？後戻りはもう出来ないんだよ？」

(友希那)「ええ。もう覚悟は……出来てるから」

海来にそう言われても、友希那はひかなかった。

それを確かにみた俺は、改めて椅子に座り直し、話し始めた。

(神楽)「全て話す。始まりは……中学へ転校した時だ……」

〈END〉

## 4話

(神楽)「東京から来ました…大江神楽です。よろしくお願いします…」

中学1年として、あのクラスに在席することになったのは、その学校の入学式後の大  
体2、3週間後。

生まれた時から俺は、脳に軽度の発達障害があった。所謂知的障害…… と言うよ  
りかは、ただ単に周りと同じ行動、捉え方などが出来ないと言うだけであり、学校生活  
諸々に支障は今までなかった。

しかし…… 中学に上がってから…特に、俺に関しては転校ということもあり、ク  
ラス全員が初めましてという訳だ。

つまり…… こんな俺を、転校先のクラスメイトらが快く受け入れてくれるかどう  
か…… 不安でいっぱい、正直言って、学校なんて行きたくないくらいだった。

(学級委員A)「これからよろしく！神楽君！」

(女子生徒A)「よろしくね♪」

「よろしくな！」

「よろしく〜！」

朝のSHRが終わると、俺の席の周りに、数多くの生徒達が集まってきた。

やはり…転校生という物は余程特別扱いされるものなのだろうか？今思い返すと、そう思えてくる。

(学級委員A)「何か分からない事があつたら、なんでも頼ってくれ！クラスの皆で神楽君の事サポートするからさ！」

(神楽)「ありがとう、そうさせて貰うよ」

そう言つて、各々1時間目の準備をしに、教室へ戻つた。

あの頃は…転校する前の自分が嘘みたいのに、1日1日が楽しかった。クラスの皆が丸となつて、俺の事を良くしてくれるものだから……。

この過去を忘れてたくても忘れられないのは、こんなにも暖かい日常が……まだこの時はあつたからだ。

だから……あんな事が起こるまで、俺はこの日常がずっと続けば良いのと思つてい

た。

何事もなく転校初日が終わり……放課後、特に何も用がない為俺は一枚のプリントと睨めっこしていた。ん？普通そこは荷物纏めて下校だろ？……まあそうんだけどさ？担任から渡された『部活動』についてのプリントを下校間近に渡された為、どうしようか悩んでいたのだ。

部活動……小学校の頃は父さんに言われて柔道を習っていた。だから、それにならって柔道部に入れば良いだろうって普通はなるだろうが……俺には叶えたい夢がある。その夢のためにも柔道部元い……音楽関連の部活以外には入らないことにした。

しかし……残念な事に、お目当ての音楽関連の部活がこの学校にはなく、あつて吹奏楽と合唱。合唱はまず省くとして、残りは必然的に吹奏楽になるが……管楽器、打楽器等の経験がない俺に吹奏楽なんて務まらない。

(神楽) (だけど、入っておけばこの先自分の夢叶える為に必要な武器になる……未経験でも、そこは入るべきか？ いやしかし……)

まあ、そんな感じで心の中で、自問自答たるものをしながら……現在進行中でこうしてプリントを眺めているのだ。

ある人物が来るまで。



(海来)「あのく……何か部活関連で困ってる事とかあるの？」

(神楽)「……………うん。自分の夢の為に吹奏楽に入ろうかなって……………でも未経験だから大丈夫かなって、自問自答してた所」

(海来)「!!吹奏楽!?!……………あ!私蒼導海来です!それで、神楽君もしかして吹奏楽部に入部したいの!?!」

そう…海来が来たことにより、俺の自問自答Timeは幕を閉じた。因みにこれが、俺と海来の初めての出会いである。

(神楽)「パンフレット見た感じ……………未経験の俺なんかが入って、足でまといにならないかなって」

(海来)「そうだったんだね!でも入ってもいいんじゃないかな?私も未経験だけど……………ピアノやってるし、自分の夢の為に入って見ようかなって思ってたんだ!」

驚いた……………。まさか俺以外にもそう思った考えて入ろうか否か考えてた人が居たなんて。

なら……入ってみても、良いのかな？

(神楽) 「そうだね……一応、次の週に行われる見学で覗いて見ようかな？」

(海来) 「ホントに!? 私の友達、運動部にするって言ってたから……心細かったんだよね  
！」

何だか、転校初日というのが嘘みたいだ。海来と話していると自然と気軽に話せてる様に思う自分がいた。

そんなこんなで、入る予定の部活が決まり……やる事も決まった為、さて帰ろうと思っ  
た最中の事だ。

(海来) 「ねえねえ！私と一緒に帰ろ？」

(神楽) 「……え？」

この子今なんて？初対面の俺に……それ聞く？

しかも、自分でさつき友達がどうかかって言ってたなら、その友達と帰れば良いの  
と思った。

(海来)「実は……運動部の見学って、今週からはじまってるんだ。なんせ、早く新入部員集めて中体連に備えるって話だし……って事で、私の友達見学に行っちゃって、1人なんだ……ダメ？」

(神楽)「う……」

海来はそう言つて……恰も小動物のつぶらな瞳でそう訪ねてきた。

昔から……その目で何か頼まれると、断れなくなるんだよな俺……。

(神楽)「……わかった。なら途中まで一緒nii——」神楽君と家隣だから家まで一緒だよ♪「さいですか……」

詳しく聞いて見ると……どうやら春休みに、俺が引越して来た所をたまたま目撃したらしい。

そう言えば……お隣さんの苗字『蒼導』だったし、母さん達が挨拶周りしてたから俺の事耳にするよな……うん。

そうと決まれば……出すべき答えは1つだな。

(神楽) 「それじゃあ蒼導 s a ー 「海来でいいよ♪」海来?俺で良ければ……一緒に帰ろ?」

(海来) 「うん!」

そう言つて俺は、海来と一緒に下校することになった。

まさか転校初日から、色々と前進するとはな……。

その時も……海来と一緒に帰りながら、俺はこの先もずっと……卒業まで何不自由なく学校生活を遅れたらと願つた。

そう……あの日が来るまで、俺はずっとずっと……願ひ続けてた。

く E N D く

## 5話

(神楽)「あ……」

転校して1ヶ月程したある朝……学生服に着替えてる時だった。学ランの第1ボタン  
の留め金具が無くなってる事になってしまっている事に気づいた。そう言えば、昨日辺りやけに第  
1ボタンが緩いと感じたんだよね……。

残念ながら、変えのボタン及び留め金具は持ち合わせてない。

(今日、服装チェックだったよな……このままだと、引つかかって生徒指導……それ  
だけはごめん蒙りたい)

(神楽)「海来が待ってるし、とりあえず学校に行くか」

きっと海来なら、何かその手の解決策を知ってるだろう……そう思い、家を出  
て……既に待っていた海来と共に学校へ登校した。

(海来) 「それなら……購買に行くの良いよ！」

(神楽) 「購買?……確か、職員室前にあるやつだよね？」

(親友) 「ああ! 因みに、俺購買委員だから色々教えてやるよ!」

学校に着いて、海来と、親友の男子生徒に第1ボタンについて話すと、海来が購買に、学校生活に必要な物が売ってる購買に行けば換えの第1ボタンがあると教えてくれた。さらに親友は購買委員らしく、そこについて教えてあげるとの事だ。

因みに、親友とは海来と出会ってから1週間程後にお互いの趣味があり、休日に海来との3人で遊ぶ程の仲になった。

(親友)「良かったら、海来も一緒に行こうぜ！」

(海来)「うん！そのつもりだよ！だって親友だけだと頼りないからね♪」

(親友)「ちよっ！それどう言う意味だよ！」

(神楽)「まあまあ…。2人で行くよりも3人で行けばそれなりに得るものがあるってやつだろ？」

(海来)「そ〜言う事♪」

まあ正直な話……自分の不始末だから自分で方つける為に1人で行きたいのが本音だが、2人とも俺の親友だし、着いて来て色々教えてくれる分には良いのかな？そう俺は思った。

キーンコーンコーンコーン……♪

(神楽)「兎に角……買いに行くのは2時限目の後だね。一応風紀委員の人に一言声掛けしておくよ」

(親友)「それがいいな」



(海来)「そくだね♪」

S H R 開始の予鈴が鳴った為、互いにそう言葉を交わして2人は席に着いた。俺は、先生が来る前にクラスの風紀委員の生徒に服装チェックが始まる前に一言、断りを入れた。

兎にも角にも……購買は朝、2時限目休み、昼しかやってない為……そこへ行くのは2時限目休みの後となった……。

そしてそれが……平穏な日常が壊れるカウントダウン1つ前となるなんて、知る由もなく。

---

(神楽) 「ふう……何とか買えたよ……」

(親友) 「まさか……財布持ってきてないとはな……」

(海来) 「仕方ないよ。神楽君購買の事存在しか知らなかったんだし、まさか今日活用するなんて思っても見なかったんだからさ」

(神楽) 「その件に関しては……ホントにごめん、海来」

2時限目休みになり、約束通り3人で購買へ向かったまでは良かった。しかし……購入者である俺が財布を忘れ、結果海来が支払ってくれたのだ。海来がフォローしてくれたとは言え、申し訳ない思いで、3人で教室へ戻って行った。

(海来) 「謝らなくていいよ！私達親友でしょ？助け合うのが当たり前じゃん♪」

(神楽) 「でも……払ったお金。ちゃんと返すよ。それは当たり前だからね」

(海来) 「お金も良いって！親友のよしみで今回はチャラにしてあげる！その代わり……」

貸一つね？」

(神楽)「ほ、ホントにすまー (海来)「謝らなくて良いってばー!」うむ……」

ホントに申し訳ない思いでいっぱいだ。海来はそう言ってるけど、ちゃんと返したい。借りたものは返す。これ常識だからね? ウン。

そうこうしてる内に、教室に着いた。早速、換えの第1ボタンつけないとだな……そう思っていた矢先、少し問題が発生した。

(学級委員A)「それでさく!今度の休み皆で何処か遊ばない?」

「いいね〜!まあでも、部活あるからその後だなく!」

「行く場所は……ゲーセンとかか?映画も良くね〜?」

「それもそうだな〜!」

(神楽)「何あれ……」

(親友)「学級委員Aとその友達だな……神楽の席の周りで屯してるよ……」

(海来)「てか……学級委員A自分の席座らずに神楽の席座ってんじゃん……」

問題と言うのは、俺の席に学級委員Aが座って、そのまわりにAの友達（親友が言うには）が数人学級委員Aと雑談に花さかしていたのだ。Aの友達に関しては見覚えの無い生徒で、恐らく他クラスの生徒だとその時思った。

（親友）「てか次の授業移動教室じゃんかよ……アイツら早くどかないと……神楽間に合わないじゃんか……」

（海来）「ホントだよ……これで神楽君遅れたらどう責任取るつもりなのかな……？」

（神楽）「ま、まあ……話すだけ話してみるよ。学級委員A君は一応話せば分かる人だから……」

そうやって俺は、俺の席で屯してる学級委員A達の方へ歩いて行った。

（神楽）「えつと……A君？」

（学級委員A）「ん？神楽君じゃん！どうしたの？」

（神楽）「そこ……俺の席なだけどき？次の時間移動教室だし、その準備もしたいから……自分の席で話してくれないかな？」

（学級委員A）「あ、もうそんな時間か……でももうちよつとまっててよくもう少しで

話終えるから〜」

(神楽) (ええ……)

まさかの予想外の答えが返ってきた。そもそも何で俺の席で話してるの？自分の席で話すればいいじゃんか……。

心の中でそう思った俺は、仕方なしに彼らが話終えるのを待った。

しかし……待てど待てども、話終える気配すらない。

(神楽) 「A君？そろそろ自分の席に移ってくれないかな？このままだと授業おくれる……」

(学級委員A) 「できでき！この間のアニメさ〜……」

「だよな！あそこでまさかの展開……想像すらしなかったぜ〜！」

「アハハハハハ……!!」

おい嘘だろ……聞く耳持たないって……早くしないと授業ホントに遅れるんだけど……。

その後も、俺は何度か学級委員A君に掛け合ったが……彼らは一向に俺の席から離れ

る素振りを見せなかった。

(海来) 「か、神楽君……」

(親友) 「俺達……先に行ってるからな？」

(神楽) 「うん……ごめん2人とも。先いってて」

仕舞いには海来と親友はそろそろ行かないと不味いと思ったのか、先に行ってしまう始末。

てか……そろそろどいてくれないとホントに遅れる。

俺はそう思って……余りやりたくはなかったが、少しキツめに言うことにした。

(神楽) 「いい加減にしてよ！何度もどいてって言うてるじゃんか!? A君も早くしないと授業遅れちゃうんだよ！そんな悠長に会話してて言い訳!?!」

(学級委員A) 「……!?!」

「!?!」

ホントにやりたくなかったのだが……ホントに、互いに取り返しがつかないと思い、

学級委員A君の為にも声を少し張り上げ、さつきよりもキツく俺はそう言った。

意外だったのだろうか……俺の言い方に対して学級委員A君は驚いた顔をしていた。A君だけで、なく……周りの生徒全員が。

(学級委員A)「あー、ごめん神楽君。少し話し過ぎたよ」

(神楽)「大丈夫……こつちこそごめん。少しキツく言っちゃって……」

(学級委員A)「いいって！俺達が悪いんだからさ！ほら……お前らも早く教室にもどれよー」

「そくだな」

「それじゃあ、また後でなく！」

(学級委員A)「よし、俺も早く準備しないと……神楽君も、早く準備して行こうぜ！」

(神楽)「そくだね」

多少荒くなったが、あの場をどうにかする事が出来た。

その後俺と学級委員A君は、急いで準備して次の授業の教室へ向かったのだった。

授業には何とか間に合いはしたが……肝心のボタンをつけ忘れて、教科担任に指摘されたのは……内緒だ。

そして、あの後……特に何事もなく学校生活が終わった。

しかし……あの出来事をきっかけに、学級委員A初めとした、海来や親友以外のクラスメイト……あと先生達の態度が変わった事に対して、俺は何の違和感など感じず過ごしていった……。

それが……その日から卒業間近になるまで彼らが俺を虐めてるとも知らずに。

---

〈海来 side〉



(海来)「ん〜！今日も部活頑張った〜！」

授業が終わって、部活も終わった私は……家の自室のベッドにて仰向けで伸びをしながらそう呟いた。

皆知らないから教えるけど、私と神楽君は、1ヶ月程前にあつた部活見学で吹奏楽を見学した後……体験入部もして、晴れて吹奏楽部に入部したんだ♪

因みに親友は剣道部。元い家が剣道の家でもあり、親からも剣道部に入部しなさいって言われてたらしいんだ。

おっと、忘れるところだった。私はピアノができるって事で、打楽器パート。神楽君は主に金管と打楽器パートから引つ張りダコ状態で……私の猛烈な推薦（本音は神楽君と一緒にパートが良かったからそれらしき事を先輩に伝えた）によつて、神楽君も打楽器パートに所属することになったんだ♪

(海来)「それにしても、神楽君今日も練習してる姿かつこよかつたなく♪なんせ飲み込みがすぐく早いからどの楽器もそつなくこなせて……顧問の先生も夏コンのレギュラー入りのお墨付きを貰うくらいだもん。ああ……推しの頑張る姿って儂いよね、ウン

♡  
「

神楽君もそうだけど、私もそう言えばお墨付き貰ってたや。聞く話によると、ピアノができる人達が今までいなかったから、私が入ったことよってそれが叶ったって、先輩達言ってたから……当然なのかな？って、その時思った。

ピロリン♪

そんな中、誰かからLINEの通知が届いた。

送り主は……私の友達である、女子生徒Aちゃんからだった。

Aちゃんとは小学校高学年からの付き合いで、小学校の頃はよく遊んだりした。けど今は……学級委員A君とどうやら付き合い合ってるらしく……少し疎遠っぽい感じになってるんだ。

（海来）「女子生徒Aちゃん……どうしたんだろ……ッ!？」

そう呟きながら、私はLINEを開いてAちゃんのトーク画面を確認してすぐに……

絶句した。

内容は……こうだ。

(女子生徒A)『やつほー。……今日の2時限目休みの時に、私の大事な学級委員Aが神楽君にキツく当たられたのを見ちゃってさ。幾ら神楽君でも、私の彼氏に酷いことしたのが許せなくて……彼氏も神楽君にああ言われて物凄く怒っててさ？だからね……明日から神楽を「いじめる」事にしたんだ♪』

……え？

彼女は、一体何を言ってるの？あれはどう見たって学級委員A君が悪いじゃん。幾ら付き合ってるからって、その現場見てたんなら、彼女として注意するのが当たり前じゃないの？

私は今思ったことはあえて言わずに、どういうことか聞くことにした。

(海来)『なんでそんな事するの？』

(女子生徒A)『なんでって……私の彼氏に酷いことした神楽を懲らしめるからに決まってるじゃん♪それくらい察してよね？』

(海来) 『いや、訳わかんないよ。それだけで神楽君を虐めるなんて間違ってる。寧ろその場に居たんなら、彼女として注意とかしなかったの？しかも神楽君の事呼び捨てにしてるし……』

(女子生徒A) 『いやだってき？私の彼氏を気づつけた奴をどうして君付けしなきゃ行けないの？それに、彼女として神楽を目の敵にするのは当たり前じゃん。あんな酷いこと彼氏が言われてる姿みてて……言った奴に助け舟だす方が間違ってるんだよ』

……信じられない。その一言以外出てこなかった。あの優しいAちゃんが、自分の彼氏傷付けられたって理由だけで神楽君を虐めようとしてる。

そんなの……させない。それに——

(海来) 『そんな事もしお父さん……いや、校長先生が知ったら幾ら父親だろうと必死に停めるんじゃない？』

そう。女子生徒Aはあの学校の校長の一人娘だ。そんな事してると、彼女の父親が知れば、そんな計画おじゃんになるに決まってる。

……そう思っていたが、早計だった。

(学級委員A)『そんな事なかったよ？私のパパ、その事話したら2つ返事でそれを許可してくれたよ？しかも、パパもパパで、明日から職員全員で神楽の事虐めるって言ったよ？やっぱパパは優秀だね♪』

嘘でしょ……？幾ら父親でも校長だよ？そんなの認めてどうすんの？しかも、職員全員でって言ってた。もしかして親子揃って馬鹿なの？普通止めなよ……。

(女子生徒A)『だからさ、海来もアイツの事虐めようよ！今さっきグループLINEでアイツ虐める為の『クラスLINE』ってグループ作ったんだ♪そしたらアイツと海来、そして親友以外全員はいつてくれたんだよ♪ね？友達としてのよしみでしょ？』

はあ……彼女の言いたい事はよくわかった。しかも、呼び捨てからアイツになって……挙句の果てには『クラスLINE』という名のグループLINEを作る始末。しかもこの馬鹿2人に載せられすぎでしょ皆……ホント呆れるっただけありやしない。

だから……この馬鹿に返すべき私の言葉は、その話を持ちかけてきた時点で決まっていた。

(海来) 『最低。友達として信じてたのに……。無能な奴の彼女になるとなった本人ですら無能になるんだね？アンタの気持ち……。よくわかった。だからもう金輪際話しかけないで関わらないで。これで絶交だからね？バイバイ』

『学級委員Aをブロックした』

(海来) 「はあ……………」

なんか、一通りあの馬鹿に愚痴吐いたらスッキリしたかも。

でも、これで終わりじゃない……。

あの馬鹿は言った。明日から神楽君と私、親友以外のクラスメイト全員と、校長初めとした職員全員が……。寄って集って神楽君を虐めるって。

そんな事になったら、神楽君はタダじゃ済まされない。

(海来) 「そんな事……。させない」

私の推しが苦しんでる姿を、見たくない。

その為にも……

(海来)「……もしもし親友？話があるんだけど……」

私はすぐさま親友のトーク画面を開いて、通話し始めた。

神楽君……私達が、貴方の事……守って見せるから。絶対に……一人にはさせないから！

そう……心の中で、強くケツイしたのだった……。

〈END〉

## 6話

(神楽)「……あれ?ない……」

それは、突然の出来事だった。2時限目休みが終わって3時限目の準備をしようと思いい、筆箱の中のシャーペンを漁ってたら……俺が愛用していた水色のクルトガが無くなっていった。

(神楽)(もしかして……何処かに落としたのかな?)

2時限目は移動教室だった為、移動先の教室へ落としか、戻ってくる最中に落としかたかだ。

(神楽)(仕方ない……少しだけ時間あるし、探すか)

3時限目開始まで、少し時間があるのを確認した俺は、仕方なしにと……落としかたであらうシャーペンを探すべく席を立とうとした。その直後だ……。

(学級委員A)「ん?どうしたの神楽君?もう少しで3時限目始まるよ?」

(神楽)「あ……えっと、何処かで俺の愛用してたクルトガ落としたっぽくて……少しだ



け時間あるから、落とした所風潰しに探そうとおもって」

(学級委員A)「マジか……！俺達探すの手伝うよ！」

(神楽)「いや、それは申し訳ないって言うか……それで皆授業に遅れたら不味いよ……」  
(学級委員A)「そんな事言うなって！皆で探せば早く見つかるからさ！それに、ウチのクラスメイトが困ってたら、皆で助け合う。それは当たり前のことだろ？」

(女子生徒A)「そくだよ！神楽君は私達のクラスメイトだもん！皆で探そうよ！ね？皆！」

「そくだよ！皆で神楽君のクルトガ探そうぜ！」

「私も探すよ！」

「神楽君！何処で落としたかわかる？」

(神楽)「皆……」

この時俺は、一人一人思いあえて助け合う事ができる、良いクラスだと思った。  
例えそれが……『演技』だったとしても。

(神楽)「うん……何処かは詳しくは分からないけど……落とした可能性のある場所なら……」

(学級委員A)「よし！そうと決まったら……皆、神楽君のクルトガ探すぞー！」  
『おお~~~~~……ッ!!』

ホントに……大袈裟だが、かくして俺のクルトガ探しが短時間だが始まった。

(海来&親友)「……………」

但し2名……恰もそれらが全て『演技』だって事をお見通しみたいな表情をしてる人物が此方の様子を伺っていた。

少しして……学級委員A君が見つけてくれて、ギリギリ授業に間に合った。俺は探してくれたクラスメイト全員に、お礼を述べたのだった……。

しかしそれは……ほんのの序章、序の口に過ぎない――。

(神楽)「しかし……何だかなあ……」

授業も終わり、部活も何事もなく終わって海来と2人で下校している。

あの一件があつてから、クラスメイト、教員の様子が見てわかるように変わった。クラスメイトの方では学級委員A君や女子生徒A初めとした俺、海来と親友以外の全員の俺に対する態度が少し冷たくなつた。まあそれに関しては転校した時から予想は付いてた。それに……冷たくなつたと言つても、多少「ん？何時もと違う？」位の程度にしか変わつてないし、クラスの皆もきつと、転校してもう1ヶ月以上経つたからそろそろ普通に接しても良いだろうって思つたのだろう。

(神楽)「といつても……あれから1年経つただけどね……」

教員だが……それに関してもクラスメイトと同じ感じだと、俺は思う。大人だから、多少当たりがキツく感じはしたものの、結局は俺がクラスメイトに対して思つた事と同じだった。

なら何故そんな浮かない顔をしてるのか？

実を言うと、あの一件から、物がどこかへ無くなる事件が日に日に増えていったのだ。最初は文房具かルーズリーフ、あとはノート辺り。しかし、それが日に日に無くなる量

や種類が増えていき、仕舞いには教科書やノート、筆箱とかが無くなる始末だ。

小さな物が無くなるまでは良かった。しかし、それが段々と増え、更には教材すらも無くなるとなると、流石に違和感を覚えた。

(神楽) (紛失防止として、ちゃんとどこに何があるか確認した上で次の授業に向けて備えてると言うのに……もしかして……いや、それはない)

一瞬、頭の中で疑いたくない人物達の面々が浮かんで、俺は即座にかぶりを降った。

(神楽) (だって……俺の持ち物が無くなる度に皆総出で探してくれるんだ。まあ1年前と比べたら探してくれる人が減ったっちゃあ減ったけど、それでもまだ多いほうだし、無くなったものはその日に見つかる。中には誰かが誤って持ってた時もあったけど、別にその人に悪気があったわけじゃないと思って、注意喚起だけで済ませた)

そう……だからこれに関しては、きつと、俺の物の管理不足によつて起きた物。その時はそう思った。

だけど、正直な話これ以上自分の持ち物の紛失が相次ぐとその懸念が拭い切れなくなってしまう。

(神楽) 「なら……一体どうすれば……」

(海来) 「神楽君？」

(神楽) 「…ッ、済まない。少し物思いにふけてた所。どうしたの?」

(海来) 「あ、あの……さ? 今日この後……暇?」

(神楽) 「え?」

さつきまで、考え事をしていた為か……海来のその一言に対して俺は腑抜けた声で応えてしまった。

(海来) 「もし……もしも……だよ? 神楽君が良ければ、今晚家に泊まらない? ……なんてね? ほ、ほら! 今日から神楽君の両親仕事で出張に行つてて帰り遅いでしょ? だから今日の朝お母さんに頼んで神楽君の両親に一言断つておいて貰ったんだけど……ダメかな?」

(神楽) 「い、いつの間に……」

一応、こう見えて自炊とか出来るから出張の時とかは別に苦にならない。それは海来にも話した筈なんだけど……後で母さん達に詳しく話を聞か。

(海来) 「で、でも……神楽君の都合もあるだろうから……無理にOKしなくても、良い

ん……だよ？（ ・？ー？ ）

（神楽）「ウグツ……」

そ、その顔……止めておくれ海来さん？そんな恰も小動物が物ねだる時の顔させると、ホントに断れなくなるんだよ……。

（神楽）「はあ……分かった。別に家隣だし、迷惑だなんて思つてすらいないから……」

（海来）「やったあ！じゃあ決まりだね♪じゃあ早速……私ん家へ〜Let's Go  
!!!」

（神楽）「えつちよ……引つ張んなつて……ツ!？」

こうして俺は……海来に腕を掴まれて、猛ダツシユで海来の家へ連れてかれたのだつた……。

---

……海来の家に着いた俺は、ひとまず彼女に「着替えと準備だけさせて」と一言おいで、自分の家に戻った。

泊まる準備が出来た後……再度海来の家に来て、お邪魔することになった。

因みに……家にかかる前に自宅にて母さん達に事情を聞き出した所……曰く、「海来ちゃんはどうしても今日がいい！」と海来が叔母さんにそう言ったらしく、休日も偶に互いの家に泊まるから良いだろうと言う感じでしたとの事だ。

(神楽)(色々と気になる所はあるが……今は海来と両親との憩いの時間を共に過ごさせて貰おう)

そう思いながら……俺は海来の御家族と一緒に、夕飯を共に過ごさせて貰った。



それから暫くして……俺は海来と色々と学校の事とか、部活の事……あとは趣味や雑談を客室（普段泊まる時に俺が利用する部屋）にて明け暮れて、その後はお風呂に入り、さて明日に備えて寝よう……そう思った時だ。

（海来）「神楽君……少し、良いかな？」

（神楽）「ん？海来か……どうぞ」

（海来）「それじゃあ……お邪魔するね……」

（神楽&海来）「……………」

（神楽）「えっと……何か俺に用？」

海来が部屋に入ってきたと言う物の……中々喋り出さない海来を見て、俺は……暫く続いた沈黙を破り、海来にそう尋ねた。

(海来) 「神楽君……今日、なんの日分かる？」

(神楽) 「今日……？」

再び腑抜けた声で応えてしまった。今日はなんの日と言われても……平日だったし、これといった国民的な出来事なんてなかった筈……

「……いや、ちょっと待てよ？」

しかし、少しだけ自分の脳内を整理して……海来が言いたかったことが分かった。

(神楽) 「海来と出会って……1年が経つのか」

(海来) 「!!……覚えて……くれたんだね？」

(神楽) 「うん。今思えばあの時から海来には世話になりっぱなしだったな……それに対しての礼すら殆ど出来てない」

(海来) 「その事は良いって！私が神楽にしたくてただけだし……それに、神楽の事が

S  
————ハッ!?! / / /

俺の言った一言に対して海来が弁解してる最中……咄嗟に海来が顔を赤くして両手で出かけた言葉を噤んだ。

(神楽) 「俺の事が……何?」

(海来) 「…………… / / /」

(神楽) 「海来——「一緒に来て」ってちよつと!?!」

またしても黙り込んだ……ただし、今は顔を赤くして黙り込んだ海来に、俺はもう一度尋ねた瞬間……海来に手を引っ張られて、どこかへ連れてかれた。

連れてこられたのは……海来の部屋だった。

やはり1人の女の子と言うべきなのか、周りは少し薄ピンク色の壁紙で囲われていて、白い音符の模様が所々にあるピンク色のカーテン。

後は勉強机に、大きめのベッド。そして音楽関連の本や雑誌、楽譜などが仕舞われている棚が置かれている。

一応……泊まりに来た時にちよくちよく入室した事があるから、驚きはしなかった。

それよりも……今こうして部屋に連れてこられた状況に、中々理解が追い付けず、オドオドしてる自分がいた。

(神楽)「ちよつと海来、一体どうさーうわっ!？」

海来に事情を聞き出そうとした刹那、海来に突き飛ばされてベッドに仰向けで倒れる俺。そして……それに覆い被さる様に海来が倒れて……俺の唇と、自分の唇を重ねたのだ。

(海来) 「ん……んちゅ……んんツ♡」

(神楽) 「……んはあ……、っ！海来!!」

(海来) 「ツ!?!／／」

(神楽) 「……話を聞かせてくれ」

漸く解放された俺は、すぐさま海来の両肩を掴んでベッドの端へどかして、起き上がった。そして……こんな事をした海来に、どうしてこうしたのか……訳を聞くことにした。

そして海来は……どこかとろんとした目で、しかし、何処か覚悟を決めた様な表情でこう応えた。

(海来) 「私……神楽君のことが好き」

(神楽) 「……ッ!?!」

今にも掻き消える様な小さな声だったが……確かにそう聞き取れた。

(海来)「最初はね?親友のまままでいようって……友達のまままでいようって……思った。だけど……貴方がなれない学校生活を、部活動を頑張ってる姿を見て……どんな事があってもめげないで前へ突き進む貴方の姿を傍で見ると……そう思う自分がいたの」

(神楽)「……………」

俺は黙って海来の話聞くことにした。出すべき答えは決まっていたが、それを今答えてしまったら……彼女の想いが無駄になってしまう。そう思ったからだ。

(海来)「親友として、何時もそばにいて……笑いあって、ふざけあって……時には喧嘩もした。だけど、そんな貴方と過ごす時間が何時しか恋しくて、尊くなつて……それと、貴方と言う愛しき存在と共に守りたい。そう、思うようになった」

「だから……………」 そう言った海来は、1回、2回と深呼吸をして、こう言った。

(海来)「これからもずっと……貴方と過ごす愛しき時間を、貴方と共有したい。そして……それを私に護らせて欲しいの。イキナリでこんな身勝手な感じだけど、私蒼導海来は……貴方の事が好きです。付き合ってください」

そう言い終えた彼女は、俺をジツと見詰めた。その目は……今までの無邪気で、明るい海来の瞳ではなく、覚悟を決めた一人の女性としての強い瞳をしていた。そんな目をした海来を見て……おれは天井を見上げ思い返した……。

―――初めて海来とあつた時の事。

―――海来と一緒に吹奏楽に入部した時の事。

―――海来と初めて泊まりあつた時の事。

―――海来と親友とで遊んだ時の事。

―――海来と意見が食い違い、喧嘩した時の事。

―――俺が困っていた時、親友と共に寄り添ってくれた時の事。

どんな時もずっと……彼女は親友と共に俺に優しく接してくれた。そして、その優さが、一人の女性として……俺に想いを伝える手段となつた……のかもしれない。

(神楽) (はあ……ダメだな、俺は。果たすべき約束があると言うのに……彼女の必死な想いに応えようとする自分がある。リサ、友希那……)

出すべき答えは決まつてる。そのはずなのに……

そう思ってしまった以上、それを折らなければいけないんだろうな……。

2人の幼馴染みの姿が頭の中でイメージした瞬間……俺は1度出した答えを取り下げて、海来に伝えることにした。

新しい……俺なりの答えを。

(神楽)「俺には……2人の幼馴染みがいる。その2人に約束したんだ。『2人を幸せにするべく……また故郷に戻ってくる』って。だから……君とはずつと付き合う事は出来ない」

(海来)「……ッ!!……そう、なんだね……」

刹那、海来の瞳から涙が零れ落ちた。それを見た俺は、自分なりに考えた答えだったにせよ、心が裂けそうだった。

だけど……伝えるべき事は、もう1つある。

(海来)「そう……だよ。神楽君には……私なんかよりも幸せにすべき人がいるんだもん。だから……さっきの事は忘れて?今までどうりこれからは親友とし……」  
「海来」え?……んむッ!」



俺がもう一つ伝えるべき事を伝える前に……海来がさっきの事を無かつた事にしようとした為、俺はそれを言い切る前に……海来がさっきしたように……今度は俺が海来の唇を自分の唇と重ねた。

(海来) 「んはあ……ッ!? / / か、神楽……君!?! / /」

(神楽) 「分かっではいたけど……海来。君にはまだ、伝えるべき事がある」

(海来) 「……え? / /」

唇を離し、更に顔を赤くしている海来に、俺はもう一つ伝える事を伝えた。

(神楽) 「俺はさつき……ずっと付き合う事は出来ない。そう言ったんだ」

(海来) 「ずっと……ッ!? そ、それって……ッ / /」

やっぱり……親友……否。俺の事を好きだと想ってくれた海来彼女は今までよりも話易い。

(神楽)「幼馴染みと交わした約束を果たすその時まで……俺の……心の支えになつてくれないか？」

(海来)「……うん、うん……！／＼／＼よろしくね、神楽君！神楽君の彼女として……『理解者』として、私……その時が来るまでずっとずっと、貴方の傍にいるからね！」

(神楽)「ああ。改めて……これからは恋人同士……有限な関係になっちゃうけど、よろしく。海来」

そう言つて……再び俺と海来は、互いの唇を重ね合わせた。

暫くその時間が続いた後……「おやすみ」とそう言つてベッドから降りて、海来の部屋から出た。

部屋から出る直前……「また後でね」と、少し恥し気な声で海来がそう返事してくれた。

そしてその日の夜は……何時ものお泊まりよりもグツズリと眠る事ができた。

(神楽&海来)「行つてきます」

「行つてらっしゃい、2人とも！」

「頑張つて行つてくるのよ2人とも〜♪」

海来の両親に見送られながら、俺と海来は手を繋いで登校した。

何だかとても恥ずかしいが……新鮮味と言うやつなのだろうか？それが勝つて、その恥ずかしさも学校に着く頃には無くなっていた。

（神楽）（約束を果たすまで……よろしくな、海来）

そう思いながら、俺は海来と離れて、自分の席について……SHRが始まるのをまつた。

(担任)「昨晚……親友君が、部活の帰り道にトラックに引かれて入院しました」

(神楽&海来)「……………え??」

付き合って初日が……思いもよらぬ悲報から始まるなんて……誰が思った事だろうか……。

くENDく

## 7 話

親友が入院したとの知らせを聞いてから1年がたったある日……俺はさらなる悲報を耳にした。

それは――『海来がトラックに引かれて入院した』と言う知らせだ。

その知らせを聞いた俺は……暫く抜け殻の様になっていた。

何をするにしても、されるにしても……興味、関心、反感等1ミリ足りとも感じなかったし、示さなかった。

親友には悪いが、彼が入院してからの1年間は……海来が親友の分まで寄り添ってくれた為、多少の寂しさはあつたにせよ、何とか頑張つて学校生活を送れた。

けどそれは……俺の傍に海来と親友が居たから。俺の支えになつてくれた海来までもがいなくなつて……現在に至る。

あと言い忘れたが……海来も親友も、打ちどころが悪かつたらしく、海来はまだしも親友は未だに退院の目処が経っていない。

(神楽) (海来、親友……2人がいなくなつた今の俺は、ガラクタの人形同然なんだ。余りにも身勝手だけ……早く、2人に会いたいよ……)

そう心の中で呟いて……今も尚部屋の中で抜け殻状態の俺は眠りについた……。

（神楽）「はあ……今日もか……」

今日も今日とて、何時も通り学校生活を送ってる中……もう何回目なのか、数えるのも馬鹿らしくなるくらいのも同じ事が起きた。

同じ事……と……言うのは詰まる話私物の紛失だ。

日に日に幾つもの物がどこかへいき、それが起こる度に学級委員Aや、女子生徒A……いや、彼女に関しては今年学級委員になり学級委員Bと呼ぶべきか……兎に角この2人が筆頭となつて、無くなった物をクラス総出で探してくれた。

有難いこの上無いのだが……流石に何回も物が無くなる度にその繰り返し送るものだから、こんな俺でも、流石に違和感を覚える。

（神楽）（疑いたくない……だけど、つい疑つてしまう……俺は一体……誰を信じればいいんだ……？）

遂には人間不信に陥りそうになる始末。

2人が居ないと……俺ってこうも脆いんだな……。

(学級委員B)「神楽君！見つかったよ〜！」

(神楽)「ありがとうBさん……A君も何時もありがとう」

(学級委員A)「良いって！困ってたらお互い様だろ？また何かあったら……何時でも力になるからさ！」

(神楽)「ありがとう……」

こう言ったやり取りがあるからだろうか……何度疑っても、この2人やクラスの皆を疑うことが出来ない。

それに……疑いたくない理由としてもう1つ……2年前、クラスの皆が転校仕立ての俺に優しくしてくれたあの記憶を、忘れる事が出来ないからだ。

しかし……今の俺は抜け殻も同然。2人にああ言われてもから返事地味な感じで感謝を述べる以外出来なかった……。

(神楽)「痛つ……！な、何するんだよ！」

「何って……何時ものじゃれ合いだつて〜！」

「毎日恒例のじゃれ合いだつての！そろそろ察しろよな〜！そらッ！」

時間変わつて2時限目休みの時……俺はクラスの生徒ら数人に只今小突かれています。

会話で察せれるだろうが……このやり取りは今に始まったことじゃない。これに関しても、数えるのを辞めた位何回もやられてる。しかも……私物紛失の内容が苛烈になるに連れてそれらが起きた。無視やちよつとした脅迫もされたっけ？

特に給食の時は酷かった。え？何をされたか？……思い出したくな位ほどの事をさ



れた……とだけ言っておこう。

(神楽) (にしても……この小突きに関しても、なんの反感すら感じ無いとは……やっぱり今の俺……)

(学級委員B) 「ちよと！いい加減にしなよ！神楽君可哀想でしょ!？」

(神楽) 「……え？」

何時もならある程度小突かれて、自然と終わる感じだったのに……今日は違った。

なんと……学級委員Bさんが、間に割って入って俺を助けてくれたのだ。

(学級委員B) 「大丈夫神楽君!?!怪我とかしてない？」

(神楽) 「う、うん……ただの何時も通りのじゃれ合いだから「じゃれ合いでも怪我したら大事なんだよ!?!」 ぐ……ごめん」

学級委員Bさんの言いたい事はご最もなんだが……この人、何時もよりかなり積極的では? そう思った。

そう思った刹那、Bさんが俺の手を取り走り出した。

(神樂)「なっ…Bさん!?何処へ行くつもり!？」

(学級委員B)「いいから!神樂君は黙って着いてきて!A君には2人は保健室に行つたつてそう伝えるように言つてあるから!」

言動から察するに保健室に向かう積りは無さそうだ…:…となると一体何処へ?

それを聞く暇もなく、俺は為す術なく彼女に引つ張られながら教室を出たのだつた…:…。

---

ところ変わり、上田病院病室——

(親友)「神楽……今頃何してるんだろうな」

(海来)「一応LINEで安否……と言うより毎日の様子を見舞い代わりに教えてって言うてある。毎日の学校生活の様子を何時も教えてくれてるから——大丈夫だと思うけど……」

(親友)「あの時……チラッと見えたけど間違いない。俺たちを嵌めたのはアイツらだ。余程俺らが邪魔だったんだな……」

(海来)「不覚だったよ……ほんつと、馬鹿のやる事だからって甘く見てた自分を殴りたくらいだよ……」

(親友)「ま、まあお前の言いたい事も分かるけどさ……たまに見せるお前のそのドス聞いた口調どうにかならないか？神楽がそんな姿見たら泣くぞ？」

(海来)「神楽君は別だもん。私がこんな口調になるのはすんごい不快な気持ちになった時だけだから、私の大好きな神楽君の前では……絶対にこんな姿みせない」

(親友)「はあ……神楽も、偉い人を恋人にしたも——何か言った？」いえ、なんで  
もいせんせん」

(海来)「それに……あの馬鹿達のやる事は大方予想がつく。それ以前に神楽君を守るって決めた時から、するべき事はした。……あの馬鹿女が神楽君の弱い所に潰け込んでこゝとに及んだとしても、意味がない。絶対に……私の神楽に何かしたら許さないんだから……」

(親友)「や、やっぱこのアマ怖え……絶対に敵に回したらダメなそれだ……」

(海来)「だから……今は、神楽君が無事な事を祈ろ？」

(親友)「そうだな……」

……2人きりの病室にて、こんな会話が行われていたなんて……今現在学校にいる神楽初めとした生徒、先生らは知る由もないだろう……。

---

所戻り、とある空き教室――

(学級委員B)「よし、ここでいいかな……?」

学級委員Bさんに連れてこられたのは、3学年棟にある空き教室だ。Bさんはそう言つて、空き教室の扉の鍵を閉めて俺の方へ向き直つた。

(学級委員B)「急に此処へ連れてきちゃって、ごめんね？大丈夫？」

(神楽)「さつきも言ったけどあれはただのじゃれ合いだし……当事者の皆も加減してたから、怪我はしてないよ。それで？此処に連れてきて俺に何か用かな？Bさんも知ってるだろうけど……もう少しで授業はじまるよ？」

Bさんに再度様態を聞かれたため、俺は大丈夫だと答えて、此処へ連れてこられた理由を聞くことにした。

答えは……言葉ではなく、別のものでかえってきた。

(神楽)「ッ!?Bさん!？」

(学級委員B)「私ね？神楽君を守りたいの／＼／」

(神楽)「……え？」

何をされたのかと言うと……Bさんに真正面から抱きつかれたのだ。それも、かなり力強く。

そのため……彼女の柔らかい2つのものが俺の体に強く当たり、そのせいで思わず声

が裏返った。

そして間髪入れずに彼女から放たれた言葉に、俺は相変わらずの腑抜けた声で返事した。

(学級委員B)「A君とは仲良くして……口止めされてただけど、そんなのおかしいって……何時か神楽君に伝えないと手遅れになるって。そう思って機会を伺ってた。2年前から……何度も」

(神楽)「う、うん……?」

未だに状況が理解出来ない。詰まる話……彼女は一体何を言いたいんだ?  
そう思っていると……彼女の口から更に思いもよらないセリフが発せられた。

(学級委員B)「神楽君……A君と殆どのクラスメイト全員に、虐められてるんだよ?」

(神楽)「……………は?」

虐められてる?俺が?しかも……聞く限りだとA君が主犯みたいなもの言い方

……

(神楽)「う、嘘だ。だって……A君達皆、俺が転校してきた時から俺の事良くしてくれてたんだよ？そんな話……」

(学級委員B)「事実なの。2年前……神楽君第1ボタンの換えを海来ちゃんと親友君と一緒にかって、取り付けようとしてた時あるじゃん？その時に起きた小さな揉め事が……キツカケになっちゃったの」

(神楽)「あの時から……」

空いた口が塞がらなかつた。しかし俺はまだ信じきれず、再度彼女に問いただしたが……結果は同じだった。

2年前の……あの時から？じゃあ俺が度々感じてた違和感は当たってたって言うのか？もし本当なら、あの優しさは……嘘だって事？

(神楽)(ヤバイ……頭痛と吐き気が……)

現実を目の当たりにされたからなのか……突如として変な頭痛と吐き気を覚えた。

(学級委員B)「海来ちゃんや親友君は、その事実を知って即座に、自分達だけでも貴方を守ろうって必死になってた。だけど……それが仇になったの」

(神楽)「も、もしかしてあの事故……」

(学級委員B)「そう。あれは偶然じゃなくて……そんな2人を口封じする為にA君らが起こした事なの」

だからか……俺が見舞いに来た時、必要以上に俺の事を自分達よりも心配してたのは。

(神楽)(何で隠すんだよ……あの時ちゃんと言ってくれてれば……然るべき方法で対処出来たのに……それに……)」

(神楽)「Bさんはその時まで何してたのさ? 話から推測するにBさんは傍観者を担ってた。ちがう?」

(学級委員B)「そ、それは……」

(神楽)「知ってると思うけど、傍観者も立派な加害者なんだよ? 助言としてさっきの話をしに此処へ連れてきたのなら……一応、感謝はする。だけどそれまでだ。どんなに君が取り繕うとも……君がさっき言った事を正直にハイなんて言えない」

「だからこの話はこれでおしまい」……そう言っただけで俺は未だに抱きついてるBさんを引



きはがそうとした。

その時だ……

(学級委員B)「傍観者なんかじゃないもん！」

気づいたら俺は、空き教室の天井とBさんの目を見ていた。その瞳からは、今にも涙がこぼれそうだった。

(学級委員B)「私もできることなら貴方を助けたかった、守りたかった！だけど……海来ちゃんに巻き込まみたくないからって理由で守ることが出来なかった」

そこで漸く、彼女に押し倒されて、彼女が馬乗りしたのだと悟った。

(学級委員B)「悔しかった。海来ちゃんにああ言われて……私が神楽君を守って意志が折れた事に……！だから……！2人が入院した時に再び誓ったの！今度こそ必ず、神楽君を守るんだって！！だからッ……！！」

(神楽)「んむっ!？」

直後、俺の目の前がBさんの顔でいっぱいになり、彼女の唇が重なった。

(学級委員B)「んはあ…。だから…。神楽君を守るって言う証を。神楽君の傍にいたいって証を…。私の身体に残して欲しいの」

(神楽)「そ、それってどう言うー！？」

言い切る前に…。俺は咄嗟に目を逸らした。

何故なら、彼女が制服のボタンを外し出したのだ。

そして外し終えて間もなく…。顔を紅くしながら俺の制服もぬがし始めた。

互いにあられもない姿になって…。俺は漸くBさんの言葉の意味を理解した。

(神楽)「だ、駄目だよ…。俺は海来と付き合ってるんだ。そんな事……」

(学級委員B)「分かってる。だからちゃんと責任は取る。海来ちゃんにも…。ちゃんとわけを話す。だから……」

そう言葉を区切らせて、彼女はもう一度俺にキスをした。

そして——こう言った。

(学級委員B)「私の身体に……一生残らない証を——刻んで？」

……空き教室の扉には窓がない。加えて、使われてない時は教室の窓は全てカーテンがしまっている。

カーテンの隙間から射す光のみが光源となる薄暗く密閉された空間。

その空間にて俺とBさんは……言葉通り一緒残らない証を残したのだった……。

(神楽)(ごめん……海来……)

証を残してる最中……俺は何度も、何度も何度も。此処には居ない、恋人の名前を呼んで謝ったのだった……。

---

……あれから俺は学級委員Bさんと連絡を取るようになり、虐め解決に勤しむ毎日が

始まった。

主に行つた事とすれば……担任やその他教員らに事実を訴えたり、今回の件に関しての同士（俺が被害にあつてる光景を見て不快に思つたクラスメイト）を集めて、その訴えの強化をしたりだ。

（神楽）「まさか担任までもグルだったなんてな……」

（学級委員B）「私もびっくりしたよ……先生なら何とかしてくれるつて思つたのに……。挙句の果てに、他の先生達もなかなか取り合つてもらえなかつたし……」

そう……現実と言うのはそう簡単に上手く出来てなかつた。

いやそれにしても……教員だよ？生徒の問題を解決するのだから仕事じゃんつて、反論したかったものだが……それで変なデメリット課せられたらたまつたものじゃないと思いやめておいた。

なら他の先生はというと……承諾はしたもののそれつきりで音信不通状態。

（神楽）「『彼はそんな事しない。君も見ただろう？彼の正義感溢れる行為を。疑う気持ちも分かるが、それは君の勘違いだ』……か。全く……一体全体どうなつてんだよ。こ

んな事やってて、意味なんて……」

(学級委員B)「諦めちゃだめだよ」

昼休みの屋上で、今の現状を目の当たりにした俺は、そう呟いて諦めようとしていた。

その直後……Bさんがそう言いながら、俺の左手をそつと、両手で握った。

(学級委員)「諦めちゃつたら……神楽君ずっと辛い想いのまま過ごすことになるんだよ？それに、神楽君だけじゃない。私や皆だつて……A君達がやった事に対して報いを求めてる。みんなのその努力を無駄にしちゃダメだよ？」

(神楽)「Bさん……。そうだよな。俺が挫けちゃつたら、俺の為に頑張ってる皆が可哀想……だもんね？ありがとう、もう少し……頑張るよ」

(学級委員B)「そうそう！その意気だよ！」

そうだ。Bさんが、皆が……海来や親友の代わりに頑張ってくれてるんだ。その頑張りを、無駄にしちゃいけない。

それに……担任は勿論、他の教員がダメならもつと他……例えば校長先生とかに当

たつて見るのも悪くない。

(神楽) (充分な証拠を得られたら……何時か当たるとしよう……)

そう心に決めて、俺はもうすぐ予鈴がなると思い、Bさんと共に教室へもどつたのだつた……。

(学級委員B)(ふふつ……早く、コイツが絶望のどん底に落ちる姿をみたいなあ……)

そんな中……彼女がそんな事を思ってるなんて、微塵も思わずに……。

3年の一学期も終わり……二学期後半辺り、文化祭が終わった翌月の事だ。

知ってる人もいるだろうが、この時期の……というより3年は受験生のため、志望校に向けて受験勉強、或いは実技試験に向けての対策をしたりする。当然、俺も受験生のため、勉強……というよりは、実技に向けて対策をしてる。

部活の方は、先月行われた文化祭を持って、引退。前々から海来と実技の対策はしていた。彼女も、同じ高校に通うからだ。

夏コンとかで忙しくて、対策どころじゃ無かったが……こうして引退したから、ゆっくりと実技の対策ができる。

(神楽)(本当なら……海来と実技試験の対策をしたかったけど……まだ退院してない以上、仕方ないか)

そんな事を思いながら、俺は自室にてギターを弾いていた。

趣味……ではあるが、さつきも言ったが受験対策だ。



## ピロリン♪

そんな中……俺の携帯に、LINEのメッセージが送られてきた。

送り主は、学級委員Bさんからだ。

因みに俺は、家庭の事情にて今まで携帯を持っていなかった。だから、LINE内の友達に、家族や海来と親友。そして……彼女、Bさんだけだ。

(学級委員B) 『そういえば神楽君って、クラスのグループLINEに参加してないんだね?』

(神楽) 『そんなのがあるの?』

(学級委員B) 『うん!クラスのグループLINE、便利だよ!クラス行事とかの相談とか時間外で出来るし、その日の授業とか宿題で分からない所を教えあったり出来るから!ね?神楽君も入って見ない?』

そう言われると……確かに便利だと思った。HRとかで行えなかった事をそこで続きを行うことができるし、いざと言う時に役に立つ。俺はそう思った……。

思った反面……少し懸念が生まれた。

(神楽)『あのさ、そのグループにA君……いる?』

(学級委員B)『いる……けど、大丈夫だよ!神楽君に酷い事してる人達には、私から言い聞かせて余計な事言わせないようにしてるから!それに……海来ちゃんや親友君だって参加してるんだよ?』

最後のBさんの一文に、俺は更にもう1つ懸念……と言うよりは疑問が生まれた。

(神楽)(そう言えば2人とも……俺が携帯かって、LINEも登録したって言った時……頑なに『こっちが作るグループ以外神楽は入っちゃダメ』って言われたな……今思うと、これを警戒する為の暗示だったのかな?)

まあ何はどうあれ……2人が参加してるなら、大丈夫だろう。

そう思った俺は『わかった。参加するよ』……と返信をした。

そしてそれが……加害者等が仕組んだ罠だったなんて、思いもせずに……。

※ここから先、かなり不快な描写が登場します。読んでる最中に気分が悪くなる。又は不快に思う方は此処で閲覧を控えて下さい。

【神楽がグループに入室しました】

(神楽) 『Bさんに誘われて参加しました。よろしく』

(学級委員A) 『やあ神楽君…いや、クズ野郎!』

……………え?

『お前がこのグループに早く来ないか今か今かと待ち焦がれてたんだよ!』

『2年前…お前がAにした落とし前、今ここで付けさせてやるからな!』

ちよつと待て。…………どう言う事?ここって確かクラスのグループLINEだよな?

どうして入ってそうそう色んな人から…と言ってもまだ3人だけど、罵声を浴びせされ

なきやいけない訳？

『そうだよ！A君あの日アンタにああ言われてすつごく傷ついたんだからね！責任取りなよ!!』

『このグループに参加してる皆、A君の味方なんだからね！覚悟してよクズ野郎!!』  
『そーだそーだ!』

…などと、様々な罵声を現在進行形で浴びせられてる中……俺は参加者を確認した。  
しかしそこには……海来と親友の名前が無かった。

(神楽) (嵌められた……)

そう思った俺は、色々と言い返す前に……聞きたい事を聞くことにした。

(神楽) 『海来と親友は？Bさんの話だと、2人もグループに参加してるって話のはずなんだけど』

『うるせえ！クズ野郎がいけしやあしやあと喋んな』

『そーだそーだ！先ずはAに謝罪だろ謝罪！そんなこともわかんねえのかよ!』

(学級委員A) 『あの馬鹿2人を此処に誘うわけねえだろ？あ、あとクズなお前に言つと

かなきやいけないことがあったわwあの2人を事故に合わせたのは俺ら。お前に肩持った報いつて奴だなwwwwww』

『それよりもA君に謝んなさいよクス野郎!』

『そうよ! さつさと謝れ! 馬鹿で無能なクス野郎!!』

……ヤバい。ひとまず落ち着く為に、ギターをしまつて深呼吸しないと……。

兎にも角にも、ここに居るメンバー全員に言えることは、A君にいいように付け込まれた馬鹿達つて事だな。

(神楽) (なら……返すメッセージを送つてここから去るか)

そう思つた俺は、メッセージを打ち込んだ。

(神楽) 『あの時の事を怒つてるんだつたら、謝るよ。あの時はキツイこと言つて済まなかつた。……でもさ? A君にだつて悪い所あるんじゃないの? わざわざ俺の席で此方からしたらくだらない会話花咲かせて、挙句の果てに俺が何度も言つてもどかなかつたのは、何処の誰なのかな? まあ……何れにせよ、これで証拠が出揃つた訳だから、さつき迄のやり取りスクショしてプリント化した後、然るべきところに送るからね? あと二度と、俺の海来と親友のこと馬鹿にしたら、ただじゃ済まさないからな? ……んじや、言

いたいこと言ったから、俺はこれでおさらばするね？バイバイ』

【グループLINEから退室しました】

（神楽）（はあ……後は、色々と聞きたい事を聞かないとだな）

あのグループLINEから退室した俺は、ある人物に、事情聴取を行うべく、LINE通話を行った。

そしてその人物……Bさんとは直ぐに繋がった。

（神楽）「話が違うじゃん。A君ら加害者がいても、俺の会話に一切干渉しないって話じゃなかったの？」

（学級委員A）『ごめんなさい……言ったつもりだったんだけど…、余程神楽君の事根に持ってた見たいで……』

（神楽）「ふくん……まあその話はどうでもいいんだよ。でもさ？Bさんもう1つ言ったよね？海来と親友も参加してるって。……なんであの2人が居ない？2年も経ってるんだ。誘わなかったなんて言わせないからな？」

知らず内に……俺の口調がキツくなっていた。

自分の事を幾らバカに使用が罵声浴びせようがどうでもいい。でも……あの2人の侮辱は、絶対に許さない。そう思っていたからだろう。

(学級委員B)『お、怒らないで……? 確かにあの2人は参加してたの。だけど……つい最近、何も言わずに退室してて……理由を聞いても何も話してくれなくて……』

(神楽)「ならなぜそうだと早く言わなかった。俺は2人が居るって君から聞いたから、参加したんだ。理由はどうあれ……君にも責任はあるんじゃないかな? 違う?」

(学級委員B)『……本当にゴメンなさい……。皆には今度こそちゃんと言い聞かせておくから。だから……ウグツ、私の……事……嫌いに……エグツ、ならないで……!』

もつと彼女に言うべき事があつたのだが……こつも泣かれちや言う気が失せる。そう思つた俺は、ため息を着いて、彼女にこう言つた。

(神楽)「はあ……もういいよ。Bさんだつて、悪気があつた訳じゃないんだろ? だからもう泣かないで? それよりも……だ。ようやく証拠を掴めた。後はこれを、校長先生にプリント化したものを渡すだけだ」



(学級委員B) 『え？担任じゃなくて？』

(神楽) 「うん。あの人や、他の先生ちに渡した所で状況は変わらないことは目に見えてる。だったら、それよりも上の立場の先生に……校長先生に証拠を渡して真実を打ち明ける」

(学級委員B) 『そう……なんだね……』

(神楽) 「うん。それじゃあまた明日……」

そう言って、俺は通話を切って、先程言った事を行動に移した。

……しかし、その行動が報われることが無い事に気づいたのは、高校受験が無事終わって、合格通知が自宅に届いた後の事だった……。

---

二学期も終わり、三学期へ……あの一件があった後、先も述べたが、あのやり取りをスクショしてプリント化。その後日に校長先生へそれを提出し、真実を打ち明けた。いくらなんでも校長先生だ。この事態を見て見ぬふなんて……出来るはずがない。

そう、思っていた……。

しかし、待てど待てども校長先生からの返事が来なかった。

(神楽)「おかしい……。校長先生だぞ？いくら何でも白紙にするような……？」

何時もの屋上で、そう呟いていた俺は……ある事に気づいた。それと同時に……ある懸念も含め。

(神楽)(偶然かどうかはさておき……校長先生とBさんの苗字、一緒だな……？いや、偶

然じやない。何時だかはわすれたが、俺が登校する際に……職員駐車場から校長先生とBさんが車から降りてきた姿を見た。まさかじやないけど……2人は親子？それに、あのやり取りの後……俺が校長先生と発した後のBさんの返事の歯切れが悪かった。今思えばBさんもあのグループに参加していた。親であるなら、それを叱るべき……或いは事情を聞いて俺に商談を持ち込むはずだ。それをしないから未だに返事が来ない……まさか……)

そこまで考えて、俺は頭を振った。

よそう。彼女があの日言った言葉をわすれたのか？彼女も彼女で、俺の事を守りたいと言ってたんだ。それを信じなくてどうする。

(神楽)「もう少し……待ってみるか」

それに、あと少して卒業するんだ。卒業さえすれば、こんな学校生活からおさらばでききる。

あと少しの辛抱……その時まで俺はそう思っていた。

(学級委員B)「あ、いたいた！神楽君〜！」

(神楽)「Bさん?どうしたの?」

(学級委員B)「聞いて聞いて!何とか皆でA君達を説得させたらね?A君謝ってくれ  
るって!!」

(神楽)「本当に!」

此処にきて、思ってもしない知らせ。それも……良い知らせだ、かなり。

(学級委員B)「うん!でね?そのA君達が謝りたいから神楽君を呼んできてって言っ  
ただけど……」

(神楽)「勿論行くよ!行こ?Bさん!」

(学級委員B)「ウン!」

ああ……これで漸く終わる。

あれから約3年……長かった。望んだ結果ではなかったにせよ、約3年も続いたこの  
生活から解放されるのであれば願ったり叶ったりだ。

そう思いながら……俺はA君が待つ教室へとBさんと共に向かったのだ……。



「……その後のことは……よく覚えていなかった。

目の前で見た光景は、微かに……覚えていてる。

何故かクラス全員が居て、俺は教卓の前に立たされた。

向かい側にはBさんとA君。

そして、その後ろにクラスメイト全員。皆……恰もこれから起きるサプライズイベントを今か今かと待ちわびてるような目付きだった。

そして……BさんとAさんはこう言った。

（学級委員A、B）『2年前のあの日からお前にしてきたことは全部虐めによる演技で、あのグループLINEも偽のグループLINEで、お前の悪口を言う為に作ったもの。海来と親友を陥れたのは、私達。お前を虐めようと提案したのは私で、パパ……校長先生

も承諾してくれた。お前が幾ら頑張っても、良い知らせが来なかったのはそのため。そう……全ては教員同意の元行つた』

それを聞いていた後ろのクラスメイトは……全員腹を抱えて笑っていた。俺とBさんと一緒にこの虐めの解決に取り組んでくれた生徒もだ。

……皆、グルだったんだ。

……Bさんも、先生皆全員グルだったんだ。

あの時……物が無くなった時に探してくれたあの行動も。

あの時……転校したての俺に優しくした行動も。

あの時……慰めてくれたBさんが取った行動も。

全部、全部全部……演技だったんだ。

信じてたのに……信頼、してたのに……

———……裏切られた。

そう悟った瞬間……俺は目の前が真っ黒になって……、気が付いたら病室で寝ていた。

だけど……声が出なかった。医師から聞くには、甚大なショックで心因性失声症となったとの事らしい。



しかし……それだけじゃ無かった。

(神楽)「あ、……ああ……、」

(神楽)(思い……出せないあの『約束』を……)

そう……俺は、声だけでなく、記憶も一部なくなってしまうのだ。

しかも……大切な、幼馴染<sup>リサと友希那</sup>2人と交わした約束を……忘れてしまったのだった……。

病院へ運ばれたあの後……母さんが教育委員に俺から聞いたことを全て打ち明けてくれた。

教育委員が出した処置は……校長とクラス担任は退職と免許剥奪。他のクラス担任は1週間の外出禁止令。クラスメイトは加害者側全員1ヶ月の停学及び内定取り消しを受けたらしい。

嬉しい……はずなのに。加害者全員然るべき罰を受けたというのに。

……俺の瞳からは、涙が溢れ出て止まらなかつた……。

〈END〉

## 8話

(神楽)「これが……俺が長野県にいた時に経験した3年間の過去だ。後の約3年間は、時間はかかったものの、同じ高校に通うことになった海来と過ごして……今に至る訳だ」

自分の過去を語り終えた俺は、海来が注いでくれたお茶を飲み干して、一息ついた。

(友希那)「……………」

一通り話終えた俺は、友希那のを見た。彼女は、途中相づちを入れるでもなく……黙って俺の話を聞いてくれた。

しかし、話終えて尚こうして黙っている姿を見ると……やはり話すべきでは無かったのか?とか、色々と心配してしまう。

それもそうだ。あの過去は、他人に気安く話せる様なものじゃない。幾ら幼馴染みのよしみでも……海来みたいなその場において、俺の傍にいてくれた人で無い限り。後は本

当に、この人なら話しても大丈夫という絶対的な信頼たるものが無ければ、話す気にもなれない……そう言う内容だからだ。

そう言う内容の過去を話し終えたからそこ……友希那にかけるべき言葉が、未だに出てこない。

(神楽) (しかし……何時までも声をかけずには居られない。それにもし万一、無理でもしてたなら……今度こそ寄り添わなければいけない。だからこそ……) 漸く俺は、友希那にかけるべき言葉が見つかり、話すことにした。

(神楽) 「友希那……俺はお前に話さ……」 「神楽？」 「……てえ？」

しかし……本題に入る前に友希那に名前を呼ばれて、仕方なしに友希那の話を聞くことにした。

(友希那) 「私……貴方に……いいえ、貴方と海来に謝らなければいけないわ」

(海来) 「私にも……？」

(神楽) 「……？」

しかし友希那の口からでた言葉は、予想外の言葉であり、俺と海来が揃って首を傾げるには充分だった。

(友希那)「……………」

……話しずらいのだろうか？中々話し始めない友希那を見て、俺はますます心配になった。

しかし、その心配は……友希那の叫びのような言葉で、杞憂に終わった。

(友希那)「ごめんなさいッ!!今の貴方の過去……本当はお母さんから聞いてたの!!」

(神楽&海来)「……………え?!!」

友希那の口から発せられた言葉は……文字通り俺達が揃って腑抜けた声で答えるのに精一杯のものだった。

(友希那)「高一の頃、リサとは疎遠の関係で、私はお父さんの為にF・W・F出場に向けてただひたすら歌を歌っていたの。そんな中……お母さんから話しておくべき事が

あるって言われて、その話を聞いたわ。最初は……信じられなかった。優しかった神樂が中学の頃悲惨な日々を過ごしていた事に……それと同時に、悔しかった。幼馴染みでありながら、遠距離でも、貴方に寄り添って上げられなかった自分に怒りが混み上がるくらい……悔しかった」

（神樂）「その点に関しては、俺にも悪い所がある。叔母さんから、友希那やリサの連絡先を落ち着いてからでもちゃんと聞くべきだった。済まなかった……」

（友希那）「謝らないで。それに……海来？私は貴女のあの言葉を聞いて、幼馴染みの私の方が神樂の事をよく知ってるのに……って、あの過去を知っておきながらそう思ってしまった。だから、謝らせて欲しいの」

（海来）「そ、そんな！謝らなくてもいいよ！私も……少し言い過ぎたかなって、思ってたし……私こそ、ごめんなさい」

リサと疎遠になっていたことに関しては別で驚いたが、その後の会話で、互いに悪い所があるとと言う事で、俺と海来は友希那に謝った。

（友希那）「話を戻すわね……。あの話を聞いてからの私は、お父さんの為に歌うのと同じ時に、貴方に少しでも元気になればと思つて、貴方のためにも歌った。曲も……その時

から不定期だけれども、送ったわ」

それに関しては、身に覚えがあった。高一の頃、ちゃんとして通えるようになった時だろうか？ 俺宛に、友希那が作ったであろう曲が入っていたCDが送られてきていた。

（神楽）「意図は掴めなかったけど、友希那が送ってくれた曲には、何時も元気を貰ってたよ。改めて礼を言わせてくれ」

（友希那）「ありがとう。でも……本当にごめんさい。貴方といつ会えるか、今か今かと待って……Roseliaを結成してから、バンド活動に励むようになってから、貴方の過去を片隅に置いてしまった自分がいた。だから……」

（神楽）「いいんだ。寧ろその方がいい。あの過去はそうした方が聞いた側の人達はなんの不自由なく過ごせる。そういうものだからね」

不本意だが、友希那のその言葉に、俺は少しほっとした。今も尚俺の過去をずっと覚えていようものなら……きつと、友希那のバンド活動や学校生活諸々に大きく支障をきたすだろうと思っただからだ。

(友希那)「怒って……ないの？」

(神楽)「当たり前だろ？寧ろ話を叔母さんから聞いていたのだから、再度同じ話をさせて辛い想いをしただろうに。だから……こちらこそ、ごめん。そして、二度になるが、俺の過去を聞いて理解してくれて、ありがとう」

(友希那)「神楽……。あのね？神楽の過去を再度聞き終えた時に、心に決めた事があるの」

(神楽)「心に決めたこと？」

海来の言葉を借りるなら……彼女以前に、俺の理解者になりたい……と感じだろうか？でもそれだと友希那のそのセリフに対しての重みが無いように思える。となると何なんだ？

そう思っていた矢先——

(海来)「あわわわわ……ッ!?!?／／」

隣から海来の慌てふためく声が聞こえたかと思うと、俺に友希那が抱き着いてきた。

羽岡駅での仕打ちが蘇る……つまり、友希那の成長した柔らかい物が、あの時見たく

密着しているのだ。

だから……一瞬何をされているのか分からなかったものの、そうだと悟った直後、おれの理性が飛びそうになった。

(友希那)「私……貴方の彼女以前に未来の花嫁に相応しい女になるわ。理解者なんて目じゃない……それ以上に貴方の事を理解して愛して……貴方に一生を捧げる事を、今ここで誓うわ♡貴方を絶対に、今度こそ離さない。誰が奪いに来ようとも、そうさせないように……深く貴方を愛するわ♡」

(神楽)「んむッ!」

(海来)「~~~~ッ／／」

友希那は、そう言い終わると同時に……おれにキスをして来た。しかもただのキスじゃない。

所謂ディープキスだ。隣にいる海来なんか……声にならない声を押し殺しながら、顔が茹で上がっている始末だ。

(神楽)「んはあ……ッ、友希那の気持ちはわかった。約束は必ず守る。だからそれに対



しての答えは待ってくれ。必ず……お前にちゃんと答えて見せるから」  
(友希那)「フフ♡言質とつたわ♡改めて……これからも宜しくね？ダーリン<sup>神</sup>♡」

なんか最後の呼び方違和感感じたの俺だけですか!?!しかもさつき迄自分で言うのもあれだけど……結構シリアス的な雰囲気だったよね？それが何故ゆえこんな甘々な感じになったんですかあ!?

そう叫びたいくらい今のこの場の雰囲気甘ったるくてどうしようもなかった……。

---

(リサ) 「そう……だったんだね」

(神楽) 「ああ……」

「……………」

あれから少し落ち着いて、当初のやる事だったりサや友希那の家を始めとした挨拶回りをした。

その後の晩方……リサから「もし良ければ家に来て」と言われた為……海来と一緒に来るかと誘ったが、海来は友希那と沢山話がしたいらしく、俺一人でリサの家にお邪魔した。

そして……今にいたる。

(リサ) 「神楽……辛かったよね？アタシ、その時から友希那とは余り合わなくなっちゃって……で、でも約束はちゃんと覚えてたんだよ！」

(神楽) 「そうだったのか……」

リサにも、俺の過去を話した。彼女曰く俺との関係が崩れかねないと思つてしまつたらしく、出ていったとの事で……晩方には俺の話の話を聞く覚悟が出来たらしく、俺は友希那にしたように、自分の過去を話した。

友希那もそうだったが……リサもリサで俺の目をそらさずに黙つて話を聞いてくれた。しかし……話し終えた時のリサの瞳は、今にも涙が零れそうなくらい潤んでいた。

(リサ)「ン~~~~ツ!……よし!決めた!!」

(神楽)「リサ……?」

今にも泣きそうな自分を悟られたく無かつたのか……後ろを向いて、恐らく潤んだ瞳を擦つてるのだろう。それが済んだ直後、リサがそう言いながら俺の方に再度向き直つた。

(リサ)「アタシ……神楽のお嫁さんとして恥ずかしくない女になる!神楽の事をこれからも沢山理解して、沢山愛して……!神楽をアタシ無しじゃ居られない様にするんだ!だから……ね?神楽。アタシと友希那との3人で交わした約束……ちゃんと果たして

よね？」

またこのパターンか……一瞬俺はそう思ったが、これが俺の知る今井リサなんだと思  
い直して、友希那に返した言葉とほとんど同じ返事をリサにした。

(神楽)「うん。必ず約束は守るよ……だからそれまで待つていてくれ。ちゃんと自分で  
責任持てるようになって、俺の夢と目標を達成したその日までに……必ず答えを見  
つけるからさ」

(リサ)「約束……だよ？破ったら……あの約束の有無関係なく神楽をアタシだけのモノ  
にするんだからね？」

「善処する」そう俺は答えた。

と言うか……2人とも、ほんとに変わったな。俺が転校する前は、そんな積極的で俺  
に対して深い愛を抱いていなかったはずんだけど……

(神楽)「まあ、兎にも角にももう少しで始まる新学期までは少なくとも……出来ればそ  
の後も平和に過ごしたいものだ。俺の……目標のためにも」

俺はリサの部屋の天井を見ながら……そう思ったのだった。

その後……リサに「良ければ泊まってかない？」と誘われて、海来に一言断ってから……その誘いを承諾したのだった……。

＼END＼

## 9話

羽丘へ帰ってきてきて1日が経った今日の昼時。俺と海来は2人でとある場所へ向かっていた。

昨日は帰ってきて早々忙しかったが、一晚寝てその疲れが綺麗さっぱり無くなっていた……と思いきや、何故かは知らないが、腰周りが変に凝ったように痛い。寝違えたかな？

(神楽)「それにしても母さん……なんで編入先まで手違えるんだよ……てつきりリサと友希那が通う羽丘かと思ってたよ」

(海来)「あはは……まあ神楽君のお母さんの知り合いが、花女の理事長やつてるって話じゃん？もしかしたらその勢い的なもので神楽君も花女になったんだと思うよ？」

だとしてもだ。海来と一緒に花女へ向かい、いつちゃん……と母さんは言ってたけど、理事長へ挨拶しに行きなさいと言われたのが今日の朝方だ。全く……これ確信犯がやる様な事だよ？普通事前に事を伝えない？ねえ母さん!？」

(神楽)「まあ兎にも角にも……今日も今日とて予定が詰まつてる。これが終わつたらリサと友希那達がいるCIRCLEへ向かわないといけないし」

そう、実は家を出る前に友希那から「2人の紹介も兼ねて、午後1時にCIRCLEに来て」と言われたのだ。まあ遅かれ早かれ、友希那達Roseliaが主に活動してCIRCLEには色々な用事で足を運ぶ予定だった。

しかしそれが友希那の誘いにより今日のお昼過ぎに前倒しされた為、今日も忙しいという訳だ。

(海来)「楽しみだね、友希那ちゃん達Roseliaと会うの」

(神楽)「高2の頃からリサと友希那から話は聞いてたけど、実際会うのはこれが初めてだから……互いに粗相の無いようにね?」

(海来)「わかつてるよ。いつも通り……ね?……て、そろそろ花女に着くみたい♪」

等と、挨拶が終わつたあとの事を話し合つてる内に……花女の校舎が見えてきた。

花女……元花咲川女子学園。それが、今年度俺と海来が通う事になった高校の名前

だ。歴史ある学校であり、昔から地元の方々からよくされてるらしい。

そんな中……校門にて、俺にとってよく知る人物が2名と、恐らく先生であろう人物が3人待つていた。

(颯樹) 「あれ？神楽？」

(彩) 「神楽君？久しぶりだね……どうしてここに？」

(神楽) 「颯樹に彩さん？どうして此処に？」

よく知る人物……と言うのは颯樹と彩さんの2人だった。恐らく、2人が着ているのが花女の制服だろう。だからそれを見て2人が花女の生徒なんだと察する事が出来たが……何故ここに居るのが分からなかった。

(???) 「あら、2人は彼と知り合いなのね？」

そんな中、ロングの白髪を背中まで下ろした空色の瞳をした女の人が会話に入って颯樹達にそう尋ねた。



(伊吹)「……と、初めまして神楽君に海来さん。私は今年度からこの学園の理事長になりました。雪白<sup>ゆきしろ</sup>伊吹<sup>いぶき</sup>といひます。2人の事は、颯樹君や彩さん達からは勿論、キヨc h——貴方のお母さんから話は聞いているわ。ようこそ、花咲川女子学園へ」

(神楽)「初めまして。大江神楽です。今年度からこの学園に通う事になりました、宜しく御願ひします」

(海来)「蒼導海来です。こちらこそ、宜しく御願ひします」

理事長が挨拶をした後、俺たちもそれに習って自己紹介をした。それを見た理事長は、「ウンウン♪」とニツコリ微笑んだ。その様子を見ていた俺は、余り母さんと同い年には見えないなという感想を抱いた。

(伊吹)「キヨちゃんと久しぶりにあつた時もいわれたなく♪でも、こう見えて私君のお母さんと同じ40なんですよ?」

俺の心の眩き読まれたし……母さんも母さんで、俺の心の声を聞いてたな……まあそれは置いといて、隣にいる海来がとつても失礼な言葉を言おうとしてた為……軽めに頭を打ってそれを阻止した。

(擘歌) 「星夜<sup>ほしよすい</sup>擘歌<sup>か</sup>です♪今年度から君と颯樹君たちA組の担任になりました！宜しくね？2人とも♪あ、それと生物の教科担任でもあるけど、音楽もできるから、音楽の授業で何時か会うかもね♪」

(奏多) 「天宮<sup>あまみや</sup>奏多<sup>かなた</sup>です！ボクは彩さんと海来さんのB組の担任です！体育の教科担任もやってます！よろしくね！」

擘歌と名乗った先生は、俺と同じ位の身長で青髪を後ろでポニーテールにしてるニコやかな笑顔が特徴的な人だ。

奏多と名乗った先生は、この場にいる7人の中でも身長が低く、銀色と青色のツートンロングで恐らくボクっ娘の人だ。

まあ2人の先生の自己紹介も済んだ事だし、俺と颯樹、あと海来の3人で挨拶をする事にした。

(颯樹) 「今年度から、宜しく御願います。擘歌先生」

(神楽) 「宜しく御願います、擘歌先生」

(海来) 「宜しく御願います奏多先生」

(彩)「今年も宜しく御願いします、奏多先生！」

そして、ワントンポ遅れてだが彩も挨拶をして、一通り5人の自己紹介が終わった。

(伊吹)「ハイ！皆さんそれぞれ顔合わせが済んだことです、応接室へ向かいましょう！ 慧歌先生、奏多先生、後は宜しく御願いします♪」

そう言って理事長は、一足先に理事長室へと帰って行った。

そして、残された俺達4人は、2人の先生と共に応接室と呼ばれる場所へ向かうのだった……。

---

（擘歌）「ウン、2人に渡すべき教材や制服は全て渡したし、必要書類も預かりました」  
（奏多）「彩さんと颯樹君。待たせてごめんね？これから本題に入ろうと思います」

応接室に移動し、先ず行われたのは必要書類の提出と、この学園の教材。そして制服の配布だった。後は軽く新学期当日の全校集会の流れの確認をした。

颯樹達2人は、自分達の事では無いにせよ……退屈そうにせずただひたすら事が住むのを待っていてくれた。

そして要約……俺達4人が呼ばれた理由、元い本題に移る所だ。

(擘歌) 「本題ですが、颯樹君と彩さんの了解は理事長を通して耳に届いています」

(奏多) 「後は、神楽君と海来さんの2人が、ボク達の本題を聞いた上で、了解するか否かだけです」

(神楽) 「分かりました。それで……本題は？」

2人の先生の話聞いて、俺は了解の返事をし、本題へ移るよう促した。

(擘歌) 「ハイ。本題は、君達2人の学校生活のサポートを、颯樹君達2人にもしてもらおうと言う話です。サポートとしての任期は颯樹君達に委ねます」

(奏多) 「そのまま友好関係を築くのもありですからね」

(海来) 「つまり……私と神楽君は、2人のサポートを……詳しく言うなら神楽は颯樹君の、私は彩ちゃんのサポートを受けると言うことですね？」

海来の質問に対して、先生達は揃って頷いた。

とどのつまり……学校生活に慣れるまで。もしくは颯樹と彩さんの任意までの何れかの間、颯樹と彩さんは俺達2人の世話を理事長に頼まれたという訳だ。そして2人はその話を了解し、後は俺達の返事待ちという事。

(神楽) 「分かりました。その話、受けましょう」

(海来) 「慣れるまでご迷惑をかけるかも知れませんが、改めて、宜しく御願います」

海来のその言葉に続く形で、俺と海来は先生達と颯樹達に深く頭を下げた。

(奏多) 「ありがとう2人とも、そして改めて……颯樹君と彩さん？ 新学期から2人の事を宜しく御願いますね？」

(颯樹&彩) 「はい」

(彗歌) 「これで、話は以上です。時間をとってごめんなさい。気をつけて帰ってね？」

彗歌先生がそう言って、6人での話はこれでお開きとなった。

俺と海来は、あらかじめ持参していた鞆に教材と制服を入れて、颯樹達2人と揃って先生達に挨拶をして、応接室を出たのだった……。

(神楽) 「それにしても、驚いたよ。まさか2人とも花女に通ってたなんて……」

(颯樹) 「まあ言わなかったからね……。ちなみに、ちーc h ー千聖も花女で、僕と同

じクラスだ」

(神楽)「そうなんだね……兎にも角にも改めて、新学期から宜しく颯樹？」

(海来)「私も、ふつつか者ですが、宜しく御願います」

(彩)「改まらなくても大丈夫だよ♪同じクラスメイトになるんだから……よろしくね？」

海来ちゃん♪」

(海来)「ありがとうございます……なら、改めて、宜しく！彩ちゃん♪」

応接室を出た俺達は、互いに何気ない会話をしながら校舎を出た。

(神楽) (颯樹が何か言いかけてたけど……言及しないで置こう)

そう心の中でつぶやいて、俺達4人は互いに挨拶をして……俺は颯樹と。海来は彩さんと握手をした後……互いの帰路に着いたのだった……。

～END～

## 10話目

花女にて先生と颯樹達とで色々と話をした後、時間的には昼前だったので……俺たちは1度家に帰り、軽めの昼食をとった。

その後CIRCLEに行くための身支度を整えて、荷物確認。一応万一に備えてギターをもつていく。海来も自分の荷物の確認をして、手にサポーターを付けていた所だった。サポーターを付ける時は決まって海来はピアノ関連をしに行く時だけだ。という事は……海来も俺も、万一に備えての準備をする点は同じ考えだったらしい。

(神楽) 「よし、こっちは荷物確認終わったけど……海来はどお？」

(海来) 「私も大丈夫だよ！」

---

海来も準備できたと言う事で、戸締りを確認して、再び家を出たのだった。

(神楽) 「……CIRCLEか」



（海来）「ネットで見るよりも大きいね」

ライブハウス『CIRCLE』……ここで数多くのガールズバンド達がライブをしたり、練習をしたりしている。Roselliaも……この常連との事だ。

ネットで見た時はそこまで大きく無かったのだが、聞く話によると、最近ラウンジを増設したとのことだ。外にはカフェテラス。そこでバンド関係者でなくても、一服する為に寄つても悪くない。

（神楽）（此処で、俺は友希那達の……）

CIRCLEという文字を見ながら、俺は羽丘に帰ってくる際に考えてた事を思い返した。自分の夢の実現の為に……コレは絶対に成功させないと。そう思いながら、海来に「そろそろ中にはいるか」といって、2人でCIRCLEの中へと入っていった……。

時間は、連絡した時間より少し早め。それでも、此処でお世話になる身として当然と  
思いながら……。

---

外装がネットで見たのより大きければ、内装も大きいのが自然というものだ。まあ想

像を裏切るなんて事はなかったし、ここのスタッフさん達も全員笑顔で、居ずらさを感じさせない所も良いなと思った。

まあそんなことより、だ。CIRCLEの責任者である月島まりなさんと話をし終えた俺と海来は、約束の時間までまだ30分近くあり、「折角だし……」と言う感じで、スタジオに一足先に訪れる事にした。

(神楽)「うん、思ってた以上に解放感あって、いい感じだね」

(海来)「そうだね。でも……良かったの？友希那ちゃんにロビーで待ってる用に言われたんじゃ……」

(神楽)「うん。本当なら、ロビーで待つてようと思っただけ……折角ギター持ってきたし、触らなかつた分を早めに取り戻そうって思っただけからね」

(海来)「なるほどね……まあ私もそうなんだけどね、実を言うと」

そう。実を言うと友希那には午後1時にロビーに来るよう言われていたのだ。本来なら、残りの30分ロビーで時間潰しても良かった。だけど……

(???)『触れなかつた日が1日でもあつたら、次練習する時は触れなかつた日の分を取り

戻す勢いで練習しな。でなければ腕は落ちる一方だ』

高校2年の頃……学校のレッスンスン室にてとある講師の先生に言われた言葉だ。要はたかが1日のブランクでも、されど1日のブランク……という事。その人の言う話によれば、プロのアーテイスト達は、皆そうやって腕を磨いて、トップになつてきたらしい。まあプロなら、誰もがやつてるといふ事に關しては、それは普通に頷けた。俺の知るミュージシャンでも、練習は常に欠かさずやっていたらしい。

それを如何に効率よく、確実にこなせるのが……俺と海来にとつての、目標なのだなと思つた。

(神楽) 「それに……お前も本当はやりたくて仕方がなかつたんだろ？」

(海来) 「アハハ……バレバレだった？」

(神楽) 「だつてお前の事だもん。友希那やりサと同じくらいよく知ってるからな」

そう返事して、各々準備にとりかかった。

チューニング、ウォーミングアップを済ませ、互いに顔を見合わせて何をするか話合った。

(神楽) 「時間もないし……海来?この曲1回ばかり聞いてアドリブで出来る?」  
(海来) 「ちよつとまって……うん。この曲なら、今すぐにも合わせられるよ」  
(神楽) 「流石だな……それじゃあ……やるか」

そう言つて、俺と海来は顔を再び合わせて……

『BLACK SHOUT』を演奏し始めた。

く友希那 side く

(友希那) (……おかしい)

Roseliaの皆が揃ったと言うのに……神楽と海来はまだ来ない。道に迷ったなんて事はまず無い。約束をバツクれるなんて、以ての外。それに私の知る神楽は、約束の時間の……遅くても10分前には待ち合わせ場所に来ているのだ。そんな神楽が……まだ、来ていなかった。

(???) 「友希那さん、どうしたんですか？」

(???) 「全員揃ったので……そろそろスタジオへ向かいましょう？」

(???) 「友希那さん……？」

(友希那) 「……ッ、ごめんなさい。今日は皆に、合わせたい人がいたのだけれど……」

(リサ)「中々来ないね、あの2人……」

待ち合わせまで、あと10分……そろそろ来てもいい頃なのに、遠目ですら見えてこない。

一応、あの2人は午前中花女へ挨拶に言ったとLINEが来てた。それに、その挨拶は昼前に終わっている。

まりなさんに確認をしても、その2人は見てないとの事だった。

(友希那)(神楽……貴方って人は、知らない内にそんな非常識な人になったというの？  
これはあとで……色々話を聞きたいモノネ……)

そう心の中で決めた私は、改めてまりなさんに、スタジオを借りる手続きをしいいた。一応、練習が終わった後に、リサが予約してくれているから、大丈夫の筈だ。

案の定……午後1時から、予約がされていた。

(友希那)「そろそろ時間になるわね……皆、行くわよ」

(4人)「ハイ!!!」(了解♪)「」

そう言って、私達Roseliaは……スタジオへ続く階段を降りて行った……。

——その直後だった。

(友希那) 「……BLACK SHOUT?」

アドリブがあるとは言え、聞き間違いなんかじゃない。

BLACK SHOUTが……降りてすぐのスタジオから聞こえてきたのだ。

(リサ)「音からして……ギターとキーボードの音だね?誰だろう……?」  
 (???)「そんな事より……その音が聞こえる場所って、私達の予約してたスタジオからじゃないかしら?横入りなんて非常識よ」

確かに……。水色の髪の彼女、『氷川紗夜』の言う通りだった。アドリブを入れる辺り、中々の腕前なのだろうけど……。非常識だ。相手が誰であれ……。許される事ではない。

と言うか……。ギターとキーボード……。まさかね。

一瞬誰が演奏してるかの人物像が浮かび上がったが、即座に頭を振ることで、それを中断した。

兎にも角にも、確認すれば分かること。そう思って私達はスタジオへ入った……。

(友希那&リサ)「……え?」

(3人)「「??」」

中に入って、目の前に写った光景を見て……。私とりさは、目を疑った。紗夜達さん



は……何事？という感じで私とリサが見てる方向を見た。  
そこには――――……

(神楽) 「……ふう、腕は落ちてないようだね？海来」

(海来) 「神楽君こそ、何時聞いても凄いギターテクだったよ♪」

(友希那)「神楽……?」

(神楽)「あ、……………」

(リサ)「海来まで……2人揃って、何やってるの?」

(海来)「リサちゃん……………」

そこには……ついさつきまで、来てないと自分で思い込んでた2人、神楽と海来が居たのだった……。

〈END〉

(???) 「久しぶりだね、月島」

(まりな) 「お、オーナー!? お久しぶりです! 今日はどのような御用で?」

(オーナー) 「ああ、たまたま此処を通りかかった……て事にしておいてくれ。所で……大江神楽と蒼導海来。この2人が此処へ来なかつたかい?」

(まりな) 「神楽君に、海来ちゃんですか? その2人だつたら、アルバイトの面接を今し方した後……Roseliaの皆と待ち合わせしてるからつて、スタジオの方へ行きましたよ? あの2人が、どうかしたんですか?」

(オーナー) 「久しぶりに2人の講師をしようと小茂呂音科へ足を運んだら……2人揃つて花女へ編入したつて聞いてね。あの2人の事だからもしかしたら此処へ来たんじゃないかつて思つただけさ」

(まりな) 「そうだつたんですね……でしたら、ご案内しますか?」

(オーナー) 「いやいい。私だけでいけるさ……あの2人にちよつと話して置きたいことがあつたからね」

## 11話

(友希那)「……なるほどね。私達が来るまでに時間が充分すぎる位あったから、空いたブランクを埋める為に演奏していたのね？」

(神楽)「左様でございます……」

(リサ)「でもさ？それならそうと連絡してくれても良かったんじゃない？家にもいなかったし、花女での話が終わってたって連絡もしてくれなかったよね？」

(海来)「ごめんなさい……。色々とするべき事があって……」

スタジオにて練習をしていた俺と海来。丁度BLACK SHOUTをアドリブ込みで演奏し終えたと同時に友希那達が入ってきて、今現在……どうしてこんな事をしたのか、友希那とリサの2人に事情聴取される所だ。

そんな中……水色の髪を背中まで伸ばした女の子が話出した。

(紗夜)「まあ……その2人には悪気があった訳じゃないし……互いに自己紹介をしませんか？湊さんや今井さんは分かっても、私達は貴方達の事を知らないのだから」

(友希那)「紗夜の言う通りね。なら私から紹介するわ。彼は大江神楽、私とりサの幼馴染みよ」

(りサ)「隣にいるのは蒼導海来。長野へ転校した神楽の親友なの」

紗夜さんに自己紹介の案を出され、それに便乗して友希那が俺の、りサが海来の自己紹介を簡潔にしてくれた。

まあ……自己紹介されたなら、それに応えるのが普通だよな？

そう思って、俺はりサに続いて自分の自己紹介をした。

(神楽)「初めまして、大江神楽だ。友希那とりサと幼馴染みで、この間羽丘に帰ってきたばかりだ」

(海来)「蒼導海来だよ！神楽君とは中学から知り合った親友で、分け合って神楽の家に居候させて貰ってます！」

俺の自己紹介が終わり、海来も俺に続く形で自分の自己紹介を済ませた。それを聞いていた紗夜さん達3人が、互いに顔を見合わせて、自己紹介を始めた。

(紗夜)「氷川紗夜です。Roseliaのギターを担当しています。花咲川女子学園に通っていますので……学園内で会えたら、よろしく願います」

(燐子)「し、白金……燐子です……。Roseliaのキーボードを……担当しています……氷川さんと同じ学校に通ってて……生徒会長をしています」

(あこ)「宇田川あこだよ！Roseliaのドラム担当で、リサ姉と友希那さんと同じ羽丘に通っています！よろしくね、神兄に海来姉！」

(神楽&海来)「神兄(海来姉)……?？」

紗夜さんと燐子さんの自己紹介が終わって、あこと名乗った小さな女の子が自己紹介を終わらせた際に……俺と海来の事をそう呼んで、俺と海来は2人揃って首を傾げながらそう言い返した。

(あこ)「だって、神兄はリサ姉と友希那さんの幼馴染みで、海来姉は神兄と親友で、見た感じリサ姉と友希那さんとも仲良さそうな感じがしたので……そう呼ぼうと思ったんですけど……ダメ……でしたか？」

(神楽)「ああ、そう言う事ね？大丈夫だよ。気軽にそう呼んでくれても」

(海来)「私も問題ないよ？改めてよろしくね？あこちゃん♪」

(あこ)「はい！」

まあ大した理由じゃないし、問題もないから大丈夫……そう思っていたら、燐子と名乗った女の子が、何か話したげにこちらを見ていた。

(神楽) (海来と同じ位……いや、変なこと考えるのはよそう……)

変な煩惱が頭の中を過ぎつつが……即座に頭を振って、それを阻止した。

(燐子)「えつと……お久しぶり、海来ちゃん……私の事……覚えてる？」

(海来)「うん！こちらこそ久しぶり燐子ちゃん！小学校の頃松本であった以来だね！」

あ、そういえば、海来と燐子さんは小学校の頃松本で会ってたんだっけ？

世間は広いもんだな……と思っていた矢先、燐子さんが立て続けに話し出した。それも、俺の元へ寄って来て……だ。

(燐子)「神楽君も……久しぶり……だね？」

(神楽)「え？俺……？何処かで会ったっけ？」

燐子さんにそう言われて……俺は思わずそう答えてしまった。

(神楽) (白金)……燐子……何処かであったっけ?)

それを聞いた燐子さん。ふふつと微笑みながら……記憶を探っている俺に、こう答えた。

(燐子) 『ラッナロククガンスロット神の戦の孤高の騎士』さん……つて、呼んだら……思い出してくれる……かな?』

(神楽) 「~~~~ツ~~~~!!?」

(海来) 「……え?」

(友希那) 「ラグナ……え?」

(リサ) 「燐子……今、何て?」

(紗夜) 「ラグナロク……ガンスロット……何処かdー」

(あこ) 「あああああああああ~~~~ツ~~~~!!?」

思いもよらぬ厨二病地味な名前が、燐子さんの口から出た瞬間……俺は声にもならない悲鳴を。友希那とリサ、海来は燐子に何て言ったかの問い掛けを。そして紗夜さんが何処かで聞いた事があると呟き記憶を探ってる中……あこが何か思い出したらしく、突然叫び声を上げた。



(神楽) (白金……燐子……りんこ……りん……ッ!?ま、まさかッ!?)

そして、俺も今し方……燐子さん……否、燐子達の事を思いだした。

(あこ)「思いだした!! 去年の冬に長野県へNFOのオフ会にいたの……神兄にそっくりの人……って言うか、神兄であ〜! 通りで自然と神兄って言えたんだ!」

(紗夜)「私も……思い出しました。確かあの時は私はまだ初心者でしたが……白金さんと宇田川さんに誘われてオフ会に行った時の事……。大江さん、貴方とはどうやら初めましてというより、お久しぶりと言うべきの样ですね?」

(神楽)「思いだした……。『りんりん』、『大魔王アコ』、『サヨ』……。紗夜さんの言う通り、久しぶりと言い直すべきだね……」

(燐子)「思い出して……くれたんだね?……  
ラグナロク・ガンスロット  
神の戦の孤高の騎士さん♡」

(神楽) (その厨二病地味たN・Nおれだけ!! それを今ルビ入れて呼ばないで燐子さん!?)

そう……この3人とは、去年の冬地元のショッピングモールのフードコートにて行ったオフ会で出会っていた。

ラグナロク・ガンスロット  
神の戦の孤高の騎士……とは、俺がNFO……。『ネオファンタジーオンライン』と呼ば

れるネットゲで今も絶賛愛用しているN・Nだ。

え？何故そんな厨二病地味な名前なのか？……プレイした当初は好きだったんだよ、厨二病が！でも末期にはならなかった。……色々恥ずかしくなって！だから愛用はしているものの……今となっては名乗る事すら恥ずかしい黒歴史相当のN・Nなのだ。

(友希那)「どうやら……皆それぞれ、2人とは出会って居たのね？世間って、広いものね」

(リサ)「アハハ、そうだね……♪」

ほんとに……広いものだ。現にこうして、各々違う形で再開を果たしたのだから。

色々と会話に花を咲かせていた俺達だったが、紗夜さんが「あっ！」と言う表情をして、その後咳払いをして話し始めた。

(紗夜)「脱線してしまいましたね。皆さん、そろそろ練習を始めましょう」

(友希那)「そうね……神楽、海来？早速で悪いのだけれど……私達の練習に付き合って貰うわよ？」

紗夜さんが練習を始めると言い出して……友希那が俺と海来に、練習に付き合わないかと誘ってきた。

(神楽)「えつと……理由は？」

(友希那)「貴方達2人が、小茂呂高校の音科の生徒である事を知った上での誘いよ？ 貴方達の実力を……今度はしっかりと肌で感じたいの」

(神楽) (なるほど……)

先の演奏を聞いて、そう思ったのだろうか……有名なバンドのボーカルに頼まれたとなれば……幼馴染み以前に、答えるのは容易だった。

(神楽)「わかった。ただ……あまり加減が出来ない。違和感を感じたら遠慮なく物申すからそのつもりで……海来も、それでいいな？」

(海来)「うん。友希那ちゃんにそう言われたんだから……元音科の生徒として、恥じない練習にするからね！」

(友希那)「わかったわ!!……それじゃあ、各自準備して……始めるわよ」

(7人)「!!!!!!」

!!!!!!

……。こうして……俺と海来と、Roseliaの5人による練習が、幕を開けたのだった。

（神楽）「……よし、それじゃあこれから合わせするから、皆集まってセッティングして」

Roseliaとの練習が始まって、個人練習を暫くした後……そろそろ良いかなと思つた俺は、皆に合わせをする事を伝えた。まあ当然つちやあ当然だが、此処CIRCLEで何十回練習をしているから、個人練習から合わせに移行する間の時間は全くかからなかった。

まもなくセッティングが終わると言う所で、俺は友希那の方へ歩み寄り、今回やる合わせの内容を聞いた。

そこで俺は、少しばかり興味深い内容を聞かされたのだった。

（神楽）「ほお……？主催ライブか」

（友希那）「ええ。F・W・Fに向けて、そろそろ次の1歩を歩もうと思つて」

(神楽)「なるほど。にして……場所と日時は？」

(友希那)「『渋谷dub』。5月4日の18時から始めるわ。17時30分に開演よ」

渋谷dub……設備も会場の広さも申し分ない場所だったはず……そこでやると言っている辺り、友希那達Roseliaが歩む1歩は、今现阶段で俺の予想以上の物だと思つた。

それはさておき……

(神楽)「敢えて聞くが、CIRCLEじゃないのか？此処だったら、皆常連な訳だし、スツツとの連携も支障なく取れるはずだが……」

(友希那)「神楽の言いたい事も分かるわ。でも……何時もライブしている場所で主催ライブを行つては意味が無いと思つたの。F.W. Fフェスの会場は当然ここじゃない。規模も場所も全く違う。ならば……今のうちに、私達も違う場所でライブを行つて、あらゆる環境下でも全身全霊のライブを出来るようにしておかなければならない。違うかしら？」

なるほど……踏み出す覚悟は揺らぎなく、目標に対する強い想いを抱いてるといふ事

か。

(神楽)「なるほどな。済まない……分かってはいたんだが、変な質問をしてしまった」  
 (友希那)「構わないわ。だから、最近は……ライブ当日違う会場で演奏する事を想定した練習もしているの」

なるほど……それに関しても、想定内であった。

いや、そうじゃなくちゃ……今後の俺と海来のするべき事に対して割が合わない。  
 たがら……俺が次に言うべき言葉が、すぐ様思い浮かんだ。

(神楽)「わかった。なら今日は、その主催ライブ当日を想定した合わせにしよう。1度、セトリ通りを通して、気になった点はその後1曲ずつかいつまみながら確実に解決する。……全身全霊で、頼むぞ」

(Roselia)「「はいッ!!!」」

友希那に、主催ライブで演奏する曲のスコアを貰って……俺と海来は、5人と大きく距離をとり、「始めてくれ」の合図として、右手を上げた。

(友希那) 「それじゃあいくわよ…… 『BLACK SHOUT』



(神楽) (なるほど……な)

セトリ通りの順で、一通り演奏し終えた Rosellia。

俺は、そう眩きながら……思った事を頭の中で纏め始めた。

(友希那) 「神楽、海来……どうだったかしら？」

(海来) 「ん………神楽君は、どう思った？」

友希那の問い掛けに対して、海来が腕を組んで考える姿勢をとりながら、言いたい事を考えた……「………わざとらしく俺に会話を振った。」

(神楽) (十中八九……『言いたいことは、同じ』……と言う事か)

俺にとつては、至極当然な話だが……俺と海来とは長い付き合いだ。友希那やりサとは流石に共に過した期間に関しては見劣りするもの……こうして意思疎通が出来る程に互いの事を分かりあっているのだ。

そう思いながら……俺は、一旦目を閉じて……「そうだな」と言いながら目を開けて



5人に話した。

(神楽)「そうだな……先ず全体的に言うのであれば……いい意味で『想像以上』。悪い意味で……『想定内』だ」

(リサ)「いい意味で想像以上で……悪い意味で、想定内？」

(紗夜)「……どうしてそう思ったのですか？」

(神楽)「そうだね……皆のことは、一昨日羽丘駅に着くまでに今までやって来たライブの映像を、ネットで通して見させて貰った。音や技術面……ネットで聞くよりも迫力があって、それでいて本格的に仕上がっていた。だけど……それだけだった。本番を想定して、皆演奏してくれたんだらうけど……音量も、1音1音の運び方も、サビの盛り上げ方も、曲の繋げ方も諸々……俺が想像していた範囲内に収まるに留まった」

そこまで言って、俺は間を置いて話続けた。

(神楽)「本番を想定して……目標だけに拘って演奏してたのか？それだけじゃ……皆には悪いけど、とても本番を想定した合わせとは言えない。会場の事を調べ、理解して……今までのライブの経験も生かした上で、その会場に、その日のライブに相応しい音

で演奏する。それが『本番を想定して合わせる』という事だ。因みに言うと、各パートの修正及び気になった点は殆どなかった。それに関してはまだ追って各自に伝える。以上だ……」

そこまで言い切った俺は、再度目を閉じて……そのままの状態で、「海来は？」と今度は俺が海来に会話を振った。

（海来）「アハハ……神楽君に全部言われちゃったや。私の言いたかった事も、神楽君と同じだよ？本番を想定して演奏したいんだつたら……もうちよつとそれに対する意識を強めた方がいいんじゃないかなうって。だから今の *Roseelia* はその意識力を高めれば、何時でも何処でも、最高のライブができると思うよ♪」

海来が言い終えたのと同時に……俺は目を開いた。

皆……唾然とした表情をしていた。まあそれもそうだろう……。恐らくだが、今までそう言った練習をして来てないのだろう。だから、どうしたら『本番を想定した』合わせができるのかだなんて意識してなかったんだなと思った。

(友希那)「なるほどね……想像以上の指摘……どうもありがとう。貴方と海来なら、私達の良いマネージャーになりそうね」

(神楽)「ありがとう。それじゃあ修正点wooooooooooえ？今何て言った??」

聞き間違いか？今『マネージャー』と言う単語が聞こえたんだが……

(友希那)「2人の意見を聞いて確信したわ。貴方達となら……Roseliaは、更なる高みへと羽ばたける。だからお願い……私達のマネージャーになって、私達をサポートして欲しいの」

(神楽&海来)「……………」

これはまた……聞き間違いじゃなかった。

そして、何より……

(神楽)「まさか……友希那に先越されるなんてな……」

(海来)「1本取られちゃったね？私達」

(あこ)「え……!?!」

(燐子)「ふ、2人とも…今、何て……」

(神楽)「羽丘に来る前に、Roseliaのライブの様子をネットで見たっていったら？その時にケツイしたんだ。この5人を…Roseliaが頂点のその先へ羽ばたく姿を…然と傍で見届けたいってね」

(海来)「だからね…私達2人でRoseliaをサポートする為に、頂点のその先へ羽ばたく姿を見届ける為に、マネージャーやろつて、なっただんだ♪」

再び…5人ともさつきと同じ表情をしていた。しかしさつきと違く…何処か期待に満ち溢れた表情をしていた。

そして……

(友希那)「宜しく神楽、海来。そしてようこそ、Roseliaへ」

(リサ)「宜しくね〜！2人とも♪」

(紗夜)「大江さんに、蒼導さん。宜しくお願いしますね？」

(あこ)「神兄に海来姉！宜しくね！」

(燐子)「海来ちゃん…よろしくね…？そして……」

ラグナロク・ガンスロット  
神の戦の孤高の騎士さん……

じゃなかった…神楽君♡」

各々、俺と海来に歓迎の言葉を送ってくれた。

とても、嬉しかった。嬉しかった………んだけどね？

(神楽)「燐子!?!俺をその名前で呼ぶのやめてくれえ!!?!/ / /」

燐子が最後の最後に俺を黒歴史の名前で呼んだ為……俺の自称『感動タイム』が一瞬にして終わってしまった。

(海来)「あ、アハハハ……まあ、兎にも角にも!これから宜しくね?皆♪」

(神楽)「何か調子狂うな……はあ、改めて……宜しくな?皆」

互いに挨拶を済ませ……中断してしまった練習を再開……しようとした、その時だった。

(オーナー)「相変わらず元気そうじゃないか」

(Roselia) 「「「お、オーナー」」」」  
 (神楽&海来) 「「先生!?!」」  
 !!!!!!?????」

スタジオの扉が開いて……1人の老人が入ってきた。

彼女は……ガールズバンド界隈では知る人ぞ知る有名なんて目じゃないほどの超有名なお方で、『ガールズバンド時代』を作り上げた所以で、その界隈に関わる人々は、その人を『オーナー』と呼んでいた。しかし、俺と海来は……小茂呂高校音科に在学中の時……彼女から手厚く指導を受けていたことから、彼女の事を『先生』と呼んでいた。

(オーナー) 「久しぶりだねRoselia。そして……大江と蒼導。相変わらずお前らは何時も一緒だね」

(友希那) 「お久しぶりです、オーナー。オーナーこそ、相変わらずお元気で何よりです」

(神楽) 「お久しぶりです先生。その……先生に連絡なしで編入してしまい、申し訳ありませんでした……!」

(海来) 「申し訳ありませんでした……!」

友希那達Roseliaは、友希那の挨拶に続き会釈と言う形で先生に挨拶をした。

俺と海来は……春休み前の前科持ちと言うこともあり……友希那達よりも深くお辞

儀をした。

(オーナー)「いいき。今回は大江と蒼導の2人に用があつてね」

(神楽)「俺と海来に……ですか？」

先生からの話……久しぶりのレッスンについてだろうか？そう思っていたが……先生の口からは俺の予想していたものとは大きく違う言葉が返ってきた。

(オーナー)「2人とも……私が紹介する音楽事務所に入社してみないか？」

(神楽&海来)「「え……」<sup>1?</sup>」

(Roselia)「「「「「「」」」」」」」

!!!!!!

何と……先生から返ってきたのは、俺と海来を音楽事務所への勧誘だった。

その言葉を聞いて、俺と海来は勿論Roseliaの皆までもが驚いていた。

(オーナー)「お前達5人の演奏技術が、私の教え子が所属する音楽事務所内で高く評価されてね……その教え子を通して、事務所の上層部の人間から勧誘の電話が来たのさ」



(神楽)「俺と海来が……音楽事務所に……!？」

(海来)「……で、ちよつと待って下さい。さつき5人って言いましたよね?それって私達が結成した『Quintet Heart』の事ですか?あのバンドは……私達は、今年の1月に開催された『軽音フェス』を持って、解散したはずです。何故今になって再結成とも言える話を？」

海来の言う通りだ。先生のその言葉をそのままの意味で理解するとなると……小茂呂高校音科にいた頃に俺と海来。あと残り同級生3人で結成したバンド『Quintet Heart』の再結成を意味する。因みに、解散理由としては、その時辺りに俺が羽丘へ帰ると言う話と、海来が東京の高校へ編入する(の時は何処へ編入するか聞かされてなかった)話がでて、存続困難と踏んだからだ。

(オーナー)「まあ……人の話は最後まで聞くものだ。何もQuintet Heartの再結成をする為にお前達を勧誘した訳じゃない。……大江?」

(神楽)「はい……?」

Quintet Heartの再結成が理由じゃない……?その意味が全くもって

分からない俺を無視するかのように、先生が俺の名前を呼んだ。

そして……その後に先生が口にした言葉は、俺にとつてまたとないチャンスとも言える言葉だった。

(オーナー)「当時のお前のカリスマ性含めた統率力と決断力、メンバーへの指導力が上層部の拍車が更にかかってね……曰く、『海来達5人が結成するバンドのプロデューサー』を担って欲しいとの事だ」

(神楽)「!?」

(海来)「う、嘘……!」

(友希那)「神楽が……」

(リサ)「プロデューサー……!」

紗夜さん達も同じように驚いていたが……一番驚いたのは俺だ。

まさか……こんなにも早く、自分の夢の実現の足掛かりとも言える出来事が舞い降りて来るなんて……

(オーナー)『自分の音楽で、誰にでも音楽が出来る事を証明したい』……お前のその夢

を叶えるための、またとないチャンスだと、私はおもうんだがね？」

(紗夜) 「自分の音楽で……」

(あこ) 「誰にでも音楽が出来る事を……」

(燐子) 「証明……したい……」

音楽……音を楽しむと書いて『音楽』。俺からしたら……それはつまり誰にでもそれをする権利がある。優劣とか家柄なんて、関係ない。皆平等に……音楽をやる権利がある。それを、世界の人々に伝えたい……それが、それこそが俺の叶える夢だ。

決して容易な夢では無い。何年……何十年もかかるかもしれない。

そんな途方もない夢の実現のキツカケを、先生が持ち込んで来てくれたんだ。

……………断る理由が……見当たらなかった。

(神楽) 「分かりました。その話……受けましょう」

(友希那&リサ) 「神楽!?!?!」

(海来&燐子) 「神楽君!?!?!」

(紗夜) 「大江さん!?!」

(あこ)「神兄!？」

言葉通り……このまたとないチャンス。絶対に逃さない。逃して……たまるもんか。そう心にケツイして、先生にそう答えた。

(オーナー)「承諾してくれるか……蒼導はどうだ？」

(海来)「……『自分の奏でるピアノの音色で、友達を100人作る』。子供っぽいけど、それが私の夢です」

(オーナー)「ああ。その話はしってるさ」

(海来)「私も……その夢を実現させたい。実現させると共に……神楽君の夢を実現させる手助けもしたい!私に出来ることならなんでもします!だから……私も、その話……呑みます!!」

(神楽)「海来……」

またしても……海来を、親友を巻き込んでしまったと思い、申し訳なきでいっぱいだったが……海来も先生の誘いに乗るとケツイした。

(オーナー)「わかった。なら直ぐにその事務所に話を通そう。と、言いたい所だが、無条件でその話をする程私は甘くわない」

(神楽)「条件が……あるのですよね?」

やはり、この人は変わらないな……。Quintet Heartの初ライブをする時もそうだった。期日までに、先生を満足させる演奏を、先生に見せる。当時はそんな条件を出していた。当時だけじゃない。軽音の大きなイベント出場の際も、先生はそれ相応の条件をだした。

だからこの人は、この話に関しても……条件を出すに違いない。そう思ったのだ。

(オーナー)「話が早いね。……湊」

(友希那)「は、はい……?」

(オーナー)「月島から話は聞いたよ。5月4日に、主催ライブを開くんだってね?」

(友希那)「はい……それが、どうかしたんですか?」

(オーナー)「主催ライブで演奏する曲全て……神楽と海来の指導の元、完璧に仕上げ……私が満足する演奏を???見せてくれ。それが大江と蒼導に出す条件だ」

(Roselia)「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

!!!!!!

案の定……と言うべきか。先生が出した条件「……それは、残り1ヶ月程度までに俺と海来でRoseliaにレッスンをし、主催ライブで行う楽曲全てを完璧に仕上げその演奏を、ライブを先生に見せる……」と言う事だった。

先も述べたが、当日まで1ヶ月程度の猶予があるが……俺はその一見長い様な期間がととても短く（とてもは盛りすぎだと思うが）、その上駆け引きの連続である事を……よく知っていた。

そして……海来も同じ様に考えていた。

（海来）（友希那ちゃん達Roseliaが……『さっきの先生の言葉を』、どれだけ重く感じ取れたか……1ヶ月……1ヶ月……）

何か考えが思い浮かんだのだろう……。海来が未だ目を閉じたまま口を開いた。

（海来）「……ねえ、主催ライブの準備は……あとどれ位で終わるの？」

（紗夜）「チケットは……このまま行けばノルマは達成します」

（燐子）「衣装の手直しも……順調に行けば……来週までには……」

（友希那）「後は会場のスタッフさん達、ゲストバンドの方々との当日の予定の最終確認ね……チケット以外は1週間から……遅くて2週間経たない内に全て終わらせるわ」

(海来)「……………ありがとう」

主催ライブの現在の進捗を聞いた海来は、俺の顔を見てきて、頷いた。

(神楽) (なるほど……………『俺に全て委ねる』……………か)

海来が今回の様な真面目な会話の中で、海来自身がその結果に、内容に異論は無いと判断した場合、俺に向かってさっきの様な行動をする。

つまり……………海来自身も、この条件を承諾する覚悟が出来てるといふ事になる。

(神楽)「……………分かりました。先生、その条件のみましましょう」

(オーナー)「分かった。なら主催ライブ当日……………楽しみにしてる。Roselia……………主催ライブ、やりきるんだよ?」

(Roselia)「……………はい!!!」

(オーナー)「話は以上だ。私は帰るよ……………大江、蒼導?花女での学校生活、Roseliaのマネージャー……………あとCIRCLEのアルバイト……………頑張んな」

(神楽&海来)「はい」

先生の言葉に対して、俺達は各々返事をして、お辞儀をした。それを見た先生は、右

手を軽く上げながらスタジオを出ていった……。

(神楽)「さて……友希那達、話がある」

(友希那)「……何かしら？」

(神楽)「色々と思う事があるだろうが……今は今後の方針を伝えるのが先だ。話は……それから聞く」

先生がスタジオを出た後、俺は友希那達に話すべき事があると言った。友希那達も、互いに顔を見合わせて頷き、俺が話し始めるのをまつた。

(神楽)「さっきの主催ライブに向けた準備の進捗……俺と海来も協力するから、遅くても1週間以内に終わらせる。残りの約4週間……まりなさんにも頼んで可能な限り此処とdubで練習する。良いな？」

(友希那)「……分かったわ。皆も、異論は無いわね？」

(リサ)「勿論♪」

(紗夜)「私達の御指導御伝達……宜しく御願います」

(燐子)「よろしく……お願いします……」



(あこ) 「あこも頑張るからね！」

(神楽) 「うん。そして早速明日から練習内容を主催ライブ、F・W・Fに向けた内容に変更する。それに関しては追々皆に連絡するから……皆、俺と海来の連絡先を今追加して欲しい」

そう言つて、俺達は携帯を取り出して……Roselia皆の連絡先を追加した。

(まあ友希那とリサに関しては幼馴染みという事で、割愛させてもらう)

(紗夜) (大江さんの連絡先……♡)

(あこ) (神兄と海来姉の連絡だあ〜！)

(燐子) (神楽君の連絡先……♡)

なんだろう……若干2名の煩惱がジワジワと此方にまで伝わって来るのだが……気のせいだよな？

(神楽) 「よし……残り僅かだけど、練習再開しよう。主催ライブ迄の時間は、有限なのだから」

兎にも角にも、これからやる事がたんまりとある訳だ。

無理しない程度に、精一杯頑張らないとな。

そう心の中で、ケツイした俺は……再び練習を再開したのだった……。

～END～

(友希那)「神楽？」

(神楽)「ん？どうした？」

(友希那)「今年の1月に……燐子達と会ってたのね？」

(神楽)「ん？ああ……NFOのオフ会だね。それがどうかしたの？」

(リサ) 「アタシ達を差し置いて……神楽は罪な彼氏だなく……って」

(海来) 「そうだよ神楽君？その時私と恋人同士だったのに……どう言うコトカナ？」

(友希那&リサ) 「詳しく……オシエテクレルワヨネ？ (ヨネ?)」

……この後、俺の家にてお泊まり会と言う名の尋問会が夜通し行われたのだった  
……。

## 幕間1話

Roseliaと顔合わせをして：はや1週間がたとうとしていた。明日からは新学期：普通の学生なら明日に向けての持ち物の最終チェックや、課題の追い込みに勤しんでるだろうが：彼女達と俺は違った。

(神楽)「お疲れ様。相変わらず今日も紗夜は早いな」

(紗夜)「弓道部に所属しているので：私にとってCIRCLEの5周ランニングは朝練の様なものですよ」

(海来)「そうだったんだね！はい、ドリンクとタオル。5分のインターバルの後、トレーニングに移ってね♪」

ランニングから戻ってきた紗夜に労いの言葉をかけたすぐ後に、海来がスポーツドリンクとタオルを渡して、一番乗りで戻ってきた紗夜にそう言い渡した。

今行っているのは、Roseliaの皆の為に作ったトレーニングの、『休日ウォーミングアップ』だ。事の経緯はひとまず置いて：このウォーミングアップの内容は

至ってシンプル。CIRCLEの外周を5周するという物だ。

コースは、俺が事前にCIRCLEの外周を徒歩で10分程度で1周出来るコースを自分で歩いて作り上げたコースだ。

5週……多い様に思えるが、彼女達の今後の基礎体力の底上げを考えそれくらいやった方が身につくと俺は思った。

(リサ)「ふう……、やつと5周目……」

(あこ)「神兄と海来姉が考えてくれたランニング……漸く自分のペースが掴めてきたよ」

紗夜がゴールしておよそ10分程度経過した後、リサとあこが同率でゴールした。

聞く話によれば、2人ともダンス部に所属しているとの事で、紗夜よりは見劣りはするものの、先も2人が言った様に、この一週間程で自分のペースを掴めて来てる様に見える。

海来「はい、スポーツドリンクとタオルだよ♪5分のインターバルの後、特訓に写ってね？」

(リサ&あこ) 「は〜い………」

因みに紗夜は2人がゴールする5分前程で特訓に移っている。こう言った感じで、朝一……正確にはCIRCLEが開くおおよそ10分前程に此処に集合してランニングを同時に始める。その後各自ゴールした人から5分程のインターバルの後特訓に移ると言う感じだ。(特訓の内容も今は省略させて貰う)

そして—————

（友希那&燐子）「はあ……はあ……」

リサとあこの2人がゴールしておおよそ3、40分以上経って…漸く友希那と燐子が息を荒くし、顔を真っ赤にした状態でゴールしてきた。

Rosealiaのメンバーの中で、この2人が特に基礎体力に関して危ない。単なるライブだけならこの様にランニングや特訓はしなくても良い。

しかし……だ。

主催ライブの様な彼女達にとって大きなライブを行う場合、体力やメンタル共諸々のコンディションを万全の状態に挑まなくては、終盤になるに連れてバテて仕舞うのが関の山という所。

それを回避するべく…俺はRosealiaの顔合わせの日の晩からほぼ徹夜で彼女達にあった特訓及びウォーミングアップを考えたのだ。

(神楽)「お疲れ様2人とも……タイムだけなら、この一週間僅かだが1分程縮まつてる。この調子で自分のペースを3人の様に見つけて基礎体力を付けて行こう」

(友希那)「ぜえ……ぜえ……特訓だけでも……身体に來ると言うのに……お、鬼だわ……」

(燐子)「酷い……です……神ラグナロク・ガンスロットの戦の孤高の騎士さん……はあ……、はあ……」

(神楽)「はい、無駄口叩いてる暇あつたら5分後の特訓に早く備える。それともあれか？まだ走りたいのか？」

(友希那&燐子)「しっかり休ませて頂きます……!!」

(神楽)「よろしい」

俺からの更なる鞭が、そんなに怖いのか……友希那と燐子はそう答えたあと、即座に海来からスポーツドリンクとタオルを貰い、5分後にはCIRCLEに入って特訓に移ったのだった……。

(海来)「それじゃあ神楽君、後は宜しくね？」

(神楽)「ああ。海来も、バイト頑張れよ」

海来は今日、CIRCLEのアルバイトだ。まりなさんと相談して、平日は交互で入



れる時間帯に勤務。休日（祝日含む）は午前中と午後で交代制で勤務と言う形でアルバイトする事になった。こうしておけば、一方が居なくてももう一方で *Roselia* のマネージャーを務めることが出来、先生の出した条件に備える事が出来るという訳だ。

俺がそう言うと、海来は一足先に *CIRCLE* の中へ入って言った。

それを見届けた俺は、未だに休んでいる2人を軽く叱咤して、2人の後に続く形で *CIRCLE* に入っていったのだった。

---

(神楽)「……うん、それじゃあ時間も近づいて来たから今日の練習は此処まで。各自、休息をしっかりとって明日の練習に備えるように」

(Roselia)「!!!」  
「!!!」  
「!!!」

スタジオの利用時間が近づいて来た為、今の今まで合わせをしていた俺たちは、5人にそう言って、片付けに移るよう伝えた。

5人が揃って挨拶した直後……友希那と憐子が、恰も糸の切れた操り人形の如くその場に崩れ、仰向けになって伸びてしまった。

(あこ)「ゆ、友希那さん!りんりん!?大丈夫!?!」

(紗夜)「所謂充電切れ……ですね。今井さん宇田川さん、2人をスタジオの隅に移動さ

せるのを手伝って下さい」

(リサ)「了解♪2人とも、今日も頑張ってたよね」

(神楽)「まあ……多少なりとも基礎体力の方は付いてきてるから、バテずに頑張れる日数も、自ずと増えるだろう」

そう言いながら俺は、友希那を起き上がらせようとしてる紗夜の手伝いをした。

まあ……その点に関しては、練習前の特訓及びウォーミングアップを始めた日は酷かった。紗夜は兎も角、リサやあこでさえも今日の2人見たくなくなっていたのだから。友希那と燐子に関しては頻繁に水分補給などで誤魔化しても倒れる頻度がそれこそ凄く、殆ど合わせられなかったと言う個人的にも酷い醜態が続いた。

(神楽) (あの醜態を先生が万一看てたと思うと……ゾツとするな)

そう思いながら、4人で2人をスタジオの端へ移動させて、さて自分も片付けを手伝わねばと思ったら、紗夜に「大江さんは2人の傍に居て下さい」と言われた。理由を聞くと、「何時もの事であれば貴方が傍にいればものの数分で回復するから」……だそう  
だ。

俺は何処ぞの癒しキャラか何かか?と愚痴を零しそうになったが、紗夜の言ってることは事実な為、今日も今日とて俺は2人の間に座り、2人の様子を見る事にした。

(友希那) 「ん……神楽？」

(燐子) 「神楽……君？」

(神楽) 「あ、2人とも起きたね？今日もお疲れ様。もう少しで片付けも終わるから、まだ休んでてもいいよ」

2人の様子を見始めて、5分もしない内に友希那と燐子が起きた。2人とも、寝ぼけた感じの顔で俺の名前を呼んだため、俺はまだ休んでてと言った。

言った迄は……良かったのだが……

(神楽) 「あの……何故故俺の両肩にもたれかかっているの？」

(友希那) 「こうすれば……神楽を直に感じれて、直ぐに元気になると確信したからよ」

／＼

(燐子) 「友希那さんの……言う通り……です／＼駄目……だった？（・？―・？）」

いや……ダメとかじゃないんだけどね？……遠くでこの光景を見て物凄く嫉妬してドス黒いオーラ出してる方が2名いるのですよ。





バキヤツツ  
!!!!!!

(あこ)「ひいいいいい……ッ??」

「……………あ、終わった。何か某有名なOCGアニメの処刑BGMまで聞こえてきた。」

(リサ)「神楽……………」

(紗夜)「湊さん、白金さん……………」

(友希那)「な、何かしら……………」?

(燐子)「な、何でしょう……………」?

(神楽)「……………」

(リサ&紗夜) 「3人で何イチャついてサボってんの!? (るんですか!?) 早く片付け手  
伝ってよ!! (手伝って下さい!!)」

(神楽&友希那&燐子)

「す、すみませんでした~~~~~~~~~~~~……ツツツ!!」

防音機能無視するような怒鳴り声により、俺と友希那……燐子の3人は、即座に2人



に謝り、片付けを手伝った。

そしてその後……俺達3人は、ロビーにてリサと紗夜の2人に正座をさせられ、俺が海来と交代する時間までめいっぱい説教をさせられたのだった……。

---

(神楽)「海来、お疲れ様」

(海来)「神楽君もお疲れ様……何があったかは、聞かないで置いてあげるね？」

(神楽)「そうして貰えるとありがたい……」

練習が終わり、俺はすぐ様スタッフの制服に着替えるべくトイレに行き、ロビーに戻ると……既にながった海来が Roselia の皆と会話をしている姿が見えて、俺は彼女に労いの言葉をかけた。

そして……まりなさんが用意してくれたのだろうか。手作りのサンドイッチと水入りペットボトルが机の上に置いてあり、それに齧り付いてる皆の姿が見受けられた。

(友希那)「ふふ、神楽のスタッフの制服姿……とても良く似合ってるわ」

(神楽)「な、何だよ急に……褒めても何もでないぞ？」

(燐子)「思ったことを……言っただよ?皆……そう思ってるんだから……/ / /」

(リサ)「燐子の言う通りだよ。神楽?それにしてもやつぱ何時見ても神楽のその格好……カッコイイよ♪」

(紗夜)「素敵です、大江さん♡」

(あこ)「神兄のカッコイイ姿見れるって思うと……練習も人一倍頑張れるよ〜!」

燐子の返事に便乗するかのようになり、リサ、紗夜……あこの順番でそう言われた。挙句の果てには海来に「マネージャーになってモテるね〜」と言われる始末。

正直気恥しいのだが……もう少しでタイムカードを切る時間なので、予め自分で用意した昼食(簡単なお握り数個と麦茶)を済ませ俺は立ち上がった。

(神楽)「それじゃ俺もう時間だから行くね?さつきもいったけど、今日やった所各自さらって置くこと。後、練習は夕方5時からだから時間厳守で。CIRCLEに着いた人から予約したスタジオで特訓をして、練習に移れる様にね?」

(Roselia)「!!!」

明日の予定を伝えた俺は、カウンター裏の事務所へと歩を進めた。

「……それとほぼ同時に扉が勢い良く開き……そこから友希那並の背丈の女の子が入ってきて、その子と俺はぶつかった。」

(???)「も、申し訳ごさいませぬ!! 私わたくしが余所見よそみをしてしまった余りに……! お怪我とかありませんか!」

(神楽)「い、いや……君こそ、大丈夫かい? 尻もちもついているし……俺も注意散漫だった。怪我とく……」(???)「神楽様!」……「ふえ?」

唐突に、俺の名前を様付けで呼ばれて……俺は思わず変な声を出してしまった。

紺色の紙を後に縛り、黒目だが……右目を青薔薇の絵が書かれた眼帯でかくしている小柄な彼女。

俺の名前を知ってる辺り……何処かであつてはすなのだから……果てきて、何処で……

(海来)「エトじゃん! 久しぶり!」

(友希那)「あら、八月ほづみ一日さん。今日も練習かしら?」

(エト)「海来先輩!? それに友希那様!!」

（神樂）「え？海来と友希那は……2人の子と知ってるの？」

誰だろう……そう考えていると、海来と友希那が、彼女の名前と苗字であろう言葉を口にしました。

（海来）「知ってる……って、神樂忘れちゃったの？彼女は八月一日エキ。元小茂呂高校音科の1年で声楽首席の子!!神樂君その子が練習で行き詰まった時、練習に付き合っ  
て上げてたじゃん！忘れたの!？」

（神樂）「八月一日……エキ……————あ」

思い出した。……漸く。

八月一日エキ。長野県松本出身の農家の娘で、音楽の道を進み歌手になりたいと言う理由で小茂呂高校音科に進学し、入試で声楽首席と言う成績を残した、俺の後輩。

彼女が入学した頃の頃、自分の思い描いた練習が上手く出来ずに思い詰めてた所を俺が見かけ、数日の間ワンツーマンで彼女の練習に付き合っただ事がある。

そしてそれが彼女にとって、とてもかけがえのない出来事だったらしく……以後俺の事を『神樂様』と呼び、崇拜する位に俺の事を親しみ始めた。

更に……なぜかはほんとに知らないが、彼女が編入する迄の間、俺が彼女にした事が瞬く間に拡がり……彼女筆頭の『神楽教』と言う物が生まれ、一部の先輩後輩、同級生らとすれ違う度に神楽様と呼ばれその場で崇拜されると言うNFOのN、N並に黒歴史となった事があるのだ。

故に、俺や海来……他の生徒達から彼女は『神楽狂』かぐらぐるいと呼ばれる様になったとか……。

(神楽)「ひ、久しぶりだねエエ。友希那樣……つて事は、もしかして編入先は羽丘かい？」

(友希那)「よくわかったわね神楽。八月一日さんは私とリサの後輩よ」

(リサ)「だいぶ前にエエが此処で1人で歌を歌ってる姿をアタシ達が見かけてね？友希那がその歌声に惹かれて少しだけだけ彼女の指導をしたんだ」

(紗夜)「的確な指導だったのか……八月一日さんが湊さんの御指導に感銘されまして、それがきっかけで湊さんの事を『友希那樣』と呼ぶようになったのです」

なるほど……まあ友希那の指導でなら、納得だな。

友希那樣と言う呼び方に対して、俺は頷きながらそう思った。

(エ中) 「神楽様とこうして再会出来るだなんて……私八月一日エ中、只今とても感動しております! どうかこれからも神楽様の事を拝み奉らせて下さい!!」

(神楽) 「はあ……別に良いけど、程々にな?」

(エ中) 「かしこまりました!!」

俺の忠告に対して、エ中は目を輝かせながら元気にそう答えた。

ホントに……大丈夫かな?

(まりな) 「あの……神楽君? もう出勤時過ぎてるんだけど……」

(神楽) 「……あ」

(まりな) 「……今日も宜しくね〜神・楽・君・♪」

(神楽) 「……は、はい……」

思いもよらぬ再会で舞い上がってしまい……、出勤時間を過ぎてしまった。

そして俺は、まりなさんのその満面の笑みで放たれた言葉に対して……とても重い足取りで、タイムカードを切ったのだった……。

{  
E  
N  
D  
}

## 第1章

### 1 2 話

(神楽)「今日から3年生……か」

そんな事を呟きながら、俺は台所で朝ごはんを作っていた。ご飯の方は昨晚洗って、今日の朝5時に予約して置いたから……今5時50分……もう直ぐだな。

もう直ぐ炊あがるのを確認した俺は、完成した味噌汁(具材は主菜の肉野菜炒で使ったキャベツと人参。そしてネギだ)

が入った鍋の火を止めて、俺は現在地進行形でまだ眠っている同居人を起こしに行く事にした。



(神楽)「海来?朝ごはん出来たからそろそろ起きて?」

2階に上がって、3部屋ある内の真ん中が海来の部屋だ。そこは元は母さんの書齋で、奥が父さんの書齋となっている。父さんは考古学の教授、母さんは考古学博物館の館長でそれにちなんだ書類等を保管しておく為のスペースを確保するという名目で俺の部屋も含め中々の広さだ。

まあ海来も海来で、1人の女の子の前に、ピアノストでもある為、楽譜や部屋で作業するためのキーボードを置くスペースを確保するべく、元母さんの書齋であるこの部屋を、自分の部屋にしたそうさ。

(神楽)(まあ……本音は俺と可能な限り、傍で居たいから……だそうだけど……)

全く、高2の頃までの名残りか?……と思いつながら俺は海来の部屋の扉をノックし、彼女を起こした。

しかし……彼女の声が、返事が返って来なかった。

何時もなら、「わかった、直ぐに行く！」だとか、「了解♪」等と返事が返ってくる筈なのだが……。

もしかたら……らしくなくまだ寝てるのかも？と思ひ俺は確認の為にドアノブを捻った。

(神楽) (……………?開いてる……………)

ドアノブが普通に回った事から、部屋の鍵が開いてる事が分かった。という事は、彼女は起きてる……或いはトイレに行つてるといふ事になる。しかし残念ながら後者の方は既に居ないことが確認済みの為、必然的に起きてるといふ事になる。

これは大江家のシステム……決まり事見たいなものだが、部屋で作業してる、もしくは寝る時は部屋の鍵を閉める週間を付けてる。これは所謂防犯対策としての大江家独自のセキュリティシステムで、強盗などから身を守る為の手段として両親が業者さんに頼んで作って貰ったのだ。

海来は一応居候として我が家にいる。この家で過ごす以上海来にも大江家の決まり事を守って貰うと言う事で、戸締りは然と徹底させている。

(神楽) (これでもし、まだ寝ているとしたら……色々話を聞く事になるのだが……) 兎にも角にも、確認する必要があると思つた俺は、「入るぞ」と一言いつて扉を開けた。

それが——彼女の仕事んだ罨、とも知らず。

(神楽)「海来?朝ごはん出来たからいい加減起き……ろ……ッ!?!?!」

結論から言えば……海来は、起きていた。

結論から言えば……だ。

俺が何故顔を赤くしてるのかと言うと……当の本人が、『生まれたての姿で、隠すべき所を隠した姿……所謂下着姿』で「してやったり♪」と言わんばかりの笑みで立っていたのだ。

とても一般人とは思えない程のバランスの取れた身体付きと真っ白な肌。年相応の女の子以上に発育した2つの果実……。その果実と共に下の方も可もなく不可もなくと言った感じで、青い下着で大事な所を隠している。

そんな姿を、まじまじと……不可抗力にせよ直視してしまった俺は、すぐ様海来から顔ごと目を逸らした。

(海来)「どくお?神楽君♪ドキドキした?」

(神楽)「ドキドキした?……じゃないよ海来!?!?!な、何で下着姿で居るんだよ!?!」

／＼服を着ろ服を!!／＼／

(海来)「も〜!少し位悪ノリして感想言ってくれたって良かったのにな〜」

(神楽)「そう言う問題じゃない!俺じゃなかったらどうするつもりだったんだ!!／

／

俺がそう突っ込んでも、海来は悪びれる様子を見せなかった。それどころか……

(海来)「そんな事、ある訳ないじゃん♪この家に居るのは、私と神楽君2人キリなんだよ?他の異性の人にこんな姿見せる訳ないじゃん♡神楽君にしか……私の大切な愛しの神楽君親友にしか、私のこんな恥ずかしい姿見せないんだカラネ?」

目を濁らせながら、ウツトリとした表情で俺にそう言う始末……てあれ?こんな感じの女の子を数名、見たことがあるのだgoooooooo

(海来)「も〜!こんなに素敵な女の子ガイルノニ、他の女の子の事考えちゃダメだよ?良い?私と2人きりの時は……例えそれがご飯食べる時でも一緒に風呂に入るときでも、一緒に営mー寝る時も、神楽君は他の女の子の事考えちゃダメなんだカラネ?

「イイ？」

(神楽)「全く……そう言うの良から、早くごhーhー」「イ・イ・??」分かった。肝に銘じとくから、早く朝ごはん食べよ？」

(海来)「ウン♪着替えるから、先に行つててね♪」

どうしてこうなった……と、心の中でさえも小声で呟き……改めて海来に朝ごはんが出来た事を伝え、返事を貰った俺は台所へ戻つて行つた……。

あんなイタズラ……金輪際辞めて欲しいものだ、ホントに。そう……思いながら。

一応、理事長からは……生徒達と鉢合わせしない様にと言う配慮の元、俺と海来の登校を9時頃にしてくれた。丁度その時間は、全生徒体育館で集会の最中だとか。

という訳で、俺と海来は花女の制服に着替えて家を出て……今現在、花女にたどり着き……校門で、俺達が来るのを理事長が待っていてくれた。

(伊吹)「時間通りですね。生徒達は、新学期初めの集會に出席してますから……どうぞ、理事長室へ行きましょ♪」

明るい人だ……そう思いながら、俺と海来は理事長の後に続いて校舎へと入って行った。

(桴歌&奏多) 「失礼します」

集会が終わったのだろうか……。途中で退室した理事長と共に、桴歌先生と奏多先生

が理事長室へ入ってきた。

(伊吹) 「それでは先生方、2人の事を頼みますね?」

(慧歌) 「ハイ。それじゃあ神楽君?説明会の時も言っただけど……よろしくね?」

(奏多) 「海来さんも、よろしくお願いします!」

(神楽&海来) 「よろしくお願いします!」

2人の先生に挨拶をし、握手を交わした。その際……海来が、痛そうな顔を一瞬していたが……何かあったのだろうか?

(奏多) 「ご、ごめんなさい海来さん!?痛かったよね!?ボク、つい張り切り過ぎちゃって……加減が出来なかったんだ……」

(海来) 「だ、大丈夫……です……」

(伊吹) 「もう!天宮先生!握手する時はちゃんと加減して下さいって何時も厳命してるじゃないですか!」

(奏多) 「ご、ごめんなさい……!!」

え……奏多先生……握力何kgなんです？いや失礼だと分かってても、知りたい……

(擘歌) 「それじゃあ神楽君！A組の教室へ行くよ♪」

(神楽) 「は、ハイ……ハイッ!?ちよ、先生……恥ずかしーッ!?」

(擘歌) 「大丈夫大丈夫♪多分皆教室の中だから♪」

(神楽) 「そういう問題ですか!?!」

何をされたのか……? 手首を思いつきり掴まれて、早足でA組まで連れていかれた。あまりの出来事だった為、教室に着くまでに何度か何も無いところで転けそうになったのだった……。

(奏多) 「そ、それじゃあ海来さん? ボク達も、行こっか?」

(海来) 「そうですね……」

そして、後から海来と奏多先生が、後を追う形でB組を目指したのだった。恐らく手を繋がらなかったのは、先程の教訓だろう……その時、海来はそう思ったのだった。



（慧歌）「それじゃあ神楽君は此処で待つて？先生が先に入つて話するから、合図したら中に入つてきてね？」

（神楽）「了解です」

俺がそう言うと、慧歌先生は教室の中へ入つて行つた。

理事長室で待つてた時に、理事長からこの学校のパンフレットを渡されて読んだのだが……新入生と俺除く在校生の男子生徒の数は2桁も行つていない。と言うか、1人……つまり、颯樹しかこの学園に男子生徒が居ないと言う事だ。

まあ……共学化が決まったのはつい昨年度の事だし、こればかりは仕方ないと思つた。

（神楽）（余り、変な目立ち方しないように立ち回らないとな……もしかしたら色々持たないかも知れない）

そう思いながら隣のクラスが気になった俺は、右の方を見た。すると、向こうもそう思つたのか、海来と丁度目が合った。

（海来）（お互いに、頑張ろうね！）

口パクだが……そう言つてる様に見て取れた。

(神楽) (ああ、お互い……粗相のない様にな?)

だから俺も、口パクでそう言って軽く手を振った。

そして俺は、A組の教室の方へ向き直ると……丁度彗歌先生が手を振っていた。

どうやら……入っても良いらしい。覚悟を決めた俺は教室の扉を開けて、中へ入っていった……。

「カッコイイ……!!  
／／  
／／  
／／」

「背めっちゃ高くない!？」

「タイプかも……………」

(紗夜&燐子) 「結婚したい……………」

(神楽) (なにこれエ…………)

教室を入り、教壇へ上がった直後…………この始末。

てかちよつと待て?最後の一言ハモつてなかった?何なら凄く聞き覚えある声だったんだけど!?

そう思った俺は、気だるいと言う表情を出すのを堪え、教室全体を、不自然だと思われない様に見回した。

(神楽) (……………いた)

教壇から見て、真ん中列の中間ど左列の前く中間辺りに、燐子と紗夜の姿があつた。しかも、燐子の前の席には千聖さん。紗夜が座つてる席の後ろ辺りに颯樹が座つてる。別に悪気とか満更ないのは分かつてるんだが…………2人の生暖かく優しい目線がこの気だるさに更なる拍車をかける。

気だるさが最高潮に差し掛かる寸前に、先生から「自己紹介お願いしま〜す♪」と言われ、俺は早く済ませようと思ひ自己紹介を始めた。

(神楽)「長野県小茂呂高校音楽科から編入してきました。大江神楽です。よろしくお願  
いします」

「声もカツコイイ~~~~!! // //」

「タイプかも…… // //」

「ヤバイ、一目惚れしちゃったかも…… // //」

(紗夜&燐子)「結婚したい…… // //♡」

(神楽)(なにこれエ……take2)

ヤバイ……ホントにヤバイ。こう言うの全く耐性ないからそろそろマジでヤバイ  
……てかあの2人、同じ事言ってるし、千聖さんと颯樹の表情が、更に暖かな表情になっ  
てる……4人とも、頼むからこれ以上勘弁してくれ……。

(擘歌)「はあ〜い、自己紹介も住んだ事だし皆静かにね〜♪。あ、神楽君の席は右側1  
列目の、1番後ろだよ〜♪」

(神楽)「分かりました」

そう答えた俺は、ホントに不自然に思われないように何とか気だるさを堪えて……指定された席に着いた。窓際の一番後ろか……悪くないね。勉強とか昼………兎に角勉強に集中出来そうな、良い席だと思った。

(彗歌)「あ、あと颯樹君？ 同じ男子生徒として……暫く校内案内とか、知らない事とかを教えるの………お願いしても良いかな？」

(颯樹)「分かりました」

この話に関しては……説明会の時に聞かされた話であるため、颯樹も快く承諾してくれた。

(彗歌)「はい、神楽君含めたこのメンバーで……卒業まで頑張って行きましょう♪」

彗歌先生も先生で、新任であるにもかかわらず……とても生徒達と打ち解けている様子だった……。

---

今日は新学期初日………という事もあり、学校自体は午前中に終わった。俺はと言うと

……学年集会や集団撮影や係、委員会決め等の合間に、多くの女子生徒からこれでもかと質問攻めされた……。

答えられる事は難なく答えたが……一番多く、厄介だったのが恋愛関係だった。やれ好きな人は居るのか？やれ好みの女の子入るのか？やれフェチ（ツボに嵌る、性癖に刺さる部位）はあるのか？……等と上げたら正直キリが無い位だった。まあ大方「ノーコメント」で済ませたのだが、途中燐子と紗夜がかなり圧ががった注意を間に割ってしてくれたお陰で……今現在、颯樹と3人で、学園内をまわっている。

（颯樹）「そして……此処が屋上だね。さつき案内した中庭と此処なんかは良くお昼に生徒がお弁当を食べる為に利用する事が多いんだ」

（神楽）「なるほど……つまりは、いい所で食べるのなら早めに行動って感じかな？」

（??）「そうですね。ですが……屋上に関しては人気ではあるにせよ、悪天候な時は勿論の事、風が冷たい時とかは利用する生徒達は居ませんね」

（颯樹）「千歌の言う通りだね。だから、無理に早めに行動しなくても、空き教室とかもあるから、そこでお弁当を食べるのも……悪くないな」

（神楽）「なるほど……」

グレーの髪を腰まで伸ばし、サファイア色の瞳輝かせている彼女水澄千歌みすみの助言も聞いて、今後のお弁当を食べる場所の候補が、ある程度決まったのだった。

因みに、千歌は颯樹とは幼い頃から知り合つてるとの事だ。これは颯樹自身から聴いた話で、詳しくは聞かないで置いたのだが……彼もまた此処の生まれだったらしく、今からざつと7年前辺りに、長崎へ引越したとの事だ。

(神楽) (何だか……自分の6年前の引越し当日の頃が、懐かしく思えるな)

そう思いながら、辺りを見渡して居ると、颯樹が「此処まで色んな所を案内したけど、何か質問は？」と尋ねてきたので、俺は首を横に振った。

(神楽) 「いや、特に無いよ。それよりも……俺なんかの為に付き合わせて申し訳ない。

2人とも、用事とか有るだろうに……」

(颯樹) 「いや、それに関しては問題ないよ。事務所の方は今日はoffだからね」

(千歌) 「私も、基本的にフリーですので、心配には及びません」

2人の言葉に、「そうか……」と応えた瞬間——ガチャツと言う音が聞こえて、俺達3人は反射的に後ろを向いた。

(海来)「あ！神楽君だ！お〜いッ♪」

(彩)「颯樹君も来てたんだ〜♪」

(千聖)「ふふっ♪千歌ちゃんも一緒だったのね？この様子だと……3人も校内巡りつて感じかしら？」

(颯樹)「まあ……そんな感じだよ」

(千歌)「私も特にする事が無かったので、颯樹と同行させていただきました」

屋上に来たのは、海来と彩さん、そして千聖さんの3人だった。海来は俺を見て直ぐに俺にハグして来た為……俺は少し後退りして、それを難なく受け止めた。颯樹も颯樹で、同じ様な事をしていたのだが……

(千聖)「彩ちゃん？私の目の前で、私のダーリー〜颯樹に向かって、何シテルノカシラ？」

(神楽)「……ん？」

彩さんが颯樹を抱き締めた直後……千聖さんが何処かで見たとあるドス黒いオーラを出しながら、目が全く笑ってない笑顔で彩さんにそう問い掛けていた。



しかし……俺の見間違えだろうか？彩さんが颯樹に抱きついていて腕の力が強くなった様に思えた。

(彩)「良いじゃん。千聖ちゃんは学校でも事務所でも颯樹君とイチヤイチャ出来るんだし、何なら家でもイチヤイチャしてるんでしょ？それくらい譲ってくれたってイイじゃん……」

(千聖)「それは許嫁として当然の事じゃない。それに事務所ではちゃんと仕事として弁えているからあれでも控えてる方よ？彩ちゃんには私がそんなふしだらな女に見えたのかしら？であればとても心外ね」

(彩)「そんなの関係ないよ！私にだって颯樹君を好きにしている権利位あるじゃん！そうやって独り占めするのは良くないって言ってるんだよ！」

(千聖)「はあ……貴女って娘は。少しは颯樹の気持ちを考えなさいよ。それにここは学校よ？何なら神楽君や、海来ちゃん、千歌ちゃんだっているのよ？少しは場をわきまえなさい」

(彩)「そうやってまた話を……！」

あゝあ……始まったよ(?)。これが所謂売り言葉に買い言葉って奴か。彩さんがあ

あ言うと千聖さんが間髪入れずに言い返しての繰り返し。颯樹なんかは天を仰いで「勘弁してくれ……」と言わんばかりの顔を、千歌と海来、俺に至っては、半ば苦笑いだつた。

(颯樹)「はあ……2人とも？神楽達も居るんだからその辺にして欲しいかな？特訓2倍にして欲しいならそのまま続けてもいいんだよ？」

(彩&千聖)「「ごめんなさい……」」

(颯樹)「よろしい」

え？へ？今なにが起きた？さっき迄恋人の取り合い見たいなやり取りしてた2人が、颯樹のたつた一言で即座に言い合い辞めたんだけど??

2人がそう言う程なんて……一体どんな特訓なんだ？確か羽丘駅で会った時も、彩さんが顔真っ青にしてたし。

まあ兎にも角にも、校内めぐりも終わったしそろそろ俺と海来はおいとましますかな？Roseliaの皆を待たせちゃ悪いし。

(神楽)「えっと、颯樹？これで校内めぐり終わったのなら、そろそろ俺と海来おいとま

しても良いかい？ Roseliaの練習と、バイトもあるから」

（千歌）「私もそろそろ良いでしょうか？ 帰りに寄りたい所があるので」

（颯樹）「ん？ あー、済まない神楽。用事があるなら……早く行った方がいい。千歌も……付き合わせて悪かったね」

（千歌）「颯樹の頼み事ですし、悪いだなんて少しも思っていないですよ」

千歌もどうやら用事があるらしく、これで帰るらしい。

（神楽）「それじゃあ3人とも、また学校で」

（海来）「バイバイ♪彩ちゃん！」

（颯樹）「ああ、またな神楽」

（彩）「また学校でね？ 海来ちゃん♪」

（千聖）「3人とも？ 道中には気を付けるのよ？」

俺は颯樹にそう言って、海来と千歌と共に、屋上を後にしたのだった……。

（END）



(彩) (神楽君……何処と無く颯樹君と似てたような……気の所為、なのかな?でも、決して悪い人なんかじゃない。もし、会話できる機会があつたら、神楽君に——)

(颯樹) 「彩、ちーちゃん? 僕達もそろそろ行こつか?」

(千聖) 「そうね」

(彩) 「うん! 今日もレッスン、頑張るぞ〜♪」

## 幕間 2 話

(神楽) 「確かこの辺りのはず……」

新学期が始まっておよそ1週間がたったとある休日のある日、俺はスマホのマップアプリを眺めながら幼馴染み2人と1人の後輩と花咲川のとある住宅街を歩いていた。

(友希那) 「神楽？ 私新しい曲のアイディアが浮かんだから忘れない内に制作を……」

(神楽) 「そうか。なら今日の勉強会が終わったら思う存分制作してくれ」

(あこ) 「あこ……今日りんりんと朝からNFOでイベント周回する約束してたから……」

(リサ) 「そくだったんだ〜♪なら今日の勉強会が終わり次第アタシから燐子にその旨伝えておくからね〜♪」

(友希那&あこ) 「は、はい……」

目的地まであと少しと言う所で友希那とあこがドタキャンを凶ろうとしていた為、俺とリサは声色は明るい顔がまるで笑ってない……恰もうちのクラスに居る若手女優兼アイドルの様な顔でそれを即座に阻止した。

因みに今日は午後から練習で俺もCIRCLEのバイトの為ドタキャン以前の問題なのだが。(それに事前に3人には練習の準備も確りしておくよう言っておいたからね)

本当に……彼女があ顔で何かしら咎めにきたら、抗えないと思う……ウン。

(千聖)「あら?そこにいるのは、神楽君とリサちゃん達じゃない」

(神楽&リサ)「ち、千聖!?(さん!?)」

突如後ろからもすごく聞き覚えのある声で俺とリサの名前が上がり、思わずその声の主に対して裏声で答えてしまった。

案の定振り返ってみると、そこにはあの千聖さんがこれまた俺にとって見覚えのある2人を連れて後ろから歩いてきた。

(友希那)「丸山さんと、松原さん？」

(あこ)「もしかして3人とも、今日の勉強会に呼ばれたんですか？」

(彩)「うん、そうだよ♪ね？花音ちゃん？」

(花音)「うん、颯樹君と千聖ちゃんから誘われたんだ♪」

そう……千聖さんと一緒に居たのは彩さんと、同じクラスの水色髪の小柄な女の子、松原花音その人達だった。

(千聖)「颯樹に頼まれたの万一の不祥事を此方側が起こさない様に2人を迎えに行つてきて欲しいって」

(神楽)「万一の不祥事……？」

(千聖)「ええ、花音は極度の方向音痴で彩ちゃんに至つてはお寝坊さんだから……」

(花音)「ふええくく……！」

……何だか、彩さんに対する懸念だけ凄く強調してた気がするのはい気のせいだろうか？



(彩)「ちよつと千聖ちゃん！何で私の懸念だけものすごく強調していったの!？」

(千聖)「なんでつて……彩ちゃん？レツスンとかの待ち合わせ時間ギリギリが稀で遅刻殆んどの貴女に対して颯樹は心配してるのよ？」

(彩)「うぐツ……」

あー、確かあの時……初めて彩さんと出会った時も彩さん盛大に颯樹と千聖さんの待ち合わせ遅刻してたっけ？そう言う事なら颯樹の判断は英断つて所かな？

(神楽)「ま、まあまあ……兎にも角にも此処で合流出来たことだし、全員で颯樹の家に向かおう？」

(千聖)「そうね、私が案内するわ。それと神楽君？」

(神楽)「な、何かな？」

(千聖)「私の顔に関して何か碌でもない思いを抱いていたわね……?」

(神楽)「……申し訳ございませんでした」

(千聖)「素直で良い事♪」

……千聖さんと行動を共にする時は、悟られぬよう最善の注意を払わねば。そう思い

ながら颯樹の家へ向かう俺達7人だった……。

---

(颯樹) 「いらつしやい、ちーちゃんもお疲れ様。疲れただろうに。リビングに冷たい麦茶を用意しておいたから、一息ついてから始めよう」

(5人) 「〇〇お邪魔します」

(神楽) 「お邪魔します(ん?ちーちゃん?)」

(千聖) 「ありがとうダーりー颯樹。お邪魔するわね、リサちゃん達?こつちよ」

何事もなく颯樹宅に着いた俺達一同は、颯樹にリビングへと案内された。(と言って  
も、千聖さんが率先して彼のリビングを案内してくれた)

……のだが、颯樹はさつきちーちゃんって言ったのか?

颯樹もそうだが、千聖さんもそうだ。俺達6人が挨拶し終えた後に続いて、千聖さんが挨拶したから聞き逃さなかったが、恐らく『ダーリン』と言いかけたな?

(神楽) (いや……余計な詮索はよそう。今日は勉強会に来たんだ。確りとそこは弁えな

いと)

そう思いながら、俺は被りを振り靴を揃えてあこにつづこうとしたのだが……。

(颯樹)「あー、……僕とちーちゃんは昔から幼馴染みだね。弁えてはいるんだけどどうか少しでも気を緩めると、昔の癖でそう彼女を呼んでしまうんだ」

(神楽)「え？あ、ああ……なるほどね」

「ちーちゃんが何でああやって呼んでるかは分からないけどね……」と颯樹が少し罰悪そうに言つて、俺は納得した。

……つて、颯樹も読心術極めてんのか？口は災いの元とはよく言つたものだ。そう思いながら、俺は颯樹にリビングへと案内された。

(颯樹) 「さて、一息ついた所で勉強会を始めるけど……折角だから各部屋に分かれてやろうと思うんだけど、どうかな？」

(千聖) 「私はそれで異論はないわ」

(彩) 「私も賛成♪」

(花音) 「私もそれで良いよ♪」

リビングにて、各々一息ついたあと颯樹が勉強会に関しての部屋割りについて話しだ

した。

まあ確かに……この人数で勉強道具広げて勉強会しようってなると、ホントに申し訳なく思うが少し小狭く感じてしまう。となれば、ここは颯樹の案に甘んずるのが妥当と俺は思い、「異論無し」の旨を伝えた。

(友希那)「私も、それで問題ないわ」

(リサ)「アタシも！」

(あこ)「あこも、勉強頑張る！」

友希那達も、俺の後に続いてそう返事をした。

リサがそう答えるのは何となく理解出来るのだが、友希那とあこがやけに素直と言うかなんと言うか……変なこと考えてなければ良いんだけど。

(颯樹)「よし、それじゃあ部屋割りをしていこう……の前に、此処リビングにお菓子を用意しておくけど勉強が各々終わったら。そして尚且つ1個ずつしか用意してないからね？此処で勉強する人達は先に食べないこと」

颯樹にそう釘を刺され、各々が了解の返事をした。

その後直ぐに部屋割りをし始め、各々勉強会を始めた。数名、異議申し立てする輩がいたが、それは俺と颯樹が何時もの(?) 手口でそれを鎮めたのだった。

---

く空き部屋にてく

(千聖)「彩ちゃん? 何度も言わせないで。そこはさつき言った公式の応用だって言うてるでしょ?」

(彩)「わ、分かってるよ! (はあ、何で颯樹君とじゃないんだろ……どうせなら千聖ちゃんじゃなくて颯樹君が良かったな……)」

(千聖)「ア ヤ チャ ン ??」

(彩)「ひいいい…ツ!」

こちら彩と千聖班。彩はどうやら颯樹と勉強出来なかつた事に限界を感じたのか、心の声を呟きそれを聞き逃さなかつた(読心術の賜物)千聖が例の目が笑ってない嘲笑で

彩に雷を落としていた。

〜 颯樹自室にて〜

(リサ) 「ハイ友希那〜? 『あなたは猫と犬何方が好き?』を英文にして?」

(友希那) 「猫が好きよ!」

(リサ) 「こゝら!」

(友希那) 「痛つ…何するのよりサ。私は正直に答えただけよ?」

この部屋では、リサと友希那。颯樹と花音と言った組み合わせで勉強会をする事に。

そしてリサと友希那側で…恐らく余程勉強が苦手なのか興味が無いのかだろう。イヤ、若しくは猫に盲目過ぎるのかもしれない。何れにせよリサの問い掛けに対して恰もアンケートの解答みたいな答えを出したため、リサは教科書を丸めて、友希那の頭を叩いたのだ。

(颯樹) 「……ジーーーーー」

(友希那) 「……なんだか左前から凄い威圧的な視線を感じるわ……」

そしてその光景を見るに堪えないと言った感じの表情でジト見しているこの家の主こと颯樹であつた。

(花音) 「ふえ〜…！ 颯樹君、此処の問題よく分かんないよ〜…！」

(颯樹) 「落ち着いて花音、そこは…：イギリスがどうして今のアメリカを植民地にしたのかを聞かれてるんだ。だから教科書のこの部分を読めば…：」

(花音) 「えつと…：あ、そう言うことか！ ありがとう颯樹君！」

(颯樹) 「どういたしまして」

(花音) 「颯樹君の教えかた、とつてもわかり易くて解けなかつた問題もスラスラ解けちゃうよ〜♪」

一方の颯樹と花音のペアは、颯樹の教え方が花音にとつても好評らしい。事実勉強会が始まってから、かれこれ1時間が経とうとしているが、このペアに至つては難航してる様子が1度も見られないでいる。

そして、その様子が時に第三者からの茶化しとなり…：



(リサ) 「何だか2人の勉強の様子見てると、2人が新婚夫婦に見えてくるよ♪」  
 (颯樹&花音) 「ほえ?!」

(友希那) 「そうね。2人ともお似合いよ?」

颯樹と花音の勉強風景を颯樹の目の前で見ていたりサが、2人をからかいだした。更には先程のジト目された仕返し……なのだろうか? 友希那もそれに便乗しだした。

(颯樹) 「夫婦……か。そう思われるのも悪くないね」

(リサ&友希那) 「……………へ?!」

(花音) 「↑……なるほどね♪ ……えいつ♪♡」

(友希那) 「~~~~~//」

(リサ) 「ちよ、花音!?! ええ!?! //」

颯樹の言葉に対して何か察したのだろうか……花音が隣にいる颯樹の腕に抱きついたので。

それを目にした友希那とリサの2人はと言うと……何時も幼馴染みにしてる癖してやはり女の子と言うべきだろうか。顔を真っ赤に茹で上がらせて、友希那は目のやり場

に困った動作をし、リサは自分のよく知る同級生がまさかこんな積極的で大胆な行動を取るなんて思いもしなかっただろう。物凄く動揺しながら、花音に突っ込んでいた。

(花音) 「颯樹君、この勉強会終わったら……どこか、お出かけしない? / / /」

(颯樹) 「そうだね。ならお弁当でも作ってピクニックお出かけしよ? 丁度桜が満開だから、お花見つて名目でどうかかな?」

(花音) 「いいね♪出来れば私と颯樹君の、2人きりで…… / / /」

(颯樹) 「構わないさ。花音……」

(花音) 「颯樹君…… / / /」

(リサ) 「す、すすす、ストーツプ!!!」

遂に耐えきれなくなったのか……恰もトマトにでもなったかのように顔を赤らめ、リサが颯樹と花音のイチャイチャムーヴに待ったをかけた。

まあリサの気持ちもよく分かる。あと少し、彼女の待ったが遅ければ颯樹と花音の顔の……もつと言うなら唇の距離が0になる所だったのだから。

(リサ) 「ほ、ほら颯樹! アタシが見た感じ颯樹花音に教えててもまだ与力がある感じ

だったから友希那に英語教えるの手伝って!!／／／

(友希那)「ちよつと、なんで私を巻き込むのよ…／／／」

(リサ)「イ イ カ ラ!!今日は勉強会なんでしょ!!茶化したアタシも悪かったから!勉強再開しよ!!ね!／／／」

(颯樹)「す、済まない…」

(花音)「ふええ…／／／」

颯樹もやり過ぎたと思ったのか、罰悪げな顔でそう謝った。花音も花音で我に返り…  
 と言うよりイタズラが過ぎたと言う自覚があるのだろう。顔を赤くしながら、勉強を再開したのだった…。

くリビングにてく

(あこ)「か〜ぐ〜に〜い〜…!!」

(神楽)「まさかこれ程とは……」

最後に此処、リビングにて神楽とあこのペア。先も述べたが、そろそろ開始から1時

間が経過しようとしてる。何やら集中力の限界が訪れたのだろうか、あこが椅子に座った状態で両腕両足を伸ばし机に伏せてしまっていた。

(神楽) 「とりあえずあこ……麦茶でも飲んで落ち着いて？」

(あこ) 「うん……プハア、ごめん神兄。あここんなに頭悪くて……幻滅した、よね……」

(神楽) 「いや、そんな事ないぞ？」

(あこ) 「え……？」

一旦落ち着きを取り戻したあこだが、自分自身の学力に幻滅されたと勘違いしたのだろうか……少し、落ち込んでいた。

しかし神楽は、「そんな事ない」と言いながらあこに教えていた科目、化学の教科書を開いて話し始めた。

(神楽) 「あこの場合、その気になれば基礎だけでもちゃんと理解出来てる。問題なのは、その応用を用いた場合どう対処すべきか。それを固く考えてしまう所にある」

(あこ) 「固く……考える？」

(神楽)「そう。だからあこの場合……そうだな、自分に合った考え方で解いてみるといいかもな。少し話が逸れるが、果物は好き?」

(あこ)「うん、好きだよ?」

唐突に聞かれた果物の好きか否か。それに対してあこは話が逸れると言われたにもかかわらず未だに訝しげな顔をしていた。

(神楽)「例えば化合は、2つ以上の物質が合わさって1つの別の物質が出来る。そこで……ミックスフルーツジュースを作る例えに変えてみるんだ」

(あこ)「ミックス……フルーツ……ジュース??」

あこの反応に対して「見てて」と言いながら、あこのノートにとある果物の絵を書いていく。

(神楽)「例えば、この鉄を林檎、硫黄を梨として考える。さつきも言ったけど、化合は2つ以上の物質が合わさって1つの別の物質になるんだ」

(あこ)「……あ!ミックスフルーツジュース作るのと同じだ!!」

神楽の言いたい事が理解できたのだろう。徐々に落ち込んだ顔から明るい顔になって行く。

それを見た神楽は、「いい感じ」と言いたげな顔で更に続けた。

(神楽)「後は簡単、化合……つまりミキサーの中に林檎と梨を入れて混ぜると……」

(あこ)「林檎と梨の味が混ざったミックスフルーツジュースになる……つまり、硫化鉄になるって事だよ、神兄？」

(神楽)「そういう事。化学の先生が教えてくれてね……物事固く考えるより、柔軟に楽しく考えれば化学は楽しいんだって」

(あこ)「柔軟に……楽しく……うん、あこ何となく分かって来たかも！ありがとう神兄！！」

あこの抱いた感想に、神楽は「どういたしまして」と言いながら、あこの頭を優しくなでた。

(神楽)「あこはとても素直な娘だ。だけどそれ故に物事を固く考える傾向がある。そん

な時こそ、好きな物に例えて柔軟に考えるのも、ひとつのてだよ？」

(あこ)「わかった神兄！あこ、この調子でどんどん解いてくからね！見ててよく!!」

そう言つて、あこは自分のペースで且つ、楽しく問題を解いて行つたのだつた……。

---

あれから更に1時間が経過し、実に勉強会から2時間程が経過した。颯樹には午後からバイトとRoseliaの練習があると前日前もって伝えたため、各部屋に居た6人はリビングに居る俺とあこの2人が居るリビングに集まりお茶にする事にした。

(神楽) 「えつと……」

(颯樹) 「これは……」



(友希那&彩) 「ううう~~~~……」

リビングに集まるなり、彩さんと友希那が机に伏せて唸る始末……いや、個人的に何がどうしたらそうなるのかがすごく気になる。

(神楽) 「友希那は何となく分かってたが……彩さんまでとは、以外……なのかな？」

(颯樹) 「彩は頑張れば出来る娘のはず……なんだけどな。……ちーちゃん？」

(千聖) 「ごめんなさい颯樹。彩ちゃん確かに途中までは良かったの。だけど途中から部屋割りに対しての不満の声を我慢出来なくって。それで予定よりもキツく教える羽目になってしまったの」

(颯樹) 「友希那に関しては、途中からリサに頼まれてね……申し訳ない。少し手荒になっちゃった」

(神楽) 「いや問題ない。友希那は音楽以外興味無いと言うのは知ってたから、手荒が丁度良い薬になるんだ。リサも、よく頑張ったね」

(リサ) 「別に大した事ないって♪、すんごく恥ずかしかったケド……／／／」

(神楽) 「ん？何か言ったりリサ？」

(リサ) 「ななな、何でもないよ？何でも？」

最後何故疑問形なのか、少し気になったが……まあそこは颯樹やリサ達3人の尊厳とかをまもるべくスルーと言う形を取らせてもらおう。

(リサ)「それにしてもあこ、勉強会なのに友希那と彩見たくよくばてなかつたね?」

(あこ)「うん! 神兄の教え方がとつても分かりやすくて、あこでも最後まで頑張れたよ〜!! (本当は神兄と一緒に勉強出来たから……だと思いうケド／＼)」

(神楽)「あこはよく頑張つてたよ? 最初こそバテはしたものの、あこにあった教え方をしてあげたらまるで別人見たくスラスラとね」

そうそう言いながら俺はあこの頭を撫でてあげた。

その様子を見ていた友希那がリビングの時計を見て俺に話し掛けてきた。

(友希那)「神楽、そろそろ時間になるわ」

(神楽)「もうそんな時間か……颯樹、今日は勉強会に誘ってくれてありがとう。また機会があつたら、今度は此方から誘わせて貰うよ」

(颯樹)「ああ。神楽の方こそ、バイトと練習……頑張れよ?」

互いにそう感謝の旨を告げて、身支度を整え始めた。

(花音)「ねえ颯樹君。もし良かったら息抜きに何処か出掛けない？」

(千聖)「名案ね。丁度桜も咲いてる頃だし、近くの公園でお花見なんてどうかしら？」

(彩)「良いね！だったらイヴちゃん達も誘おうよ！」

(颯樹)「そうだね。多い方がお花見つて楽しいから。イヴ達には僕から声掛けておくよ」

どうやら颯樹達は、息抜きにお花見へパスパレのメンバーも誘って行くらしい。

その様子を見ながら、リサと友希那、あこの身支度が整ったのを見て、俺は改めて颯樹に声をかけた。

(神楽)「それじゃあ颯樹。また学校で」

(颯樹)「ああ、道中気を付けて」

(神楽&友希那&リサ&あこ)

「「「お邪魔しました」」」

颯樹に4人揃って挨拶をし、CIRCLEへ向かうのだった……。  
そんな中俺は、ホントにまた機会があつたら今日みたいな時間を作れたらなと思いな  
がら……。

〈END〉

## 13話

(海来)「んんん……ッ、今日もいい天気だね♪」

カーテンの隙間から差し込む陽光に当てられ目が覚め……ベツトから降り、カーテンと窓を開けて朝一の空気を吸いながら……私、蒼導海来は水色のタンクトップに水色のシヨートパンツ姿でそんな第一声を口にした。

時間は……間もなく朝の6時になる所。私の体内時計に狂いが無ければ、もうすぐ彼が朝食を食べに来るよう呼びにくる時間になる。1週間ほど前に、ほんのイタズラ心で下着姿で待ち構えていたら、当の本人……私の親友でこの家の家主である大江神楽こと神楽君は顔を真っ赤にして私にツッコミを入れた。

(海来)「まあその日から余り日が経つてない日にまた同じことしたけど……その時は流石に耐性ついたのか、無表情で私の頭引っぱいたのはナイショの話なだけだね……」

(海来)「でも……少し位その気になってくれてもいいのになあ……。これでも約6年間付き合った中なの……」

「別れて親友同士に戻ってからずつとあのノリだもんなく」つと私はちよつとだけ愚痴をこぼして、部屋に備え付けておいた鏡の前に立ち、部屋着を脱いであられもない下着姿となった。

自分でも、驚くくらい白い肌でよく同級生から雪女と言われ少しシヨックだった時もある。胸も、大人の女性として成長し始める年頃から成長が早く、周りの男の子の視線が執拗いと思うくらい凄くやらしかった。しかし胸を差し置いても、バランスが取れた肉付きになり、左右非対称ではなく左右対称。一説によると、内蔵が一定の大きさでちやんとした場所にあるからだそうだ。

(海来)「あんな事があつても……自分のこのスタイルがずつと保つてられてるつて……」

「……閑話休題。よそう……もう過ぎた過去を思い返すのは。今はこうして神楽君の親友として、理解者として同じ屋根の下で、同じ学び舎に居られることが私にとつて何よりも幸せなのだから。」

(神楽)「海来? ご飯出来たから食べに来て」

(海来)「は〜い♪着替えたら直ぐにいくね〜♪」

まあ兎に角、先ずは神楽君と朝ご飯を食べて神楽君達と一緒に、楽しい1日を過ごそう。

そう思った私は、手早く且つ丁寧に着替えと手入れを済ませて神楽君が待つリビングへと向かったのだった。

---

(彩)「海来ちゃんおはよう♪神楽君もおはよう♪イエイツ！」

(海来)「おはよう彩ちゃん！」

(神楽)「おはよう彩さん、今日は1人かい？」

学校の校門前で、私と神楽君は見知ったピンク髪の女の子に声をかけられ、その声の主……彩ちゃんこと丸山彩ちゃんに挨拶をした。

(彩)「うん。今日は千聖ちゃんが朝ドラの収録で……颯樹君は千聖ちゃんのマネージャーとして付き添ってるんだ」

(神楽)「なるほど……流石アイドル兼若手俳優」

(海来)「ホントだね……」

(彩)「でも私も何時か千聖ちゃん達見たたくたくさんお仕事とか頑張ってトップアイドル目指すんだ〜!♪」



トップアイドル……か。パツと見ただけなら私の夢と外見だけなら似たり寄ったり。だけど……彩ちゃんのその瞳には、絶対に成し遂げたい叶えたいと言う、誰にもそれだけは譲れないと言った強い意志……もつと言うなら覚悟が感じ取れた。

(神楽)「凄いな彩は……彩なら絶対、その夢叶うと思うよ」

(彩)「ふえ!あ、ありがとう……/ / (何だろう、やつぱり神楽君……何処と無く颯樹君と似てるような……どうしてそう思うんだろう私……??)」

(海来)「でも、無理だけは禁物だよ?無理して皆に迷惑かけたりしたら示しつかないからね♪」

(彩)「う、うん!心配してくれてありがとう海来ちゃん。私、頑張るね!イエイツ♪」

そう言って、私は彩ちゃんに釘を刺して置いた。釘を刺す……と言うよりか、話題が逸れそうと感じた為軌道修正したと言った方が正しいかな?

彩ちゃんが……自分のしたい事とはかけ離れた事をしない様に。

(紗夜)「……コホンッ、おはようございます3人も。立ち話してる所申し訳ないので

すが他の生徒も通るからと言うのと、授業に間に合わなくなってしまうかもしれないので、一旦話を切り上げて校舎へ入ったらどうですか？」

(彩)「さ、紗夜ちゃん!? おおはようございますゆ……ッ!?! / / /」

(海来)「おはよう紗夜ちゃん♪」

(神楽)「おはよう紗夜。今日も風紀委員のお仕事お疲れ様」

私達3人で会話をしている最中、そこに(校門に)いた紗夜ちゃんが挨拶次いでに私達に指摘をした。

私は普通に挨拶をし、彩ちゃんは……挨拶で噛んで、神楽君は挨拶だけでなく褒めの言葉も発した。いや〜神楽君そういう所昔からさり気なくて罪なんだよな。私じゃなかったら一目惚れされてるよ?」

(紗夜)「おはようございます大江さんこれは風紀委員としての当然の責務なのでこういうのは朝飯前と言うものでもし良ければ一緒に此処で身だしなみチェックをしませんか意外と気持ちの良いものですよ外の空気しかも朝の新鮮な美味しい空気を吸いながら生徒の身だしなみをチェックして違反者を取り締まる朝だからこそやり甲斐のある仕事だと私は思いますが大江さんはどう思いますかしかも大江さんと言うそれはも

う素敵な殿方と委員会活動が出来てるんってするかどうかはさて置き私としては大江さんと一緒にやればより効率の良い身だしなみチエックが期待できると思ってるだけで決してやましいことは何一つ思っては居なくてですね……！——人がまだ話していると言うのに、何処へ行こうとシテルンデスカ？」

〔神楽〕「嫌だつて紗夜お前……此処で立ち話してないで校舎に入れて自分でいったんだぞ？」

〔紗夜〕「そうですね、ですが人の話は最後まで聞くものです。次からは……気を付けて下さい。ネ？」

〔神楽〕「は、はい……」

と言ってる傍からその場を離れようとしていた神楽君を紗夜ちゃんが捕まえた。神楽君には悪いが私と彩ちゃんはその隙に玄関に入り靴を履き替えた。

ごめんね、神楽君。本当は神楽君のフォローしたかったけど……紗夜ちゃんのあのマシガントークの後の惨劇の飛び火を受けたく無かったから……それに彩ちゃんまで巻き込んだら示しがつかないと思って……ね？ そう思った私は、今も彩ちゃんと少し駆け足で校舎に入り、教室へと向かったのだ……。

(彩)「はあ~~~~~」

(海来)「彩ちゃん……元氣だして?ほら、この唐揚げ食べてみなよ」

お昼休み、私と彩ちゃんは屋上で2人きりでお弁当を食べていた。そして未だに落ち込んでる彩ちゃんに、私はお弁当のオカズの唐揚げを1つ、彩ちゃんに食べさせた。

何故落ち込んでるのかと言うと……廻ること数分前、お昼休みになって、私と彩ちゃんは中庭で神楽君や颯樹君達とお弁当を一緒に食べる……はずだった。

その時既に中庭には颯樹君と千聖ちゃん、花音ちゃんがお弁当を食べ始めていて、何か神楽君が見当たらなかった。颯樹君に聞いたら、「中庭に来てそうそう隣子と紗夜に生徒会室へ強制連行されて行った」との事だった。

「神楽君の事何だと思ってるの!?!もう!!」って思わず零しそうになったがそれを何とか堪えて、仕方ないと割り切って颯樹君達とお弁当を食べようと思った矢先……;またしても問題発生。今度は彩ちゃんと千聖ちゃんの言い合い。会話の内容として大まかに説明すると……詰まる話颯樹君の取り合いだった。

主なやり取りはこうだ。

(彩) 『どうして私だけ一緒に食べちゃ行けないの？千聖ちゃん』

(千聖) 『何度も言わせないで頂戴？彩ちゃん。先に私達が中庭に来て神楽君も交えて4人で食べる事になった。それが紗夜ちゃんと燐子ちゃんによる連行で3人で食べる事になったの。神楽君には悪いけど、ダーリー、颯樹と花音と3人きりで誰の邪魔無く至福の一時を過ごせると解釈して……朝から多忙だった颯樹の為に花音と一緒にあゝんをして癒して上げようと思つてたの。そんな時に彩ちゃんと海来ちゃんが来た。それがどう言う意味なのか、分からないのかしら？』

(彩) 『そんな理由になつてないよ！それになんて海来ちゃんまで3人の時間を無駄にした人物に加えられるの!?海来ちゃんは此処で神楽君達とお弁当を食べれると思つて来ただけなんだよ!!』

(千聖) 『全く……彩ちゃん、少し落ち着きなさい。今日はたまたまタイミングが悪かつた。それだけよ?』

(彩) 『毎度毎度そうやって！結局は颯樹君の事を2人占めたかっただけじゃん!!何時も何時も……私だつて颯樹君とご飯食べたいのに、千聖ちゃん達ばかり!!』

(海来) 『ま、まあまあ!2人とも落ち着いて!?何も此処でお弁当食べてるのは千聖ちゃん達だけじゃないんだよ?周りの人が怖がつちやうから……彩ちゃん?今日の所は私と屋上で食べよ?……ネ?』



ど、神楽君が作るそれもすごく美味しいんだ♪」

(彩)「そ〜なんだね！（凄いな神楽君……。そう言った所も颯樹君と良く似てる……。でもどうしてなんだろ？朝からずっとその事が頭から離れない）」

私がそう説明した後、彩ちゃんは驚いていた。その反面……。パツと見だと分からないが何か考え事をしている様だ。と言つても……。朝の時に感じたものと同じ類。

私が彩ちゃんにあれこれ言う義理はないのだが……。神楽君のことが絡んで来ると、どうしても『理解者』としての本能と言うものだろうか？それが先走ってしまう。

聞く所によれば彩ちゃんは学生であり、アイドルでもある。自分の夢に向かって突き進み努力し、学生としてその勤めを果たしている彩ちゃんに、そんな惨いことは出来ない。

……否、させたくなかった。だから私は、少し釘を刺す事にした。

(海来)「彩ちゃんって、神楽君の事が気になるの？」

(彩)「うええ!?!ど、どうしてわかったの!?!」

(海来)「顔見れば分かるよ〜♪彩ちゃん朝の時も同じ顔してたし」

(彩)「嘘……。その時も気付いてたの？」

「まあね？」っと答えた私は、お茶を飲んで「それで、どうなの？」と彩ちゃんに答え  
た。

私の思い過ごしならそれで良い。けどもし、思い過ごしでなければ――

(彩)「その……神楽君って不思議だなんて」

(海来)「不思議？」

……と思っていたが、彩ちゃんの答えに私は首を傾げた。

思い過ごし……なのだが、私が想像してた斜め上の答えだったから。

(彩)「うん。神楽君って、何だか颯樹君と似てるなって……と言っても私から見た感じ  
でっただけで。何だか紗夜ちゃんや燐子ちゃんがああして神楽君と接してる姿なんか、  
私や千聖ちゃんとかと同じだなんて。だから……前から気になってたんだ。神楽君っ  
て一体どんな人なのかなって」

(海来)「ふくん……なるほど……」



私はもう一度お茶を飲んで、考えた。

彩ちゃんとは出会ってまだ一週間かそこらしか経ってない。神楽君との関わ

りなんていつたらそれこそ言い方悪いが私から言わせれば無いに等しい。

どうするかは一旦頭の片隅に置いておいて、とりあえずこれだけ知っておけば問題ないという範囲で神楽君の事を教える事にした。

(海来)「神楽君は優しくてマイペースな人だよ。面倒事は極力避けて嫌だと思ふ事はハッキリと嫌って言う……そんな感じかな？」

(彩)「そうなんだ……」

半ば納得、半ば「それだけなの？」と言わんばかりの顔……私らしくない言葉のチョイスしちゃったかも。

(颯樹)「彩！」

(彩)「えッ!? さ、颯樹君!? どうして屋上なんか……?」

そう思ってる最中……颯樹君が屋上の出入口からほんの少しだけなのだが、息を切ら

しながら彩ちゃんの方へ歩み寄ってきた。

(颯樹)「さつきは済まなかった彩。あの時君の気持ちを汲んで助け舟を出すべきだった。ちーちゃんにはついさつき確りと雷を落とさせて貰ったから安心してくれ。それに海来も……巻き込んでしまつて済まなかった、許してくれ」

(彩)「そ、そんなッ!? 謝らなくていいよ颯樹君! 私こそ、颯樹君達の前で、取り乱しちゃつて……ごめんなさい!」

(海来)「そくだよ! それにさつきの事は私も彩ちゃんももう気にしてないから、これ以上気に病まないで?」

何と颯樹君……さつきのやり取りに関してわざわざ此処まできて謝りに来たと言うのだ。もう気にしてないと言うのも事実だし、何だか申し訳無いというか……。

それにしても、何だか彩ちゃんがああ言うのも何となくだけど分かる気がする。

それに……少しだけ、わかつた事がある。

それを決行する為にも、少し急ぎ足で此処まで来てくれた颯樹君には悪いが、彩ちゃんの為にも席を外して貰おう。

(海来) 「それと颯樹君? ごめんね、私達まだお弁当食べ終えてないんだ。次の授業私達  
のせいで颯樹君を遅刻させる訳には行かないから……2人きりにしてくれる?」

(颯樹) 「そうだね……わかった。邪魔して済まなかった。僕は先に行くよ……彩? 遅れ  
ないようにね?」

(彩) 「うん! 颯樹君も、授業頑張つてね!」

彩ちゃんがそういったのを最後に、颯樹君は踵を返して教室へ戻つて行つた。

(海来) 「ねえ、彩ちゃん? 聞きたいことがあるんだけど……」

(彩) 「え? 何かな?」

(海来) 「彩ちゃんって、颯樹君の事好きなの?」

(彩) 「ツツ?!!?」

私がそう問いかけると、分かりやすい様に彩ちゃんの顔が真っ赤なトマト見たく紅く  
なった。

その様子を見ながら、私はそうだと気付いた証拠たるものを打ち明けた。

(海来)「さつきまでの彩ちゃんの話聞いて。あとはこれ迄の彩ちゃんと千聖ちゃんとのやり取りを思い返して……かな？」

(彩)「えっと……実は、そうなんだ。彼の事を好きになったのは……丁度1年前の話で……」

そして彩ちゃんは、私に颯樹君の事を好きになったキツカケとも言える出来事。今日に至るまでに起きた出来事を話し始めた。

(海来)「そんな事が……」

一言でいい表していいものには無い位、彩ちゃんの話は壮絶とも言えるし、過酷とも言える内容でもあった。

そして……それを話し終えた彩ちゃんの瞳には、どこか懐かしい……そんな瞳をしていた。

(海来)「6年……いや、5年前か。私も、今の彩ちゃん見たいな瞳をしてた。あの時……神楽君に想いを伝えたあの日、あの時の私……」

言ってしまうば……その瞳には、誰にも揺るがせる事が出来ない強い覚悟が宿ってい

る。どんな事をしてでも、彼の幼馴染みやクラスメイトを出し抜き、結ばれる事を強く欲している感じがした。

神楽君が颯樹君と似てると、彩ちゃんが言うように……私もまた或いは――

(海来)「彩ちゃんは、今もその気持ちは変わらないの?」

(彩)「うん。変わらないよ。あの日……私を助けてくれた運命の人……私の心を射止めた人……そんな彼に私は想いを伝えたい。あの時の恩返しを、彼の傍で願わくばずっとして上げたい!どんなに酷な現実を突きつけられても、彼の周りにいる娘が仲間であらうと友人であらうと!私は、彼と結ばれる事を強く望みたいの!!」

(海来)「なるほど……ね」

彩ちゃんが颯樹君に抱いてる想いを聞き終えた私は、スマホの電源を入れ……LINEにいたる彩ちゃんのトークルームにとある人物の連絡先を送信した。

送られてきた連絡先を見て、彩ちゃんは目を見開いていた。

その人物は言うまでもないが……まあ後で事情を説明して置こうとだけ言っておく。

(海来)「言い忘れてたけど……神楽君はね? 困ってる人や辛い思いをしてる人達を放っておけない人でもあるの。だから彩ちゃん。彩ちゃんその気持ちを現実にしたかったら、神楽君を頼ってみ? 神楽君なら、きつと……いや、絶対に力になってくれるから」

(彩)「海来ちゃん……ありごーごー」た　だ　し　!!」わあッ!」

彩ちゃんがお礼を言う前に、私は自分の人差し指を彩ちゃんの眼前にずっと指さしてそれを阻止した。

(海来)「これだけは約束して? 神楽君の事に関して深く関わり過ぎない、詮索しないで! これに行く行くは絶対彩ちゃんの為になるんだからね?」

「約束だよ!」っと私はそういつて、彩ちゃんの前でウイंकをした。

(海来)「私も微力ながら応援させて貰うから! 皆で叶えよ! 彩ちゃんのその願い!」

(彩)「海来ちゃん……うん! 私、がんばりゆ……! ううッ! / /」

これは決して、楽な道のりじゃない。寧ろ険しく先の無い過酷なものだろう。

それでも私は決めたんだ。神楽君と一緒に、彩ちゃんの手助けをして上げようって。

(海来) 「アハハ♪セリフ囁んじやう彩ちゃんも可愛いよ♪」

(彩) 「あうう〜…どうして大事な所で…」

(海来) 「…つて、いけない!!彩ちゃん!あと少しで予鈴がなっちゃう!!早くお弁当食べちゃお!」

(彩) 「嘘ツ!?急がないと!!」

スマホをみて、もうすぐで次の授業の予鈴がなる時間になると気付いた私達は、大急ぎでお弁当を食べて教室へ戻ったのだった……。

くENDく

(神楽)「全く……誰が良くて自分のおへ2人に食べられて2人のお弁当を恰もホアグラのダチヨウの様な感じで食べさせられなきやなんだよ……(それにしても……だ)」

『丸山彩さんが友達になりました』



(神楽) 「彩さん、いや海来にもだな。訳を聞く必要があるな……」

## 14話

(神楽)「今日の練習は此処まで！各自片付けを済ませて明日の練習に備えるように！」

(Roselia)「！！！！お疲れ様でした！！！！」

海来と共にRoseliaのマネージャーになって、交代で指導する様になってから早くも3週間……半月程がたった。全員、個人差はあるにせよ基礎体力は付いてきた様に思えてきた。最初こそとても危なっかしかった友希那と燐子は今でも息を荒くして、ガス欠で気を失う様な事態はほほほ根絶された。

それに……

(紗夜)「大江さん。少し宜しいでしょうか？」

(神楽)「紗夜……どうかしたの？」

(紗夜)「実は……特訓のメニューを私だけで良いので厳しくして貰っても良いでしょうか？」

(神楽)「……理由を聞いてもいいかな？」

（紗夜）「この3週間、自分也に出来ることを増やしたのですが……時間がそれでも余ってしまい、そのまま次の練習に臨むのもどうかと思ひまして……」

（神楽）「ふむ……（そうだな……）」

これはあくまで個人的な偏見であり、経験談も絡むのだが……ボイカル、ギター、ベースの3パート。まあ結論的には全パートこの事が言えるのだが、パフォーマンスを多く用いる楽曲等は自然と技術面に並行して体力管理が特に必要とされる。特にギターは他のパートよりも、身体全体を余すことなく使つてパフォーマンスする事が多い。

紗夜に関してこれに当てはめて言えば……確かに他の4人と比べたら郡を抜くほど……は多分盛りすぎだと思ふが余力を残し、時間を持て余してゐる時が多く見受けられた。しかしそれはほんの数日……次のやる事に即座に移つて練習に取り掛かっている姿が段々見られてきた。

一見それは良い意味で良き成長なのだが……

（神楽）「紗夜、特訓が終わつたら楽器を準備。その後チューニングを済ませたら楽器には触れないで各曲の苦手意識を取り除き克服する算段を立てるんだ。いいな？ 全員が特訓終わるまでとは言わないが最低でも5分から10分はやっている事」

(紗夜)「つまり……特訓が終わったら次の練習に向けた自分だけの練習メニューを毎日、特訓が終わってその都度考える……そう言う事ですね？」

(神楽)「そ。兎に角早く終わろうがどうだろうが消耗した大量を5分の間に確実に回復させる事。ライブ本番はMC含めても曲と曲の間は1分あるかないかだ。その間に息や気持ちを落ち着かせないと何処かでボロがでる。それを避ける為の休憩だと言う事。いいな？」

(紗夜)「はい、分かりました」

そう……先の会話にもあつたが、今の紗夜には曲間の回復の効率化と体力の管理が必须要だ。

でなければ幾ら弓道で鍛えてるからと言っても必ずボロが出てしまう……そう感じたからだ。

そしてこの手の話は紗夜に限った話だけではなくリサとあこも、こちらに話をしに来たことがある。まあ……この2人に関しては隣子と友希那が心配だから、余った時間を手助けに回したいという事らしいが……。だから2人にも、紗夜と同じ指示を出した。

(神楽)(まあ兎にも角にも……このまま残りの日までこのスタイルを維持して行けば主催ライブは何とかなるか)

主催ライブだけなら……何とかなる。今の彼女達の成長度合いを見て俺はそう思った。

そう、主催ライブ『だけ』なら……

(神楽)「ん？電話だ……もしもし」

色々と考えていると、自分のスマホから通話の着信音が鳴った。通話の相手は……d a bからだ。大方、3週間前から話を進めていたアレに対してだろう。

『もしもし、d a bのスタジオ責任者の者ですが……大江神楽さんの電話で宜しかったですか？』

(神楽)「はい。間違いないです……其方から電話して下さいったという事は、予定が組まれた……と言う解釈で宜しいでしょうか？」

『話が早くて助かります。次の土曜日……4月22日の10時から22時をR o s e l i a様及び主催ライブのゲストバンドの皆様の貸切りとさせて頂きました』

(神楽)「か、貸切まで……何だか申し訳ないです」

今責任者さんと話して居るのは、d a bでの予行練習の打ち合わせだ。R o s e l i aの皆もしかり、今回の主催ライブのゲストバンドの皆様全員……d a bでの演奏経験が無い者たちばかりだった。俺と海来は、実を言うと同じだけ下見としてd a bに訪れていた。感想としては……『実際に来て見てもらった方が早い』だ。そう言いたい位スケールが大きかったし、何より言葉だけでイメージ的な物を掴むより、実際に行って、感じて貰った方が手っ取り早く効率的と感じた為……今回主催ライブに参加するゲストバンドの方々に予行練習当日の予定を確認して居たりもした。

『いえいえ、何せR o s e l i aの主催ライブ。しかもこうして通話してるお相手があるのQ u i n t e t H e a r tのボーカリスト大江神楽さんなので、我々としては全力を尽くして協力したいと言うものなのです!』

(神楽)「俺達のバンド……そんな有名だったのか……」は、はあ……貴女がそう言うのであればその1日貸切、快く承諾しましょう」

2年間と言う短い期間だったが……それでもこうして俺と海来達で結成して活動していたバンドの名前が出てくると、自分達の努力が無駄じゃなかったと思えてくる。

『そうやって貰えると誠に助かります。ただ……一つお伝えしたい事が』

そこまで言うと、責任者の方が言葉を詰まらせた。

(神楽) 「どうかされましたか？」

『実はその日はスタジオの機材含めた設備点検の日でして、半日ほど……ステージでの練習が出来ないのですが……』

(神楽) 「なるほど、そう言う事でしたか。でしたら午前中は控え室での練習と、当日の流れに関しての打ち合わせをしたいとおもっていたのですが……」

『構いませんよ。何せ貸切ですので、スタッフが事務員の方に声がけしてくれば、対応しますので』

(神楽) 「了解しました。それでは後日、参加する人数及びバンドをご連絡致しますね」  
『ありがとうございます。それではまた後日』

通話を済ませた俺は主催者側である Roselia 皆を集める為に手を叩いた。  
よく見ると、まだ片付けが済んでいなかった……

（友希那）「どうかしたの神楽？」

（リサ）「て言うか、誰から電話だったの？」

（神楽）「……色々と言いたい事が山ほど増えたが、さつきd a bのスタジオ責任者さんから電話が来た。前々から打ち合わせしてた予行練習の日程日が決まった。それを今から伝える」

そう言つて俺は時計を見て、まだ時間がある事を確認した上でホワイトボードの方へ向かった。敢えて片付いてない楽器や機材等の間を通らず、遠回りして。

その様子を見ていたあこが、「しまった」と言う表情で動こうとしていたが、俺は「あこ」と短く低く、強めに呼んでそれを強制的に辞めさせた。

（神楽）「まず……日程は4月22日、10時から17時までの参加バンド全員貸切だ」

（友希那）「参加者全員……」

（リサ）「貸切なんだね、そこまで話が付いてたなんて……凄いじゃん！流石アタシの神楽だね♪」

（紗夜）「今井さんのかどうかはさて置き……他には何を話されていたのですか？」

（燐子）「??……ど、どうしたの、あこちゃん？顔が青いよ？」



(あこ)「だ、大丈夫だよりりん……!」

何時もならば全員の様子を伺いながらこういった事務的な要項は伝えるのだが……今回ばかりはそれをしなかった。否、したかった。

その俺の様子に、何か心当たりがあるのかどうかはさて置き……あこは何かを察していたように見えたが、それも気に停めない事にした。

そんなこんなで俺は走り書き殴り書きにならぬ様に、極力丁寧な字で書くことを心掛けてホワイトボードに通話で得た情報を今の Rose lia の皆に分かりやすいように纏めていった。

(紗夜)「大江さん? ちょっと宜しいですか?」

(神楽)「……何かな? あと少しで利用時間過ぎちゃうから、手短かに解決出来るやつでお願いね?」

一通り書き終えてキャップをした俺を見て、紗夜が何か気になったのか、俺に質問してきた。

……紗夜だけでなく、あこ覗いた3人も同じような事を思ってるのだろう……と

思いながら。

(紗夜) 「大江さん……参加バンド、2バンド足りてませんけれども……」

(神楽) 「2バンド?……何のことだ?」

(紗夜) 「え……?」

(友希那/リサ/燐子) 「!!!?!?!」

俺がそう答えると、当然の如く4人とも言葉を失っていた。対するあこは、さつきから青ざめた表情で何か言っているが、声が小さすぎて何を言っているか分からなかった。

——といても、何を言いたいのかは口の形で分かってはいた。分かっている……こうすべきと、俺は思った。

(紗夜) 「いや、ですから……私達 Roselia の名前ごー」

(神楽) 「書いてない」

(友希那) 「なら書いて頂戴?主催者である私達の名前が無いなんて、おかさー」

(神楽) 「断る」

(リサ) 「ちよ、ちよつと待ってよ神楽?何で書かないの?アタシ達主催者として出演す

るんだよ?」

(燐子)「そ、そうだよ……どうして……書いてくれないの?それに……ゲストバンドは他  
n——」

(神楽)「今のお前達に、どうしても子供でも分かる理由を、こと細かく説明する必要があ  
る?」

(友希那／リ苺／紗夜／燐子)

「「「ツツツツツ」」」  
!!!!?!?」

とうとう俺は我慢出来ず、自分で出さないと決めた顔を出してしまった。

そして俺が吐き捨てたセリフに怯えてるように見ている事しか出来ない4人に更に言  
葉を続けた。

(神楽)「俺と海来が3週間前に言ったこと……幾つこなせれた?俺と海来が居ながら3  
週間、どれだけ本番に向けた練習を積めれた?本番に向けた事前準備を自分達でこなせ  
れた?今こうして話してるこの空間だつてそうだ。5分も立たないウチに、楽器や機材  
含めて片付いて居るはずがこのザマ。一体全体……お前達は何をしてきたんだ?何を  
やったと言うんだ?なあ、教えてくれよ」

(あこ) 「ゴ……ゴメ……サイ……ッ」

(神楽) 「なあ友希那? 教えてくれよ。お前達は何を目指してるんだ? 何の為に練習してるんだ?」

(友希那) 「そ、それは……」

「これ以上はダメだ」……そう脳内に何度も誰かが訴えかけてるが、この顔を出してしまつた以上どうする事もできなかつた。

何か答えようにも答えられず唯狼狽えてる友希那を見て……否友希那達を見て遂に俺の中で何かが弾け飛んだ。

(神楽) 「F・W・Fへ出場するんだろ!? 頂点のその先へ行くんだろ!? だから練習するんだろ!! だから上手くなるんだろ!? 俺に盲目になり過ぎて自分達を見失つてるお前達に……何を変えられるって言うんだッ!!!」

(友希那) 「あ、ああ……ッ」

(あこ) 「ごめんなさい……ごめんなさい……ッ」

(リサ) 「ゆ、友希那!?!」

(燐子) 「あこちゃん!?!」

(紗夜)「……ッ」

言いたいことを吐き捨てて、皆の様子を見て……漸く我に返った。

目の前には、嘆き崩れた友希那と今はハッキリとした……しかし何処か震えてる声色で俺に向かつて「ごめんなさい」と謝り続け泣き崩れてるあこ……そしてそれをみて狼狽えるリサと燐子。そしてさつき迄俺の目を見て話していた筈が目を逸らした紗夜の姿があつた。

こんな事……したくは無かつた。だけど……短時間で飛躍的に、否……爆発的に言つていくくらいの成長をさせる為にはこれしか無いと、悟つてしまったのだ。

だから彼女達には……考える時間・実行し試す時間が必要だ。今の自分達には何が足りないのか、目指すべき道は目標は何なのか……それを考え改める時間が。

(神楽)「……何かを変えることの出来る人は、何かを捨てる、犠牲にする覚悟がある人達だ。今のお前達にはそれは到底出来ない事だ。そして……」

俺は、Roseliaと名乗る誰か達に背を向け、そう言つて部屋を出ようとした。

扉に手をかけ、ドアを開けた後……去り際に途切れたセリフの続きを言った。

(神楽)「俺は……自分の夢を叶える為なら、どんなものでも捨てる覚悟がある。それが例え、お前達だったとしても

……な」

そう最後に言い捨てて、俺はスタジオを……CIRCLEを後にした。確りと次の日の予約も済ませて置いた。

彼女達の為に……。

---

(海来)「そんな事があったんだね……」

(リサ)「うん、そうなんだ……」

CIRCLEでのバイトが終わって、ワタシは未だにロビーからただならぬ重い空気を漂わせてるRoselia?の皆から事情を聞いた。

最初驚きはしたものの、私もマネージャーとして彼女達の練習を見てきたから分かる。遅かれ早かれ……こんな事が起こるんだって事を。

(海来) 「それで？皆は神楽君にああ言われて、どう感じたの？」

(紗夜) 「……とても、重く感じ強く心に突き刺さりました。技術面や基礎体力は、確かに大江さんや蒼導さんの指導の元個体差はあるにせよ向上してました。しかしそれよりも他に……今回の主催ライブに向けて。もつと言うならF・W・Fに向けての覚悟や姿勢が……今の私達にあるかと言われると、今思い返すと足りてない……そう痛感させられました」

(海来) 「ふうん……友希那ちゃんは、どう感じたの？」

紗夜ちゃんの話を一通り聞いた私は、友希那ちゃんに話題を振った。

(友希那) 「……何も、言い返せなかった」

(海来) 「へえ、……続けて？」

(友希那) 「神楽達が来る前……私達の時間、想いは一度バラバラになり、止まってしまった。だけどそれ等はまた1つになって、5人で一緒の道へ進もうと想いを固めて……止まっていた針を、歩みを再び進める事が出来た。だからどんな事があっても、前を向いて進み続けられる……そう思っていた」





(神楽)「あれ?ここ何処だ?  
(しまったな……何時もの悪い癖だ。何か考え込んでる時は何時もこうだ)」

(神楽) 「取り敢えず……何処だか調べないとな……」

(???) 「ふええくくく……」

(神楽) 「……ん？」

## 15話

(神樂)「まさか……花咲川まで来てたなんて……まあ見知らぬ土地で花音さんと出会うよりかはマシか」

(花音)「ふええくく……／＼／＼でも、有難う神樂君。颯樹君家まで送ってくれて……」

すっかり日が沈んで、街頭が付き出した頃……俺は偶然出会った花音さんと颯樹の家へと歩いていった。

花音さんは、バイト終わりでそのまま自分の家へ帰ろう……と思つた所、颯樹から借りてた小説を返すのをすっかり忘れてたとの事で颯樹の家へ向かつてた……返は良かったが、何時しか千聖さんが言つたた方向音痴が発動した模様で……俺がホントに偶然出会う迄色んな道を迷走していたらしい。

(花音)「それよりも……神樂君はどうして花咲川に？家は確か羽丘……だよな？」

(神樂)「えつと……お恥ずかしながら、自分の悪い癖で考え込んで歩いてたんだ。んで、気付いたら此処に」

(花音)「そうだったんだね……何を考え込んだの？」

(神楽)「いや……大した事じゃないよ。それに、こちら側の事情に、クラスメイトを巻き込みたくないからね」

この問題は、彼女達の問題でもあり俺自身の問題でもある。だから……颯樹や花音さん、千歌や千聖さん達を巻き込む訳には行かない。

(花音)「そうなんだ……でも、クラスメイトで困ってる生徒が居たら助け合うのが……普通じゃないかな？ 私だったら、その人に手を差し伸べて力に成りたい。これでも……ダメかな？」

花音さん……何て優しい子なんだ。しかも小動物みたいなつぶらな瞳でそう訊ねられたら断りずらくなってしまう。

……って、いけないいけない。自我が飛びそうだった。後1押し花音さんから押されていたら俺は花音さんの問いかけに答えていたかもしれない。

(神楽)「気持ち嬉しいよ。けどそれでも君や颯樹達クラスメイトを巻き込む真似

は、俺には出来ない」

(花音)「そっか……でも、忘れないでね？私は神楽君のクラスメイトで、何か相談にのれたら何時でも相談に乗るから。だから無理だけはしないでね？(……あ、でも良いこと思いついちゃった♪)」

どうやら納得してくれた様だが、それでも花音さんは優しくかつた。そこ迄優しくされると、ついつい悩み事を打ち明けて仕舞いそうなくらいだ。

スマホを確認して、「もう少しだよ」と伝えた。その際花音さんは、同じくスマホで何か操作をしていたのだった。

---

(颯樹)「わざわざ返しに来てくれてありがとう花音。神楽も、花音に付き添ってくれてありがとう」

(花音)「どういたしまして♪この本とても面白かったよ。図書館だと、人気過ぎて借りれなかったから助かったよ♪」

(神楽)「俺の方はたまたま花音と出会ったってだけだから礼には及ばないよ」

無事、花音さんを颯樹の家に送り届け花音さんは目的を果たすことが出来た事を見届けた俺は……颯樹にそう言つて「それじゃあまた学校で」と言いながら踵を返し自分の家へ帰ろうとした。

しかし……颯樹に「ちよつと待つて」と引き留められた。

何か用があるのだろうか？時間も時間だし、海来も待つてるだろうから手短に済ませて欲しいのだが……

(神楽)「済まない、海来を家で待たせてるんだ。出来れば手短に頼む」

(颯樹)「そうか……なら包み隠さず言うー……その前に、立ち話もあれだから上がつてくれ。君がその気なら直ぐに済む」

(神楽)「何故……かは聞かないで置こう。大方、花音さんが颯樹の家に着く前にLINEで颯樹に何か言つたのだろうから」わかった。海来には悪いけど、お言葉に甘えさせて貰うよ」

(颯樹)「うん。それじゃあ上がつて？花音もいいかな？こう言うのは多ければ早く解決するだろうから」

(花音)「うん。それじゃあ……上がらせて貰うね？」

花音さんに話した時点で気付くべきだったか……と思ったが、仕方ないと割り切る事にして「お邪魔します」と言って颯樹の家に上がって行った。

颯樹の家のリビングにて、颯樹に言われるがままに俺は席に着いた。対する花音さんは俺の向かい側の右側の椅子に座った。

そして、颯樹が飲み物を持ってきてそれぞれ座ってる所に置いて自分も席に着いて話始めた。

(颯樹)「花音から話は聞かせて貰ったけど……何か、Roseliaとの間で何かあったのか？」

そう聞かれて俺は少しドキツとした。花音さんには何かあって、考え込んでたとしても話していない。だからRoseliaとの間でトラブルだなんて花音さんが察して話すことはまず無い。

毎度思うけど……颯樹は読心術か洞察力か何かを極めてるのか？ そう思えるくらい颯樹のセリフには驚いていた。

(神楽)「？(だから……)は包み隠さず話すでしょう)実はかくかくしかじかで……」



そうやって俺は今日の出来事、事の発端諸々を1から10まで順を追って話した。話をしている最中、颯樹と花音さんは何か質問する訳でもなく唯々真剣な顔で聞いてくれた。

その光景が不思議な事に、俺にとって居心地の良いものだった。

(颯樹) 「なるほど……大体の話の内容は理解した」

(花音) 「神楽君も海来ちゃんも、大変だったね……」

(神楽) 「Roseliaのマネージャーに関しては海来も俺も、そしてRoseliaの皆も望んでそうした事だから、マネージャーとしての責務はこれからも全うして行くつもりだよ」

(颯樹) 「それはそうだね」

一通り全て話し終えた後、颯樹と花音さんはそう言ってくれた。

何だか……さつき迄他人を巻き込みたくないと思って話そうとしなかった自分が馬鹿に思えるくらい、清々した感じだ。

(颯樹)「飴と鞭を使い分けるつてのがあるんだけど……君の話を聞く限り、今の Roselia には鞭が何個あつても足りない位ぬるい成長度合いだと僕は思ったかな？これは同じマネージャーとしての立場で言わせて貰うけど……指導者がいくら厳しい鞭を打つても、打たれた者がそれに相応しい成果を見せないと意味が無い。つまりは幾ら君が頑張つても彼女達がそれに見合つた成果をだして、応えなければ意味が無い……分かるかい？」

(神楽)「うん……だから彼女達に今現在自分達が招いた現状を打開する為の案を委ねる事にしたかと思つてる。だけど……それでも同じ誤ちを繰り返したらつて思うと、何が正解なのか……分からないんだ」

事実……颯樹や俺が言つたように、俺自身が彼女達の為に頑張つたとしても、彼女達にその気が無ければ意味が無い。

今回の一件は詰まる話そう言う事だ。

彼女達が俺に盲目である以上……大袈裟に言つてしまえば、何も出来やしない。何かを変えようとなつて以ての外。

諸悪の根源を彼女達自身が絶たなければ……

完全に手詰まり……そう思つていたら、花音さんが話しだした。

(花音)「私なら……やっぱりちゃんとか皆と話し合った方がいいんじゃないかな？ 神楽君と海来ちゃんか Roselia のマネージャーになってから、まだ半月しか経ってないにせよ……例えば盲目でも神楽を信頼してるとには変わりないんだから。今の Roselia の皆に答えを委ねるのも確かに良い案だと思うよ？ だけど……ちゃんと話し合つて、これからを決めた方が良く私は思ったかな？ 私が神楽君なら、Roselia の一員として、皆とどうするか話し合うと思うから」

(神楽)「!?」

(颯樹)「どうかしたのか？」

花音さんの一言で、俺は閃いた。

偶然とは言え、俺は颯樹や花音さんに相談が出来て良かったと心底思った。

……1人で抱え込む必要なんて、無かったんだと。

(神楽)「花音さんの言う通りだ。俺は……Roselia のマネージャー、あの時から Roselia の一員なんだ。仲間であれば……仲間の間で起きた問題なら、全員で話し合つて解決すれば良かったんだ」

そう言つて俺は、颯樹から貰つた飲み物を飲み干して、帰り支度をしながら話した。

(神楽)「颯樹、花音さん。今晚はありがとう、俺の相談に乗つてくれて。颯樹の家に着く前に花音さんが言つてくれた通りだ。俺は、1人なんかじゃない。1人で答えが見つからなければ、2人でも、3人でも……話し合つて解決するべきなんだつてね」

(颯樹)「そうか……お役に立てれて此方も嬉しいよ。だけど神楽、これだけは忘れるな。君がそうすると決めたのなら僕はこれ以上とやかかくいわないけど、君に盲目な今の彼女達と話し合つて解決させるのは

はそう簡単じゃない」

(神楽)「ああ、分かつてる。だけどさつきも言つたけど俺は1人じゃないんだ。1人で無理ならもう1人と……解決して行けばいい。俺には幼馴染みやメンバーだけじゃない。クラスメイトや親友が居るんだから」

颯樹の言つた事に対して、俺はそう応えた。確かに、普通のメンバーならば1人で話し合つて解決は俺だったら容易い。

しかし……これは余りにも逆に彼女達が可哀想だから言わないで置きたかつたが、彼

女達は普通じゃない。幼馴染み然りクラスメイト然り……唯一まともなのが後輩って……普通じゃない。

しかし、それでも彼女達は Roselia と言う有名なバンドのメンバーで、俺と海来はそのマネージャーとして一員に加わっている。

一員ならば……確りと支え合うのが筋と言うものだから。

ピロリン♪

(海来) 『友希那ちゃん達 Roselia の皆が家に來てるから、早く帰ってきてね♪』

(神楽) 「だから……俺は行ってくるよ。そんな普通じゃない彼女達の元へ」

そう言い残して、俺は「お邪魔しました」と挨拶をし、彼女達の元へ向かった。

(花音) 「神楽君、頑張ってるね♪」

(颯樹) 「そうだね。ご武運を祈ってるよ、神楽」

(花音) 「ねえ颯樹君……もし良かったら、今晚……」

(颯樹) 「はあ……仕方ないな。一応、ご両親に一言伝えておくよ」

(花音) 「ありがとう♪颯樹君♡」

俺が家に向かつてる最中……そんな会話のやり取りがされていたのは、また別の話だ……。

---

颯樹の家を出て家に着いた時には19時を過ぎていた。友希那達Roseliaが家に来ていると知って、足取りが多少重くはなったが、颯樹と花音さんに相談したからだろうか？家に近くなるに連れてその足取りは何時も通りの感じになっていた。

(神楽) 「ただいま」

(海来) 「おかえり、皆神楽君が来るまで待つてらるって聞かなくて……リビングで待たせてるから、好きなだけ話してきなよ。事情はちやんと、伝えてあるから」

(神楽) 「済まない、感謝する。海来も出来れば話し合いに参加してくれ」

(海来) 「……うん、分かった」

海来からある程度の事情を聞いて、俺は荷物を部屋に置いてから友希那達が待つリビング

ングへと海来と共に向かった。

(神楽)「遅くなって済まない。少し野暮用でね、寄り道してしまった」

(友希那)「大丈夫よ、神楽。その間……私達5人で貴方に話したい事を話し合っていたから」

(神楽)「そうか……」

恐らくは……今回までの自分達の誤ちを懺悔し、改めた後、どうすれば俺に許して貰えるかを話していたのだろうか？ 仮にもしそうだとしたら……申し訳ないが即刻帰らして、予行練習当日は本気でRosealia抜きでやろうと思った。

しかし……その心配は無かった。

(友希那)「私は……私達は、神楽と海来の指導に甘えていた。アナタ達の指導に従いそれを実行していれば主催ライブも成功して、その先のライブ……もつと言えばF・W・Fのステージに恥じなく立って、最高の演奏が出来る。そう思ってしまった自分達がい  
た……」

そこまで言うと、友希那は何故かあこの方をちらつと見た。

（友希那）「あこに……私達は気付かされたの。今の私達は昔の私達と良く似てる状態だっ」

『昔の私達』……以前友希那とリサから、聞いた事がある。SMSと呼ばれる音楽イベントに出演した事をきっかけに起きた、友希那達 Roselia にとつて忘れてはいけない過去（誤）があつたと。

曰く、それを乗り越えたから今の自分達が……Roseliaがあるんだと。

（あこ）「神兄や海来姉に頼りきっちゃてたつて、気付いた時……うん、神兄に怒られた時……昔のあこ達に、Roseliaの音を取り戻す為に、皆の想いが散り散りになったあの時に似てるつて思ったの。上手く言えないけど……このまま神兄や海来姉に甘えて頼りきつた練習してたら、昔のあこ達に逆戻りしちゃうんじや無いかつて……」

（紗夜）「事実……私達の技術面や、基礎体力等、大江さんや蒼導さんの指導があつたからそこ上達出来ました。しかしそれをいい事に……本来私達がやるべき事、進むべき道



を忘れてしまっていた。そうなった結果、知らずうちに大江さんや蒼導さんに頼り甘えてしまう形となってしまう。宇田川さんは、そう私達に指摘してくれたんです」

なるほど……友希那だけでは正直言つて見えて来る話しも見えてこない、つまりは話の内容が遠回し過ぎて歯痒さすら感じた。

最も……その後のあこと紗夜の話聞いた時点で、此方が言う事は決まってるのだが。

(神楽)「つまり……あこや他の者達が何か指摘しなきゃお前達はこれからも盲目のまま  
でい続ける。そう言うことだよな？ 先の話聞く限り、そう聞こえるし何より……  
俺はお前達が今までどうあったかを聞きに戻ってきたんじゃない。お前達が今後どう  
したいか、何を捨てて変わっていきたいかを知る為に戻って来たんだ。それを明確にし  
てないなら……予行練習だけじゃない、主催ライブもF・W・Fも、今後のライブも全  
て諦める事だ」

(Roselia)『ツツツツ……』

!!!!!!?????

なんだろう……もしかしたらと言う淡い期待を抱いて戻って来た自分が、彼女達と話

し合おうと思った自分が馬鹿らしく思えてきた。

これ以上時間の無駄だ。結局……彼女達は今後何も変えることは出来ないんだろう。そう思つて席を立ち上がった時だった。

（友希那）「待つてツ!!」

友希那がパンツと勢いよく席を立ち大きな声で、俺を強く引き止めた。

（神楽）「何故待つ必要がある？もう話すことは無いんだろ？所詮……お前達は俺達の指導や指示を持つてしてもその程度だった。そう言う事だろ？」

（友希那）「それは違うわ。私達はアナタ達の指導で確かに上達した。アナタ達のお掛けで、今までの私達じゃ経験し得ない事を経験できた。これは私にとっては紛れもない事実で、感謝してもしきれない。だから……私は選ぶわ。今日この時をもって、私はライブと練習の時にアナタ達から貰う恩を捨て、全身全霊で……Roseliaの湊友希那としてのプライド、誇りをかけてアナタ達の理想に込め、そして……頂点のその先へ、Roseliaと共に狂い咲く。これが、アナタ達に伝えたかった私の……いいえ、私達の答えよ」

その言葉を言い放った友希那を見た。

その目線は、確かに俺を見てとらえている。だけどその瞳の眼光には、今後の……未  
来の Roselia の在るべき姿を見る様に見えた。

無論それは、他の4人もそうだった。

全く……話し合い始める前からそういった目で、態度でいて欲しかったよ。ホント  
……彼女達に甘いな、俺は。

(神楽)「いいのか? 言ったからには俺と海来も全力でやらせて貰うぞ? 今まではお前達  
の為にお前達の実力にあった容量でやってた。お前達がその気なら、練習中の飴は一切  
与えん。寧ろ俺達が体験した特訓レッスンを味合わせてやるから覚悟しろ? 弱音泣き言言った  
奴は即刻その日の特訓から離脱させるからな、いいな? あと最後に……今後練習中に俺  
に盲目な態度行動言動とつてみる、次はないからな!!」

(Roselia)『はいッ!!!』

これが……恐らくは彼女達からして、俺と海来からしても最善の選択だと思う。

他のマネージャーや外部指導者等から見たら、恐らくまだぬるい選択だと思う。実

際、過去の俺……海来達とバンドをしてた時はこれよりも厳しくやっていた。

全くもって……人とは矛盾だらけの生き物だと心底思う。

——それはさておき。

(神楽)「海来、少し買物物に行ってくる。その間に友希那達と協力して、晩御飯の支度と泊まれる準備をしてくれ」

(海来)「りよ〜かい♪いつ頃戻って来れそう?」

(神楽)「多分あれはホームセンターに揃ってると思うから多分1時間掛かるかどうかだと思う。出来る範囲でいいから、頼めるかい?」

(海来)「勿論♪行つてらっしゃい」

海来に見送られ、未だに唐突過ぎる出来事にポカンとしてる5人をよそに、俺はガレージに停めておいた原付バイクにのり、ホームセンターへ向かった。(尚、原付免許は高二の頃に取得済みで、もしもの為にと母さんに頼んで自宅に愛用してた原付バイクを置いておいた)

(友希那)「ねえ海来? どうしてお泊まりを?」

(海来)「どうしてつて……皆今何時だと思ってるの?こんな夜遅くに女子高生を出歩かせるなんて危ないよ?ほら、分かったら神楽君に言われたことしないと……つて、その前に、皆ご両親に一言泊まる旨を伝えて置いてね?」

(Roselia)『は、はい……』

---

(神楽)「……………」

Roseliaの今後の方針が明確となり、急遽行うことになったお泊まりも無事に  
終わり……………スマホ時計はもう直ぐ0:00になろうとしていた。

そんな中俺は、アイスコーヒーが入ったコップ片手に自宅のリビングにて考え事をしていた。

(神楽) (皆と共に……か)

話し合いで友希那が言っていた単語……。皆、と言うのは恐らく俺と海来も含まれる。

あの友希那が、俺達の事をそう思っていただなんて思いもしなかった。

とても嬉しい……正直な気持ちそう思ったのだが、俺の脳裏には2つの事がちらついで気が気じゃなかった。

(神楽) (仮に主催ライブが成功し、先生の満足いくライブが出来たとしよう。そうなれば俺と海来は先生が言っていた事務所に入社し、俺はプロデューサーとなり……入社して直ぐ結成されるであろうバンドの指揮を執る事になる。となれば彼女達 Rose lia にさく指導の時間が必然的に減る事になる)

そうなった場合俺は……俺と海来は、彼女達が見せる頂点のその先の景色へと無事導くことは出来るのだろうか？

考えるだけ損……それは分かっている事だが、どうしても考えずには居られない。

そしてもう1つ……

(神楽) (これ迄の2人……紗夜と燐子の態度を見て確信した。それにあこも……。ああ

見えて正直者で、何らかの要因が重なって4人と同じ感情を抱くのは明白。つまりは……)

友希那とリサ……この2人と交わした約束の選択肢に、彼女達3人が新たに加わるのだ。

(神楽)「加えて彩さん……彩と交わした約束……と言うよりかはお願ひ事もこなさなきゃいけない。全く……一体全体誰がこんな濃厚で忙しい1年を過ごす事を予想出来たんだよ」

ほんとに……心底そう思う。普通の学生ならばこんな1年送る事はまず無い。

そう思いながらコーヒーを飲んで、今日の所は一旦それに関した考えを棚に置いておく事にした。

明日は幸いにも休み。朝は彼女達を見送って、その後午後に練習をする手筈。出来れば主催ライブの進捗含めた会議たるものも出来れば理想的だ。

(神楽)「手加減なんかしない。その程度のバンドと再び解釈するような事があれば今度こそ見捨てる。だから……友希那達、そう言ったからには全力で……俺と海来の指導に



応えてくれよ」

そう言った俺はコップに入っている残りのアイスコーヒーを飲み干して、自室へもどって行ったのだった……。

）第1章・END  
（

## 第2章

## 16話

(神楽)「……それで？君達Poppin PartyはRoseliaが行う主催ライブに参加して、主催ライブが如何なるものか……それを知る為に参加する。それで間違いないかい？」

(香澄)「ハイッ!!」

主催ライブに向けた本格的な練習が始まり、今日も学校が終わりCIRCLEにてRoseliaの皆と練習……の前に、ロビーにてPoppin Partyと呼ばれるガールズバンドの5人と俺達Roseliaで話をしていた。

遡ること今日の昼休み……燐子と紗夜とで主催ライブに向けた準備の進捗等の再確認をするべく生徒会室にてお昼を食べていた時だ。どうやらゲストバンド枠の残り1枠にPoppin Partyと言うバンドを招待したとの話でそれに関して2人に訳を聞いた。

……事の発端は新学期初日、Galaxyと呼ばれるライブハウスにてアルバイ

トをしている朝日六花あさひむつかと言う娘がPoppin PartyのメンバーにGalaxyでライブしてくれるバンドを探していると声を掛けた事が始まりだ。その声掛けに応じてPoppin Partyが他のバンドメンバーを招集した所、3バンドその招集に応じたとの事(その中にRoseliaも含まれている。パスパレは事務所所属のアイドルバンドと言う事で招集に応じれなかつたらしい)。

結果……ライブは無事成功。しかしライブ終わりにRoseliaが主催ライブ開催の告知をしたらしく、それに便乗してPoppin Partyも主催ライブをする  
と告知した。

しかし当の本人達は主催ライブの事を全くもって知らず、あの告知も言い出しつぱた  
る戸山香澄とやまかすみが独自の判断でやったとの事……。

(神楽) (そして、主催ライブについてアドバイスを聞くべく燐子と紗夜に相談した所  
……Roseliaの主催ライブにゲストバンドとして出てみないかと言う話に発展  
し同日友希那達とも話をつけて……今に至ると)

正直言つて……頭が痛い。自分もそれについて早く知ろうとしなかったのも悪いが、  
色々と問題要素がありにありすぎて……と言う点で頭が痛かった。

閑話休題閑話にも角にも——あの場で友希那が釘をさしてくれた事に關しては感謝してる。  
色々と物を言う手間も省けた。

(神楽)「まあ友希那から言われてから随分と日が経った訳だが……俺が言いたいことは友希那と対して変わらない。どんな動機で参加しようがしまいがRoseliaの主催ライブと言う主旨は変わらない。その日のRoseliaのライブの熱に負けないライブをする……それを約束できるかい?」

(PoppinParty)「はいッ!!!」  
 !!!宜しくお願いします!!!  
 !!!」

彼女達の返事を聞いて俺は「ふむ」と頷いた。

口先だけの返事なら誰でも出来るが、彼女たちはそんなヤワなバンドじゃない事は前もって友希那達から聞いていた。

だから俺はあとは彼女達の好きな様にやらせようと思いきやカバンからとあるプリントを一枚取り出し、戸山さんに渡した。

(神楽)「来週の土曜日……dabにて予行練習兼ねたステージ練習を1日行う。1日とは言え時間余すことなくスケジュールを先方の方と組んだから、時間厳守で行動する様に遅れる様なことがあれば……ゲストバンドとしての君達の枠を白紙にさせてもらう。いいね?」

(香澄)「は、はいッ!! 頑張ります!!」

そう答えた彼女は、他の4人と共にCIRCLEを後にした。聞く話に寄ると……彼女達はメンバーの市ヶ谷有咲いちがやありさと言う娘の家の蔵の地下にて練習を行つてるとか。

彼女達が出て行つたのを見届けて、今度はRoseliaの皆の方を見た。

(神楽)「予行練習もそうだけど、主催ライブまで時間が無い。早速練習を始めるよ? 特訓メニューを30分で終わらして、終わった人から楽器準備とチューニングをして、その後個人練に移ること。今から30分後にはリズムパート、メロディーパートの2パートに別れてパート練習を行い始めてる事。そこから更に30分後には全体で練習を行うからそのつもりで!」

(Roselia)「はいッ!!」

俺は彼女達にそう指示を出して海来が居るカウンターへと向かい利用時間を確認してから、特訓を行つてるであろう彼女達が居るスタジオへ向かったのだ……。

(神楽)「……以上が、当日の流れです。先も言いましたが、ゲストバンドの皆さんは開演の1時間前にはセッティングの最終確認を行いますのでそれに間に合うようにステージ袖に集合して下さい」

(友希那&香澄)「はいッ!!」

「はいッ!!」

予行練習当日……d a bのロビーにて当日のスケジュールの最終確認を神楽が中心となつて、各バンドの責任者……もといポーカーが集まつて行われていた。当日、神楽と海来は会場関係者としてd a bのスタッフの皆さんと一緒に裏方で私達をサポートしてくれるとの事だ。

神楽がスタッフの皆さんと考えたスケジュールは……当日もそうだが、何処もかしくも何時の無駄な時間すら許さない……実に計画性に優れて、かつそれでいて私達主催バンド、戸山さん達ゲストバンドの事を最低限配慮した仕上がりになっていた。

事実……機材調整で半日使えなくなったスタジオ練習を各バンドの練習と、今行われている最終確認にあてたりとだ。午後のステージ練習に關してもそう……今の私じゃ、とても真似出来ない内容ばかりだった。

(神楽)「特に質問等なければこれにて打ち合わせは終了します。この後は予定通り各々午前中一杯練習をし、1時間の昼休みの後本番を想定した練習及び調整を行いますので、各バンドは時間の20分前には舞台袖に集合して下さい。友希那……何か補足とかあるか？」

(友希那)「そうね……Poppin Partyの皆には既に言ったのだけど、私達Roseliaのライブに中途半端な熱は要らない。それを承知の上で、今回の予行練習に挑んでくれると有難いわ」

閑話休題。確かに神楽は凄い……だけどこれは私達Roseliaのライブ。F・W・Fに向けた足掛かりの為のライブだ。それさえ忘れなければ……それで良い。

至極当然の話だが、本番中神楽は居ない。今回の様な裏方の仕事に回らない限り彼女と彼女は観客なのだ。

何時までも……神楽に甘えてなんて居られない。今後の、私達の為にも。

(神楽)「それでは各自練習へ移って下さい」

(友希那)「ねえ神楽？」

(神楽)「……どうした？一応練習内容諸々は打ち合わせ始まる前に伝えただけ  
ど？」

打ち合わせ終了の旨を伝えた神楽。それに従って動く代表者達を見て、私は神楽に話  
しかけた。

(友希那)「今日のステージ練習……あと主催ライブのリハは私達に任せてくれないかし  
ら？」

(神楽)「……急だな。因みに、それはこの間のお前の選択した事から導き出された言動  
と捉えていいか？」

(友希那)「そう捉えて貰って結構よ。貴方は……いえ、貴方と海来は私達から近いうち  
に離れていく。そうなくても良いように今から貴方や海来が居なくても良い万全の  
コンディションにして置きたいの」

(神楽)「なるほど……言いたい事はわかった」

私の要件を聞いた神楽は、そう答えて暫く黙り込んだ。

その姿は、あの日の話し合いがこうしていい方向に実ってくれて良かったと安心して



る様に見えれば、反面……まだ何か拭いきれない、私にどう伝えるべきか迷ってる様にも見えた。

(神楽)「その心意気は素直に嬉しい……だけど、主催ライブが終わって居なくなるわけじゃない。これからお前達のマネージャーとして傍に居るのは変わらない。ただその傍にいる回数が減るっただけだ。だからお前のさっきの主張を、皆にも発信して……それを出来るように心掛けてくれ」

(友希那)「分かったわ。それなら……マネージャーとして、傍に居る時はこれからも手厳しい指導を宜しく頼むわ」

(神楽)「当然……そのつもりだ」

「それじゃあ、行こうか」と言われ……私は頷いて神楽と横に並んで皆が練習してるスタジオへと向かった。

本当は……彼女として、許嫁として手を繋いだり腕に抱き着いて向かいたかったけれど……今は主催ライブに向けた予行練習。昔の私だったらそれすらお構いなくリサとそうしていたかもしれない。

けれど……そんな生ぬるい考えをする自分は練習の時限定ではあるにせよ捨てよう

と決めたのだ。

それが、今後の私達の為にもなれば、神楽自身の為にもなると信じているから——。

---

(神楽)「……以上で、予行練習を終わりにします。各バンド今回の練習が無駄にならないように、吸収したこと得たものを自分達の今後の糧にして本番に挑んで下さい。急遽変更しなければいけないスケジュールがあつた場合は此方から変更した日の内に連絡しますので、臨機応変に対応お願いします。お疲れ様でした!」

(全員)『お疲れ様でした!!!』

(神楽)「……ゲストバンドの皆さんは、スタッフの方々に各自一言御礼を添えて忘れ物の無いように帰宅して下さい。……Roseliaの皆はこの後話があるから、この後控え室へ集合するように」

(Roselia)「「「「ハイッ!!!」」」」

午後のステージ練習も無事に執り行われ、およそ7時間に渡る予行練習が終わりを告げた。それもこれも全て此処d a bのスタッフさん達のおかげだ。これから帰るGes

トバンドの皆に一言御礼を言うように伝えて、俺は R o s e l i a を集めて控え室へと向かった。

(神楽)「一先ず……今回の予行練習お疲れ様。短期間で、彼処まで成長してるとは思わなかつたから、正直嬉しかったよ」

皆を集めて早々……何様だと思ふ様な口振りだが、これは所謂代弁やら建前と言つたもので正直言えば、まだまだこれから……更に言つてしまえば有り余るくらいの伸び代があるという物だ。

それでも、此処まで頑張つてたのは事実なので、俺はほんのばかりの礼を述べた。

(友希那)「ありがとう……でも、私達はまだこれから。まだスタートラインにすら立てないのだから」

(紗夜)「そうですね。言つてしまえば……私達は漸くスタートラインへの道を見つけたに過ぎない。これからも……精進していきます」

(神楽)「そうか……そこまで言われると、話しづらさが勝ると言うものだが……言い出しつぺは俺だから、ちゃんとやらせて貰う」

そこまで変わった姿を見ると（多少大袈裟だが）、少しばかり自分が話したかった本題に入れなくなってしまうような気分だった。

しかし……言い出しつぺは自分。そう言っつて俺は本題へ移つた。

（神楽）「まだ確定はしてない。だけどその時は必ず訪れる……友希那から話は聞いてると思うが、主催ライブが終われば、お前達とRoseliaとして接する回数が減ってくる。ゼロでは無いけど確実に……だ。だから——」

そこまで言っつて、俺は次に発する言葉を嚙んだ。

これを言っつたら……もう後戻りは出来ない。未確定のものが確定する。それはつまりその時が来るまでのカウントダウンが始まるという事。

『何かを変える為には、何かを捨てなければいけない』

いや……迷う必要も無いか。俺は元から……いや、自分の夢を叶えようと決めた時からそうであろうと決めたんだ。

それに……彼女達は、ライブの事限定だが以前の彼女達では無い。それさえ信じていれば、それでいいのだから……。

(神楽)「俺は選ぶぞ……お前達を頂点のその先……その果ての果てまで導きその軌跡へと胸張って歩ける様に……俺が培った音楽の全てを叩き込む。最低限以外の甘えなんてクソ喰らえだ。着いて来れなくなったらその時点で切り捨てる……良いな？」

(Roselia)「[[[[ハイツツツツツツ]]]]」

友希那、リサ、紗夜、燐子、あこ……否。全世界の音楽の道を歩んでる人達。

見せてやるよ……『音楽の革命家』と謳われた俺の生き様を。今の音楽の世界のあり方を……誰にでも音楽ができるというあり方へと俺が変えて見せる。

(神楽)「先ずは……主催ライブに向けた最終調整……仕上げをしていくぞ」

(友希那)「宜しくね……神楽。私達Roseliaのマネージャー」

∫  
E  
N  
D  
∫

(海来) 『本気……なんだね、神楽君?』

(神楽) 「ああ、海来も……本来の自分を近い内に隣子にでも見せてみたらどうだ?」

(海来) 『アハハ、それ……学園の年間行事見てて思ってたんだよね。何時か……近い内に。ね?』

(神楽) 「そうか……楽しみにしてるよ」

## 17話

(神楽)「リズム隊！各自テンポキープが厳かになってる！1曲1曲のテンポキープがメロディーパートの支えになる事を忘れるな!!」

(リサ、あこ、燐子)「ハイッ!!」

(神楽)「メロディーパートも、リズム隊が支えてくれるのを良い事に自分を主張し過ぎるな！主張が過ぎると折角のメロディラインが台無しになるばかりか曲自体が死んでしまう!!もつと周りを見てアンサンブルする形で演奏するんだ!!」

(友希那、紗夜)「ハイッ!!」

主催ライブの予行練習が終わってから……神楽と海来の指導は、今まで以上に苛烈を極めた。

具体的に言うといや、具体的になんて言い表せ無いくらいの物だ。

あの日……神楽と海来、そしてアタシ達 Roselia の皆と話し合ってから、神楽と海来の指導に火が付いたのだが……予行練習が終わってからは更にそれに激しさが増した。



今やつてる事が、神楽達が今までやってきた事なんだと思うと……ゾツとする位。時にはまりなさんに無理言つて早朝に短時間。夕方からCIRCLEが閉まるまで……時には神楽の家の地下室にて時間の許す限り練習漬けだったりと……兎に角1秒1分1時間1日が無駄無く、そして一切の加減無しの練習・特訓が続いた。

今もそうだが……正直言つて、今すぐにでもその場で倒れ込んで寝てしまいたい。それくらい今のアタシ達からしたらとてつもなく過酷だった。

練習前のトレーニングを着々とこなして来たアタシやあこ、紗夜なんかでも余りの苛烈さ故に気絶する事がちよくちよくあった。友希那と燐子に限つては……あまり口に出して言いたくない位グロッキーな状態だった。

(リサ)(アタシの場合……日々の睡眠と学校の昼休みの仮眠で、何とか疲労誤魔化そうとしたけど、正直言つて焼け石に水だ。手足なんて先の先まで痙攣してた時もあったし、仮にもダンス部の身なのに全身筋肉痛になったりって感じで、可能なら神楽と海来に抗議したいくらい疲労が尋常じゃ無かった)

事実……今もこうして何食わぬ顔で合わせをしているけれど、とつくに身体が悲鳴を上げてる。

それでも唯一、救いなのは休憩の時はたとえ短時間だろうが長時間だろうが2人が水と差し入れを用意してくれる事だ。言つてしまえば……それがアタシ達の至福の一時

だ。

(神楽)「リサツ！テンポキープがさつきより厳かになり過ぎだ！練習中雑念等は一切捨てると言ったはずだ!!」

(リサ)「ご、ごめん!!」

因みに、今は本番前日の夜の6時過ぎ。神楽の家の地下室で練習中だ。本番に備えてゆっくり休めと神楽は言ってくれた……のだが、友希那の強い要望で本番前日の最終調整をする事になった。

まあ最も、アタシも含め神楽除いて全員満場一致だったんだけどね……って、いけない。そろそろと言うよりいい加減今の状況を説明してる暇があったら練習に取り組まないと。

神楽の思いやりを踏み倒してまで今晚練習すると言い出したのはアタシ達なんだから。

(神楽)「……よし、時間的にこれが最後だ。1回通そう5分後には通せる準備をして」

(Roselia)「ハイッ!!!」

暫く合わせて、神楽は時計を確認しながらアタシ達にそう言った。

本気の指導が始まってから、アタシ達は5分じや正直足りない……そう思っていたが、何故だろう。今になって5分でどうこう出来るようになっていた。5分の中で再度チューニングしたり、水分補給したりと言った具合に（他にも出来ることは増やせたが、今は大まかに）。

（友希那）「神楽、準備出来たわ」

（神楽）「そうか……なら、始めてくれ」

神楽はそう言って……近くにあったパイプ椅子を扉の隣に置いて深く座った。

それを見た友希那は、アタシ達を一人一人見て「……行くわよ」。そう言ってアタシ達 Roselia は本番前日最後の通しを始めた。

（神楽）「………及第点想像以上だな。それでもよく頑張ったよ皆。今日は俺の家でゆっくり休んで、本番に備える様に。お疲れ様でした」

俺が想像以上と書いて及第点と言ったは……そのままでの意味だ。俺と海来が本気で指導し始めた時は、まあ……酷いものだったが、ある意味で予想通りだった。気絶するは貧血で座り込むは……酷い時は目眩で……いや、コレばかりは彼女達の尊厳の為言わないでおく。

しかしそれを差し置いたとしても……彼女達の演奏技術や精神面メンタルは今までよりもかつてない成長ぶりを見せた。

(神楽)「明日……楽しみにしてるからな、Roselia皆」

そう言って、俺は和室にてぐっすりと眠っている5人を見て自室に戻ったのだった……。

---

く本番当日。とあるホテルにて……

(???)「……はい。たった今エックアウトを済ませました。……16時にCIRCLE  
と言うライブハウスに集合ですね？分かりました。それではまた……」

「で、先生からなんて？」

「16時までにはCIRCLEに集合して欲しいって」

「それまでどうするの？折角だから2人の顔見に行く？」

「何処にいるか目処すら経ってないのに……それは無謀という物よ？だから集合までに色んな所を巡りましょ」

「了解」

↳所戻って、dabのRoselia控え室にて……

（神楽）「まさか……そこまでするとはな」

（海来）「差し入れ、持ってきて正解だったね」

（Roselia）「「「「……………」」」」

一応……目の前で起きてる事態にいたるまでの話をしよう。

朝起きたらまずRoseliaの皆が居なかった。海来に聞くと「本番直前のリハ―サルを神楽達が来る前に行って仕上げたい」と5人揃って言いに来たらしく、dabの

スタッフさんとまりなさんに断りを入れて朝9時から今現在……もうすぐ16時……あと30分もすればゲストバンドが集まる時間になるまで練習をしていたらしく、Poppin Partyの皆が力尽きて気絶してる5人を見つけて俺と海来の元へ駆け付けてきたと言う始末。

そして、各バンドの最終セッティングの打ち合わせをdabのスタッフさんに任せ、俺と海来はRoseliaの気付け薬として持ってしてきた差し入れ(塩おにぎりと水)を渡して経過を待っていた。

(友希那)「ありがとう神楽……。あとごめんなさい、最後の最後にこん詰めてしまつて……見苦しい姿を見せてしまつたわ」

(神楽)「全く……開演まで時間が無いと言うのに……だからゆつくり休めと言つたんだ」

(Roselia)「「「「ごめんなさい……」」」」

(海来)「ま、まあまあ！兎にも角にも皆無事だったんだから……ね？これ以上は言わないでおっ？」

確かに……これ以上言ってしまうと彼女達の本番に障つてしまうか。

そう思った俺は、「やれやれ」とため息混じりでそう言いながら会話を続けた。

(神楽)「まあでも……それに見合った練習が出来た。そうだろ? 顔に……『昨日までの自分達と違う』って書いてあるからな」

俺はそう言って、部屋を出て行こうとした……その直前、「神楽」と友希那に呼び止められて俺はドアノブを握っていた右手はそのまま、友希那の方を向いた。

(友希那)「予行練習の時……ああは言ったけれど、改めてありがとう。そして……見ていて頂戴、Roselia私達のステージを」

(神楽)「……間もなく最終セッティングの打ち合わせが始まる。行くぞ」

(Roselia)「ハイッ!!!」

期待の言葉、応援の言葉等は掛けなかった敢えて。

——今の彼女達は、それらの声を掛けなくても良いくらい……恰も宝石の如く輝いていたから。

最終セッティング、リハーサルも滞りなく順調に進み……主催ライブ開演時間。チケットは紗夜と燐子の報告通りもの数十分で一般は完売となり、残りは取り置き分。今し方羽丘の1年生2人分の取り置きチケットが売れ、残り5枚……ドタキャンとかしない限りは事実上全てのチケットが完売となる。

その時を今か今かと、海来と共に待っていると——

「取り置きしていたものだ。確認出来るかい？」

「神楽」 「ありがとうございます……って、先生でしたか。来て下さりありがとうございます。来て下さりありがとうございます……ってお前ら」

「エキ」 「神楽様！ 見に来ましたよ！」

「先生に誘われて見に来たわよ。元氣そうね？」

「久しぶりだね♪」

「相変わらず、二人はいつもお揃いなだね」

最後の取り置き分は先生だった。しかし……PCを見て、取り置き枚数丁度5枚と表示され「おや？」と思ってもう一度先生の方を見た。そこにはエキともう三人——



(神楽)「エキは Roselia——元い友希那の弟子みたいな物だからまだしも……お前ら揃いも揃ってどうした？」

(オーナー)「そう言つてやるもんじやないよ、あの4人は教え子として私が招待したんだ。それに久しぶりに逢えて嬉しいんじゃないのか？」

(神楽)「まあ……多少は。けど今日は Roselia<sup>彼女達</sup>の勇姿を確り自分の目で見届けたいと決めたので」

本心は今日の所は聞かないでおこう。

今此処で聞き出してしまったら……面白味————と言うより自分自身の気が緩みそうだから。

例えるなら……始めから勝利が約束された戦い程、つまらないこの上ないというものだ。

(オーナー)「そうかい。なら楽しみにしてるよ……お前達二人が指導した Roselia のライブを」

そうやって先生は4人を引き連れて、ステージへと歩いていったのだった。

（海来）「あの3人……相変わらずだったね」

（神楽）「全くだよ……先生も先生で人が悪いというか……」

先も言ったがこの際エキはともかくあの3人がなぜ来たのかはどうでも良い。どんな不祥事でさえも見逃さず、この主催ライブを成功させる。裏方として、マネージャーとして。

再度そう心に強く決めた俺は、海来に後を任せて友希那たちRoseliaがいる控室へと向かったのだった……。

時間が過ぎるのはあつという間だ。主催ライブが始まり、ゲストバンド達のライブブリーフ所謂前座が着々と終わり、今はPoppin'Partyがステージに立つて演奏している。

次はいよいよ……Roseliaの出番だ。

（神楽）（やれるだけの事はやった。半月彼女達の基礎体力、メンタルを可能な限り現段

階で高めれるだけ高め、残り約半月ばかりを彼女達の要望に応えるべく、俺と海来が経験した事をこれも同じく可能な限り叩き込んだ)

それでも、多少のローローコンマレベルの荒さは解消出来なかつた。それだけがただ一つ、唯一の不安要素だが……

(神楽)「自分達を信じろ。どんな如何なる状況でも、最終的に信じられるのは各々の実力、そして……仲間達との絆だ。だからローロー」

(Poppin Party)「「「「「ありがとうございます……」」」」」

言葉が途切れると同時に、Poppin Partyのライブが終わり、拍手喝采が響き渡った。観客の拍手の音、歓声で分かる。オーディエンスの熱は最高潮寸前。<sup>Roselia</sup>彼女達が何時来るのか、何時ライブするのか今か今かと待ちわびてる証拠……。

(神楽)「迷うな。自分達の実力を、仲間を信じろ。自分達が獲てきたものを胸に、思いっきりローロー行つてこい」  
狂い咲いてこい

(Roselia)「「「「「ハイッ!!!!」」」」」

(友希那)「行きましょう、Roselia。頂点へと続く道を探しにそして——狂い咲く為に。神楽……見ていて頂戴。私達のライブを」

友希那の声に、俺と4人は静かに頷き……友希那が先陣を切り紗夜、リサ、あこ、隣子と……蒼く音幼き音不死鳥音の雛達音は未来音の道音を探す為に演奏音しにステージへと歩みを進めた。

(友希那)「Roseliaです。……早速いくわよ、『BLACK SHOUT』」

——演奏をしている彼女達は、本当に輝いていた。

紫、青、緋、紅、白と……それぞれが違う輝きを放つ宝石見たく。

一人一人が互いを信じ……軌跡道を照らし歩んでいる様に見えて……その姿に、俺は思わず瞳からツツ、と涙をこぼしていた。

〈END〉

(エ中)「友希那樣、とても素敵でした！」

(???)(???)「これ程とは……流石『音楽の革命家』を謳うくらいはあるわね」  
(???)「でも……それでも彼処まで出来なきや所詮この程度。やつぱり、流石と言うべき  
ね」

(オーナー)「4人とも、今夜はとても良い演奏をみれた。そう言う顔してるね……私はあの2人に用があるから。気をつけてかえるんだよ」

(???)「了解です♪」

## 18話

(オーナー)「着いたよ。降りな」

(神楽)「此処が……」

(海来)「音楽事務所『Marie』……」

主催ライブが無事に終わって次の日……俺と海来は先生に連れられて、駅からタクシーに乗って30〜40分位かけて目的地の場所に着いてタクシーから降りた。恰もリゾートホテル並の敷地である音楽事務所『Marie』……此処が俺達が入社する予定の音楽事務所の名前だ。

下手したら何処ぞの大学かと勘違いする様な外観。内装、組織図、勤務環境諸々想像しなくても本格的さがひしひしと伝わってきた。

察しの良い人達なら何故俺と海来が此処に連れて来られたのか想像が着くだろうが……一応、話しておこう。

……昨晚、dabのRoselia控え室にて……。

(オーナー)「主催ライブお疲れ様Roselia。そして大江、蒼導。いい演奏を見させて貰った。本題に入る前に……お前達、やりきったかい？」

(神楽)「……彼女達の現段階での技術面、精神面諸々を自分達なりに最大限に引き出せたと思ってます。ですが俺自身の理想の域……言うならば彼女達を全身全霊、限界のその果てへとこの1ヶ月で導いてやれなかったことがマネージャーとしてのどの反省点よりも大きな反省すべき所だと、確信を持って言えます」

(オーナー)「そうか……湊、お前はどうか？」

(友希那)「この1ヶ月……私達は神楽と海来から多くの事を学びました。自分達にとつて足りないもの、Roseliaと言うバンドとして在るべき姿は何か……そしてそれを満たす為は何を捨てればこの先の自分達を変える事が出来るのか……。それを深く考えさせられた1ヶ月でした。結論から言えば……まだ、自分達の口から満足したと言えるライブが出来たとは到底思ってます。なので……これを糧に神楽や海来……フアンのが求める以上のRoseliaを目指したいと思います」

(オーナー)「なるほどね。……ならば大江？最後にお前に聞くよ、お前は今後……どうしたい？」



(神楽)「……最終的には彼女達 Roselia が決める事です。……俺は彼女達から感じた可能性を、限界を……どんな現実を突きつけられてもそれらを全て引き出し、頂点のその先の果てまで導いてみせる。これが……彼女達のマネージャーとして自分に課した最終課題です」

(オーナー)「そうか……蒼導も、今井も。氷川も宇田川も、そして白金も……2人と同じ目をしてる。本当に、お前達はこの1ヶ月今日に至るまで変わったよ。……それら全て聞いて、満足した。これからも頑張んな」

(Roselia 一同)『ハイッ!!!』

(オーナー)「大江、蒼導。お前達2人は明日朝9時に羽丘駅の入口前に集合だ。遅れんじやないよ?」

(神楽&海来)「ハイッ!!」

(オーナー)「それじゃあね、明日はしっかり休むんだよ」

(Roselia 一同)『ありがとうございましたッ!!!』

—————回想終了……。

とまあ……会話だけだけど、昨日行われた主催ライブに先生は満足したそう

だ。

先生の事だから、事務所の入社の件は白紙に成る事は覚悟でいた。それだけ、まだ今の自分のマネージャーとしての力量を分かっていたからだ。

(オーナー)「全く……お前のそういう謙遜な所はいい加減直すべきだ。自分のしてきた事に自信持ちな。お前がどう思おうが、しっかりあの子達はお前と蒼導の気持ちに応えてくれたんだ」

(神楽)「は、はあ……」

本当に、何故ゆえ俺の周りの人達はこう……読心術や洞察力に優れた人ばかりなのだろう。何だか歯痒凄くて逆に辛い……

(海来)「私は……神楽君と一緒にあの子達のマネージャーで居ようと決めた時から……もつと言うなら先生からあの話を持ち掛けられた時から、どんな結果でも受け入れようって覚悟でいたからさ……神楽君も、そろそろ自分に自信もつてこれからの未来に向けて一歩前に進もうよ？ね？良く言うじゃん、『赤信号、皆で渡れば怖くない！』てね♪」

(神楽) 「いや最後のそれ……語弊招くでしょうに……」

「何処ぞのガキだよ」と突っ込まなかったのは、せめてもの抵抗である。そんな他愛も無い会話をしながら、俺と海来は事務所の受け付け員の人に、目的の場所……『音楽課会議室』へと案内された。

因みに、先生は「用があるからこれでお暇するよ」と言つて、事務所を後にした。

「それでは、私は社長を連れってきます。中でお待ちください」

(神楽&海来) 「分かりました」

受け付け員の人にそう答えて、俺と海来は『音楽課会議室』と看板書かれた扉を開けようとした。

(海来) (ねえ神楽君……私、昨日先生が連れてきたメンツ見て、この中にいる人達の顔ぶれ……何となく分かるんだけど)

(神楽) (奇遇だな……多分海来の想像してるメンツで、間違いないと思う)

実を言うと、何となく……というより、ほぼ間違いなく俺と海来には中に

いるメンバーが誰なのか分かっていった。受け付け員の人や先生はそのメンバーが既に待ってるなんて一言も言っただけでなかったが……昨日のあのタイミングであの4人が居た。その事実だけで予想はこちらの方で大方着いていた。

兎にも角にも、此処でじっとしているのも尺と言うもので、俺と海来は覚悟を決め、扉を開けて中へ入った。

「久しぶりーと言っても、昨日ぶりね」

「2人とも元気そうで、何よりだよ」

「ホント、2人っていつも一緒よね？バカカップルは健在ってどこかしら？」

会議室の中には、予想通りのメンツ……1人まだ来てないのだろうか？しかし、3人とも編入前の高校『小茂呂高校音楽科』のクラスメイトだ。

最初に口を開いた赤茶色のポニーテールに、青い瞳。高身長でクールな見た目の女の子は赤場紅愛。その隣に居る小柄で黒のおカツパで蒼眼のお淑やかな見た目の女の子は日向結虹。最後に嫌味ったらしく俺達に吐き捨てた高身長で金髪ツインテールで蒼眼の女の子は九導里那だ。

この3人こそ、何を隠そう昨日の主催ライブにてあと1人の子と先生と一緒に

d a bに来ていた子達。そして、高2の頃までの約2年間『Quintet Hear t』のメンバーとして一緒にバンド活動した3人である。

(神楽)「3人とも……元気そうで何より、昨日除けば3月の卒業式以来だな」

(海来)「というか里那？私と神楽君はもう付き合っていないの。その事に関しては3人も知ってたと思っていたのだけれど……やっぱり、貴女だけは頭のおネジが抜けすぎてド忘れしてしまったのよね？」

(里那)「はあ、全く……冗談よ。それすら分からないなんて、ミライ？貴女との対決もそろそろ終幕が見えてきそうね？」

(海来)「寝言は寝てから言いなよ♪未だに私に勝ったことないくせして……ね？里那残念系金髪ツインテ淫乱女」

(里那)「少し黙りなよ、ミライカグラ盲目クソビッチ」

あゝあ……久しぶりに始まったよ、海来と里那の下らん言い争い。俺と海来が高2の頃付き合ってたにも関わらず俺に猛烈アピールして俺を何度か口説こうとするも海来に呆気なくあしなわれるの繰り返し。まあ最も、この醜い争いは紅愛と結虹曰く「互いに良き『ライバル』と認めてるから起きてる」だそう。ん……分らん。

(紅愛) 「全く……2人ともいい加減素直になればいいのに」

(結虹) 「そくだよね、だからこうして漁夫られちゃうんだから」

(神楽) 「え、ちよ……」

(紅愛) 「ちよつと結虹、神楽の左腕私のポジションを抜け駆けで取らないでよ」

(結虹) 「そんな事いつたつて、遅い紅愛が悪いんじゃない。右腕空いてるんだかそつちにしなよ」

(紅愛) 「うう……今日だけよ」

(神楽) (なあにこれえ……)

いつの間にか、俺の両腕に結虹と紅愛が抱きついていた。ホントマジ……3人とも俺と海来居なくなつて変わり過ぎじゃない? もう少し……紅愛と結虹に至つては大人っぽい対応してたじゃんか。

(???) 「すみません! 遅くなりました!!」

(紅愛) 「あら? エ中じゃない」

(結虹) 「エ中ちゃんも呼ばれたの?」

会議室の中にて色々とわちやわちややってる最中、扉が開き聞き覚えのある声があったかと思うと、その声の主であるエ申が会議室へと入ってきた。というか……何故だろう？ エ申から発せられた言葉にはなんも違和感は無いはずなのに、拭いされない何かが俺の脳内にまとわりついた。

しかし、その何かの正体はエ申本人が発した言葉により直ぐに分かった。

(エ申)「ハイ、思いの外朝の収録に時間が掛かってしまい……集合ギリギリになってしまいました！ごめんなさい!!」

(神楽)「いや、気にするな。俺と海来も今し方此処へ来たばかりだか。それよりも……収録って?」

(結虹)「もしかしてエ申ちゃん、此処で歌手として活躍してるって事?」

そう、俺の脳内にまとわりついてた正体はこれだ。何の変哲もない、謝罪の言葉なのだが……俺からしたらその言葉は、事務員か何かに所属してる者がよく言う言葉だと思っていた。

しかも、先の結虹の問い掛けが本当なら誠におめでたい事だ。なんせそれはエ

中が長年夢見てた事だからだ。

(エ中)「はい、実は……ざっと半年前に先生からのお誘いで、此処の事務所で社長と人事部の人の前で面接を行って、自分の歌声を聞いて貰ったら……『声優タレント』としてこの事務所に所属させて頂けたんです！」

(5人)「……おおお……」

歌手では無いにせよ、ホントに素晴らしい事だ。一応声優さんでも、アニメ等の主題歌や挿入歌の収録等に携わる事もある。だから事実上形は違えど歌手としての夢が叶ったと言っても過言じゃない。

各々エ中に祝いの言葉を投げかけていると、「失礼するよ」という扉越しにでもわかる……威厳がありそれでいて落ち着いた声が聞こえてきた。

「どうぞ」と代表して俺がそう言うと、扉が開かれ……大人びた感じの女性が黒のレディーススーツ一色を身にまとい会議室へ入ってきた。

高身長で、背丈は俺とほぼ大差ない。腰まで伸びた紫色の髪をポニーテールにした紅眼が特徴の人だ。



「??」うむ、全員揃っているな。初めまして、私の名前は煌黒真緒妃こうこくまおき。音楽事務所Mareの現社長だ。君達5人の事は先生からかねがね聞いている」

（神楽）「煌黒真緒妃……この人が」お初にお目にかかります。大江神楽です。煌黒社長の事はネットや雑誌で認知しておりました」

煌黒真緒妃……この事務所を立ち上げた初代Mareの社長煌黒千石の2人娘の長女。若くして17歳で2代目社長となり、確か……妹である煌黒翼妃つばきは副社長兼アイドル課取締役課長でありMare所属のアイドルグループ『大海楽団』のリーダーを務めているとか。

（海来）「先生の事をご存知……という事は、煌黒社長も昔は先生の教え子……だったんですか？」

（真緒妃）「ああ、今は君達と変わらない18歳。ゼロシアンターナショナルスクールにて高校卒業までの単位を17歳の時に全てとり、2代目社長としてこの事務所を纏めている。先生とは以前そこに居る八月一日エキを紹介された時に出会ってね……それよりも前に先生は先代とも深く関わっていて、我が事務所主催のイベントのスポンサーもして貰ってる」

つくづく思うのだが……やっぱり先生は凄い。まさかここまでとなると尊敬の一言だけじゃ足りない位だ。

(真緒妃)「まあ余談はさて置き、早速本題に入らせて貰う。……蒼導海来、赤場紅愛、日向結虹、九導里那、八月一日エキ。君達5人は大江神楽プロデュースの元、此処Mareを活動拠点としてガールズバンドのメンバーとして活動して貰う。よって大江神楽、急で悪いが君には彼女達5人のプロデューサーとし今日より此処で活動して貰う」

(神楽)「……………1つ、宜しいでしょうか？」

(真緒妃)「何かな？」

その言葉を聞いて、俺は漸く……自分の夢へと続く道のスタートラインに立てたのだと思った。今まで手探りも手探り、石橋は叩いて渡る状態の自分だった。そのスタイルを今後変える予定はないが、夢実現に向けて、これで大きく前進できると感じた。

しかし……それと同時に、社長が今し方発した言葉に、俺は1つ確認しておきたい事があつた。

(神楽)「……彼女達5人の活動体勢、もつと言うなら彼女達をサポートする組織体勢は具体的に決まっていますか?」

(真緒妃)「なるほど……確定事項としてはエキには今後とも声優の仕事は続けて貰うが、君達が所属する『バンド課』を優先して貰うつもりだ。そして君にはプロデューサー以外にも彼女達5人のマネージャー取締役を務めて貰う」

(神楽)「……続けて貰って」

(真緒妃)「次に組織体勢の事だが……君も含めたマネージャー班を3人、機材班を3人、衣装製作班を3人、収録班を3人の計12人体勢で運用する。これはあくまで予定だから、君の要望で人員を増減して貰っても構わない」

成程、そう言う事か。社長の言いたい事が……社長の意図が良くわかった。どの事務所も全てそう……では無いとは思いますが、この事務所は典型的な実力主義派。社長から出された要件に、どれだけ社員が応え結果を出すか否かのそれだ。

もしそれが本当であれば……社長はとても人を見る目がある。いや、これだと語弊を招く……うん。絶対的で完全無欠な信頼性とカリスマをもってるお方だ。

そして……彼女と俺の思念は、良く似ている。

(真緒妃) 「ほお……君も、私と同じ顔が出来るんだな」

(神楽) 「有難きお言葉、光栄です。では……本題に移りますね？——」

俺が持ち込んだ話の内容に、この場に居る全員——俺と社長以外の5人は、目を大きく見開き……直ぐさま覚悟を持った顔つきに変わった。彼女達の変わり用は俺だけでなく、社長も確りと見ていた。そして社長はその光景を見て、改めて俺に向かつて、先の俺の会話の内容の答えを出してくれた。

(真緒妃) 「良いだろう。君の新米プロデューサーとしての腕前、しかとこの目で確かめさせて貰う。しかし、忘れるな？君は私と良く似てる……それはつまり、その時が無事に終わる迄に何らかの粗相がありそれが私の耳に届いた時には——」

(神楽) 「ええ、社長が俺にしたい様にして頂いても構いません。それだけの話を貴女に持ち込んだ訳なので。俺と、彼女達5人の覚悟をしかとこの目で焼き付けて下さい」

(真緒妃) 「フツ、……気に入った。改めて大江神楽、並びに『*Quintet Heart Orchestra*』のメンバー諸君、歓迎するよ。ようこそ、我らが誇る音楽事務所 *Maré* へ。早速だが……マスコミ、ジャーナリストが

応接室にて控えてる。今から忙しくなるが……君達の今後の活躍、健闘を祈らせて貰う」

(神楽&Q. H. O) 『宜しくお願い致しますッ!!!!!!』

まだ……スタートラインに立っただけ!!しかし、その一步を踏み出す……夢実現へのカウントダウンが始まるのは、そう遠くは無い。

もしかしたら……もう既に踏み出し始まつてるのかも知れない。

……翌週、音楽雑誌の扉絵及び最初の1ページ目に、こんな見出しの記事が掲載された。

『音楽事務所Marieに若手新米プロデューサー大江神楽就任。Quintet Heart Orchestra結成。5月28日東京ドームにてデビュー主催ライブ開催。情報を待たれよ』

〈END〉

(友希那)「改めて、皆？昨日はお疲れ様。今日の反省会で出た意見とかは、今後の練習で各自活かす様に」

(4人)「」「ハイッ」「」

(紗夜)「そう言えば……そろそろ中間テストのテスト期間に入りますね？皆さん？練習も良いですが勉強の方は如何ですか？」

(リサ)「私は全然平気だよ♪」

(燐子)「わ、私も……大丈夫……です」

(友希那&あこ)「「……………」」

(紗夜)「はぁ……いつも通り、ですね」

## 19話

(結虹)「初めまして。小茂呂高校から編入してきました。日向結虹と言います。皆さん、宜しくお願いいたします」

GW明けた日の学校の朝SHR。私のクラスに海来ちゃんに続いてもう1人編入生が来た。神楽君含めれば3人目の編入生だけど、どうやら偶然にも、彼女日向結虹さんも2人と同じ小茂呂高校から来たそうだ。

「か、可愛い……!」

「あの子、確か今週の音楽雑誌に載ってた子だよね?」

「そ〜そ〜! 確かQ. H. Oのギターの子だよね? 蒼導さんも確かそのバンドに所属してたよね?」

「ウンウン! 何でも、1番私が驚いたのA組に居る神楽君が業界最年少のプロデューサー就任で、Q. H. Oのメンバー専属のマネージャーって事だよね〜」

「そう言う所、カッコイイよね〜!」

等と、彼女が自己紹介し終えた直後クラス中に飛び交うざわめきの嵐。

私は余り音楽雑誌は読まない方だけど、自分のエゴサしてる際に神楽の事は耳にした。

神楽君は、此処に来て物凄い勢いで目立っていった。良い意味か悪い意味かと聞かれたら、勿論良い意味でだ。

この間行われたと言う Rose lia の主催ライブ……コレもエゴサしてる時に知ったのだが、かなりの反響……評判だった。燐子ちゃん達の話の偶然聞いたのだが、神楽君と海来ちゃんがマネージャーとなつて今の Rose lia を支えてるらしい。

(彩) (そう思うと、神楽君と颯樹君は似て非になる存在だと思う。裏方メインで動いて、余り表立った事をしたがらない颯樹君に対して、神楽君は多分……自分の夢の為に自分の持てる全てを捧げてる。それが神楽君を大胆に動かしてる原動力じゃないかって……私  
は思う)

でなければ若手最年少でプロデューサー就任——それも、5人のミュージシャンから結成されたバンドの専属マネージャーになつてなれない。

颯樹君でさえも私と千聖ちゃん初めとしたパスパレの皆のマネージャーではあるけど、自分から上の立場になる様な事はしない筈だ。



本来ならその大胆さやカリスマ性に惹かれても良いのだろうけど……私には何が何でも颯樹君じゃなきゃ譲れないものがある。

(奏多)「彩さん？」

(彩)「あの出会いがあつたからこそ、私は今も彼の事を好きでいられるどんな事をしてでも自分のものになりたいと思える」

(奏多)「彩さ〜ん!!」

(彩)「んふええッ!?は、はひっ……何ですか!?!」

先生に呼ばれて気が付いたら、周りの皆が私の事を見ていた。どうやら少し考えごとをし過ぎて周りが見えなくなっていたらしい。

海来ちゃんに至っては、「やれやれ」って顔で私の方を見ていた。は、恥ずかしいよお……//

(奏多)「彩さん、結虹さんと席が同じなので……以前の海来さんと同じ様に、学園を案内してもらつても良いかな？」

(彩)「は、はひっ分かりまひた……?!?あうう//」

『アハハハハ……ッ!!』

うう……どうしてこう何時も肝心な時に嘔んじやうんだろ……。

(結虹)「宜しくお願いします、彩さん」

(彩)「う、うん。宜しくね！えっと……結虹ちゃん♪」

何やかんやで、SHRが終わって私は1時限目の授業の準備に取り掛かった。

5分休憩や20分休み等を使って、結虹ちゃんと一緒に校内巡りをしようと思っていたのだが……案の定、と言うべきなのか結虹ちゃんの周りにクラスの子達が群がって質問三昧に見舞われた為、それ所では無くなり、結局放課後に決行したと言うのは……また別の話だ。

\*\*\*

(神楽)「文化祭?？」

(颯樹)「そ、内の学校は毎年6月上旬辺りに2日間のサイクルで行われるんだ」

S H R が終わった後、A組にて颯樹からそんな話が舞い込んできた。因みに前いた学校では秋頃文化祭を行っていたため早く行く所もあるんだなと思つて俺は颯樹に続きを促した。

(神楽)「参考迄に聞くけど、2年の頃は何をやったんだ？」

(颯樹)「2年の頃……僕のクラスはお化け屋敷だったかな？結構リアリティあつて人気だったよ？後は……んまあ、体育館で出し物……企画をやったりしたかな？」

(神楽)「なるほどね？因みに、ウチらは音科だったからクラスでミュージアムをやったかな？後は体育館でライブとかもやったね」

後半、何故か颯樹は言葉を濁らせていたが……何か苦い思い出でもあつたのだろうか？もしそうであれば、余りこれ以上言及しないで置くが吉だと思つた。

そんな矢先——

(千歌)「確か……神楽さんは去年ミュージアムで『アラジンと魔法のランプ』の魔人役をやっていましたよね？中々の演技力でしたよ？」

（神楽）「え、ちょっと待って千歌は去年の俺達のクラスがやったミュージアムを見に来てたの!？」

（千歌）「ええ、残念ながら時間の都合上ライブステージの方は見れなかったのですが：本当に役になりきってましたよ？」

あの演技……見られてたのか……！2年間やって来た中であのミュージアムだけは黒歴史と言って良いくらいの役を任されたと思っていた。なんせあのアラジンと魔法のランプ、童話をモチーフにはしておらず……あれだ。某D結社様のアラジンと魔法のランプをモチーフにしていた為その魔人の演技をしてる最中は……本当の意味で自分を捨てていた。

（颯樹）「へえ……千歌？差し支え無ければその話、詳しく」

（神楽）「いや知ろうとしないで？アレ本当に黒歴史もいい所の演技だったんだからね!？」

／＼キーンコーンカーンコーン……♪／／

ナイスタイミングと言うべきか……1時限目の予鈴が鳴った。

それを聞いた千歌は「それでは後ほど」と言つて自分の席へ戻つていった。颯樹も、千歌に習つて席へ戻ろうとした……その刹那、「そう言えば」と言つて俺の方へ戻つてきた。

視界の外……と言うより千歌の席にて燐子と紗夜が、何やら千歌と話していたのが見えただけ……大丈夫だよな？

(神楽) 「ん、どうした？もう少して授業始まるけど……」

(颯樹) 「ああ……だから手短に。少し耳を貸して」

颯樹に言われるがままに、俺は颯樹の方に耳を貸した。

(颯樹) 「余計なお世話かもしれないけど、無理はするな。大切な時期で、先導する者になつたんなら、確りと何処かで休め。今は誤魔化せてもボロが出たらことだぞ」

(神楽) 「……ありがと」

俺は席に戻る颯樹に礼を述べて、自分も授業の準備に取り掛かった。

今の今まで、余り無茶をしてそれが誰かにバレた事なんて1度も無かったんだけどな……。流石パスパレの敏腕マネージャーと言った所か。マネージャーとしての歴が長い彼の言葉なら納得だ。

(神楽) (……今日の昼休み、何処かで休むか)

教科担任が入ってきて、1時限目の授業が始まった中……俺は心の中でそう決めたのだった。

---

(神楽) 『悪い、先生に用があつて一緒にお昼休み行かれない。紗夜達と一緒に何処かで食べててくれ。紗夜と憐子には既に伝えてある』

(海来) 『了解。結虹にもそう伝えておくね?』

(神楽) 『ありがとう』

海来にそうLINEでそう伝えて、俺は1人屋上でお昼を即座に済ませて仮眠をとった。此処、屋上は中庭や空き教室何かよりは利用する生徒は少ないものの、決してゼロでは無い。

唯、今日見たく風が強かったりすると利用する生徒は居ない。それを狙って、何とか隣子達の包囲網を躲し今に至る。

(神楽) (無茶は良くないと言うのは分かってる。だけど……今日に限っては、颯樹の助言に甘んじるとしよう)

今思えば、Roseliaのマネージャーになってから今日こんにちに至るまでずっと動きっぱなしだったなと改めて思った。

ここから先、例えるなら24時間営業の店見たく、フル稼働で脳内や身体を動かさないといけなくなるかもしれない。

自分で選んだ道だから覚悟はしていたが……何処か区切り良い所で充電しなければいけない。そうしなければ颯樹の助言どおりの結果になってしまう。

(神楽) (今は唯……誰の邪魔なく確り休もう)

そう思いながら、心地よい風に身を任せて、少し限りの仮眠に身を委ねよう——  
—そう思った刹那……

(彩) 「はあ……、はあ……つ、うう……ッ！」

(神楽) 「彩……」

(彩) 「……!?か、神楽君……!？」

予想だにしない来客（彩）の登場で、俺の仮眠と言うなの休息は1秒程度で終わりを告げたのだった……。

\*\*\*

（彩）「んゝツ、4時限目終わったゝ♪」

4時限目終わりのチャイムが鳴り終えて、私は背伸びをしながら鞆からお弁当を取り出した。

例え立て続けにしんどい授業がつづいたとしても……この時間が訪れるから私は頑張つて授業を受けれる。

颯樹君と2人きりでお弁当を食べれるのなら尚の事だ。

（彩）「ねえ海来ちゃん、結虹ちゃん！もし良ければ一緒に——」

（海来）「……！——あゝ、ごめんね彩ちゃん。今し方紗夜ちゃん達からお昼LINEで誘われたんだ」



(結虹) 「ごめんさい、彩さん……」

(彩) 「だ、大丈夫だよ!?! そ、それじゃあまた後でね♪」

そう言つて、私は2人に軽く手を振つて教室を出た。

目指すは、中庭。彼処でよく颯樹君達がお昼にしている。今日こそはと淡い期待を抱きながら、なるべく早く……1分1秒コンマ1秒でも早く。

なんとつて、今日のお弁当は私が颯樹君の為に腕に寄りを余すことなくかけた、私の愛情たっぷり込めたお弁当何だから。

(彩) (全部食べて貰えなくても良い。せめて1口だけでも、颯樹君の胃袋に、私が作った料理が届いて欲しい。あの2人に……邪魔されようとも)

この角を曲がれば中庭。

待つてて颯樹君。今日こそは皆でお弁当を——

(彩) 「つ……：——え? 何、あ……れ……」

やつぱり、世の中は都合良く動いて居ない。結果的に見れば既に颯樹君はお弁当を食べていた。

——千聖<sup>あ</sup>ちゃん<sup>の</sup>と花音<sup>2</sup>ちゃん<sup>人</sup>に両サイド挟まれながら。

そんな事…今始まったことじゃないから別にそれに関しては何も気にしてない。だけど…それだけじゃ無かった。

なんと——あろう事か2人で、自分達のお弁当のおかずを口移しで食べさせて居るのだ。

更に言えば…此処からでも分かる。颯樹君の、両…耳…に、…AMI…

KOTOBABO——

『縹緗く縹緗く縹<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>ユ<sup>ハ</sup>。豊「螻ア縹<sup>∞</sup>袖<sup>縹</sup>上<sup>▲</sup>縹<sup>ヲ</sup>鬆<sup>ヨ</sup>幹<sup>笙</sup>。襪、縹上<sup>→</sup>縹<sup>」</sup>縹<sup>ヲ</sup>縹<sup>矩</sup>「ツ讓ケ螻帛庄誦<sup>帙</sup>」笙。縹<sup>ゆ</sup>」縹<sup>音</sup>ア<sup>√</sup>◆縹。縹<sup>ヨ</sup>莠<sup>九</sup>襪<sup>ヲ</sup>／／——

——

頭の中に、ノイズ見たいな…分かりたくても分かりたくない言葉が流れ込んで来る  
痛い、辛い、嫌だ、これ以上聞きたくない……。

(彩)「(だ、ダメ…此処から離れ<sup>n</sup>——)ガシャンッ!…あつ!」

(花音)「ひゃあつ!」

(千聖)「誰ッ!」

(颯樹)「あの後ろ姿……彩っ!」

気付いた時には、お弁当を手放してしまっていた。3人に気付かれたかどうかはさて置き、私は一目散脱兎が如く落ちたお弁当を置き去りにして走り去ってしまった。

(彩)「どうして……どうして……ッ!!酷い、酷すぎる……あの2人はああやって、何時も何時もいつもいつもITUMOI TUMOI——ッ」

何時だってそうだ。あの2人は、私が何かしようとする度に邪魔をして来る。私の為?ふざけるのも大概にしてっ!!

そんなの——絶対に口実だ。私から颯樹君を遠ざけようと、引き裂こうとして2人だけのものにしようとする手段に過ぎないんだッ!!

(彩)「もう……辛いよ……。また、私はアイドルとしてしちやイケナイ顔してるんだって分かってる。分かってるけど……ッ、ううっ!」

それくらい……諦められない。トップアイドルを目指す位、颯樹君の事を……諦められないから。

だけど……あんなの見せられたら、もう——

(彩)「はあ……、はあ……っ、うう……ッ!」

(神楽)「彩……」

(彩)「…!?か、神楽君…!?」

——我に返ると、そこは屋上で、目の前には仰向けになつてたであろう神楽君が、驚いた顔で上体を起こして私の方を見ていた。

\*\*\*

(神楽)「——うん、だから申し訳無いが宜しく頼む。それじゃ」

学校が終わり、俺は自宅にてとある人物——いや、彼女のマネージャーたる颯樹との通話を終了した。

あの後…彩から一通り事情を聞いた後、その時は颯樹達には内緒で彩をウチに招いた。目的としては、メンタルケアを見たいなものだ。

但し、彩は学生でありアイドル。何処の馬の骨か分からない輩の家に招くのはリス

キーな為、事務所にて予定が入っていた海来に無理言つて協力を要請した。勿論、事情は話してある。

(海来)「神楽君、連れてきたよ♪」

(彩)「お邪魔します…」

(神楽)「いらつしやい彩。海来も…ありがとうな、その足で悪いが紅愛が向かつてるはずだ。合流出来次第事務所へ向かつてくれ」

(海来)「了解♪」

そう言つて海来は、連れてきた彩を家の中へ入れて、バイクで向かつてる紅愛と合流するべく、再び家を出た。

(神楽)「適当にかけてよ。麦茶でいいかな？」

(彩)「う、うん。ありがとう…」

リビングに彩を招き入れた俺は麦茶を容易して彩に差し出した。

(神楽)「とりあえず……彩? 君とこうして一対一で話すのは初めてだ。一応海来から事情は一通り聞いてはいるにせよ、ちゃんと君の口から話して貰う必要がある。ゆつくりで良い、話して……くれないだろうか?」

(彩)「う、うん……分かった——」

あの光景をまだ引きずって居るのだろうか? 彩の口調は初めはぎこちないものだった。しかし……それでも、途中から自分のペースで話せるようになり、彩は自分が颯樹と出会ってからの1年間のルーツを話してくれた。

(彩)「——これで、全部だよ?」

一通り全て話し終えた彩はそう言っただけで俺の顔を見た。

海来から出会った話は聞いた事があるにせよ、彩がこれまで経験した1年間は壮絶なものだった。

あんな事が繰り返されれば一般人なら誰だって壊れてしまう。しかし、それが今の彩に見て感じられ無いのは、颯樹に対する強い執着以前に……自分が自分がアイドルの丸山彩としての我が他の誰よりも何よりも強いと言う事。

(神楽)「であれば……俺が彩達に切れるカードは幾らでもあるな。最も、彩がそれらを使いこなす必要がある」——本来なら、あの3人に色々と問いただす必要があったが、彩が俺から出す条件をのんでくれるのであれば、本格的にサポートする」

(彩)「ほ、本当に…!?!」

(神楽)「俺は嘘は嫌いだ。過去に1度——いや、それは今はどうでもいい。それで? 彩はどうしたいんだ?」

彩の瞳に、僅かながらの火種も同然だった光が、強く輝き始めたのがわかった。対する彩は……俺の問い掛けに食い入るように答えた。

(彩)「私……出来ることなら颯樹君の傍でずっと支えて居たい! 今までこうしてアイドルやって来れたのも、颯樹君と出会えたからでもあるんだから……! 命の恩人とも言える運命の人と……誰よりも末永く幸せになりたいっ!!」

(神楽)「そうか……」

彩の瞳……本気だ。消えかかった光が、すっかり元の輝きを取り戻した。いや、元

では無い。今までよりも更に輝きを増している。

今の彼女ならきつと——

(神楽)「Roseliaの皆にも言った事だが……何かを変えることが出来る人は、何かを捨てる覚悟がある人だけ。今の彩なら、何を捨てるべきか、分かるはずだ」

(彩)「何を……(何かを変えるために、私が捨てるべきもの。私が今まで出会ってきた人達、時間は、皆大切なもの。我儘だけど……捨てる事なんて出来ない。……千聖ちゃん、花音ちゃん)……ねえ、神楽君？」

(神楽)「……もう、大丈夫そうだな？」

(彩)「うんっ……神楽君？ありがとう。私に……手を差し伸べてくれて」

(神楽)「俺は……争い事が一番嫌いだから」

(彩)「え？」

(神楽)「いや、何でも無い……それより、答えが出たのなら教えてくれるかな？」

危ない……つい心の声が出てしまった。これだけは自分の心の中に閉まっておくべき事だから。

そう言い聞かせて、俺は答えが出た彩の返事を待った。



(彩)「私……もう2人といがみ合うの辞める。悔しいけど、あの2人には着きいる隙がないって改めて分かったから。それに、私だって大切な仲間と友達とずつといがみ合つて傷付けあいたくない。そんな事して颯樹君を自分のものにしたって、何も残らないと思ふから」

(神楽)「そうか……」

彩がこの場で考えて、導き出した答えであるのなら、俺はこれ以上何も言わない。そもそも、恋愛する中でいがみ合つて奪い合い、果てに傷付け合う何て……被害者からしたらたまつたものじゃない。そんな事しても、何も残らないし誰も喜ばない。

それは俺が……あの過去を通して一番良く知っている。

何も言わないとは言つたが、彩からその答えが出て、俺は心底ホツとした。

(彩)「だから……お願い神楽君。私のお願ひ——聞いてくれる?」

(神楽)「もといそのつもりだよ。いや——みなまで言わなくても良いの方が適切だな。その時は俺も付き添うから、彩自身が動くこと? いい?」

(彩)「……もしかしなくて、神楽君ってエスパー??」

(神楽)「失礼な。母さんや海来と接してくウチに多少ながら読心術や洞察力を得ただけだ。……それより、もう暗いだろうからウチまで送るよ」

(彩)「あ、ありがとう……っ！」

彩に家まで送つてくと伝えた俺は、誠に不本意ではあるが……彩をガレージにて待つよう言つて、軽く着替えを済ませたあと……彩をバイクに乗せて家まで送つた。

……二輪、自動二輪等の2人乗りは法律で禁止されてるつて突つ込みたい奴ら——  
——暗黙の了解つて事にしておいてくれ。

\*\*\*

何事もなく家まで送つてくれた神楽君にお礼を言つて、今現在私はお風呂で洗い終えて、身体をシャワーで流し湯船に浸かっていた。

お風呂の天井を眺めながら、私は先までの神楽君とのやり取りを振り返つた。

『神楽君はね？困つてる人や辛い思いをしてる人達を放つておけない人でもあるの』

あの時……海来ちゃんが言つてた言葉。本当に、その通りだった。

私が昼休み、屋上で泣き崩れてしまった時も、神楽君は慰めてくれた。しかも、そ

れに留まらず事情を最後まで聞いてくれて……さつきまでのやり取りに至った。

それに――

『君に、泣いてる顔は似合わない。笑顔でいる時の彩の方が輝いて見える。颯樹だって、そう思ってる筈だ』

家まで送ってくれてる最中……神楽君が言った一言。それを聞いた瞬間、身体全体にのしかかっていた重荷が、ほんの少しだけ軽くなった。

(彩)「あの時……もしも、あの場所で出会ったのが神楽君だったら、私はきつと……神楽君の事を好きになってたかもしれない」

そう呟いて私は、口迄湯船に浸かって息を吐いた。

空気が泡となって、ブクブクと音を立てる。

そう思える位……神楽君は颯樹君と同じ位優しい人だと、あの時私は思い知った。だけど……それでも私は颯樹君を選ぶ。だって、あの時私を助けてくれたのは神楽君でも誰でもない……颯樹君だから。

(彩)（だからこそ……これ以上千聖ちゃんや花音ちゃんと、いがみ合ったりするのはよそう）

こう言うのは……もつと早くにでも気付くべきだった。いや、気付いていたけど、彼に盲目だった余りその事実から目を背けてたのかもしれない。

ムキになって、知らぬ内に颯樹君を困らせていたのかもしれない。

だけど、それに向き合わせてくれたのは神楽君だ。

だから、神楽君には感謝してもしきれない。

そして……私は誓った。

(彩) 「千聖ちゃんと花音ちゃんと仲直りして……4人で幸せになろう」

そう。これが私が導き出した答え。

我儘で、自分勝手なのは重々承知だ。それでも……私は大切颯樹君な人の前で、仲間千聖ちゃんと友達花音ちゃんとこれ以上いがみ合つて奪い合い会いたくない。そう決めたんだ。

(彩) (だから明日、2人にちゃんと想いを伝えて……颯樹君に謝ろう)

そう心の中で強く誓い、ケツイした後……私はお風呂から出たのだった……。

〈END〉

## 20話

「……………」

昨日の出来事から一晩たち、私は——否、私達3人は今学校の屋上にいる。

昨日のことがあつたせいか、お互い此処で落ち合つてたからずっと沈黙状態。颯樹君は日菜ちゃんと麻弥ちゃんの朝のロケの付き添い、神楽君はエチちゃんつて言う子の収録の付き添いで、此処には居ない。

……だからこそ、その2人に気を遣わずに今日の前にいる2人——千聖ちゃんと花音ちゃんと話ができる……と思つていたのだが、どうしても気まずさが勝つて、本題に踏み込めない。

(どうしよう……折角神楽君が気を利かせて時間を作ってくれたのに……昨日の事を引きずつちやつて、中々2人と話せないよ……でも——)

私は、神楽君と約束したんだ。この2人と仲良くしたいって。もう、颯樹君を取り合つたりしないって。

私が此処で1歩踏み出さないと……なにも変えられない。

そう思つて、私は覚悟を決めて、口を開いた。

——ほぼ、2人と同時に。

「2人も！（彩ちゃん!!）——えっ?!」

「え、えつと……2人から……先にいいよ?」

「いいえ、多分……お互いに言いたいことは同じだと思うから——私と花音を此処へ呼び出した彩ちゃんから言つて頂戴」

「うん……わ、私もそれでいいよ」

「わ、分かつた……」

そう言われて、私は気を取り直し……改めて、2人に伝えたい事を伝え始めた。

「私……2人とこれ以上颯樹を巡つて、言い争つたりしたくない。気付いたんだ……こんな事しても、周りに迷惑がかかるばかりか颯樹君に迷惑がかつちやうつて……颯樹君を困らせちやうつて。だから……今まで、2人に強く楯突いてごめんなさい!!私、2人のこと……とても大切な友達だつて思つてるから!もう、これ以上……私にとつて大切な

3人を傷付けたくないのっ!!だから…私は2人と仲良くしたい!仲良くなって、颯樹君と4人で幸せになりたいのっ!!」

「……………」

そこまで言つて、私は深く、頭を下げた。

自分でも、無茶苦茶な事を言つてるのは…百も承知で分かつてる。

でも、こうでもしないと…私と2人の関係が修復出来ないくらいにズタズタになってしまうから……。

「彩ちゃん…私からも、言わせて頂戴。昨日は——いいえ、今まで貴女を傷付けるような事をしてごめんなさい。でも、これだけは分かつて頂戴?貴女には、アイドルとしての道を違えて仕舞わないように…私と花音で、大切女人颯樹を守りたくて…ああする他なかったの。貴女が颯樹の事を知り過ぎてしまったら…絶対にその道を違えてしまうだろうから……」

「私も…あの日から千聖ちゃんと約束して、周りの人から颯樹君を守ろうつて、必死だった。どんな事をしてでも、颯樹君を守ろうつて…必死だった余り、彩ちゃんを傷付けて…その事にちゃんと向き合わなかった。だから彩ちゃん…今まで、友達である彩ちゃん

に酷いこととして、ごめんなさい。だけど……やりたくてああした訳じゃないって、分かってくれると……嬉しい、かな？」

私の想いに応えるかのように、2人とも私にこれまでの事を謝ってくれた。

2人が言ったことを譜面通りに察するに、颯樹君は過去に何かあったと言うのは明白。だけど……私はそれを言及しようとはしない。

「……颯樹君が、過去に何かあったのかは私は知らない。だけど私は、もうそれを意地でも知ろうとするのは辞める。千聖ちゃんが言うように、知れば私の目指すべき道が違って……颯樹君を困らせると思うから」

「彩ちゃん……」

「だから——約束して？何時か……、その時が来たら、本当の事を教えて？」

「千聖ちゃん——」「……分かったわ」千聖ちゃんっ!？」

私の約束を聞いて、花音ちゃんはどうか答えれば良いのか分からず、千聖ちゃんの方を見た。多分……千聖ちゃんと交わした約束の凝りが残ってるんだと思う。

しかし千聖ちゃんは……花音ちゃんはもちろん、私にとつても予想外の答えを出し



た。

「千聖ちゃん……どうして……」

「彩ちゃん、自分の言った事に……嘘偽りはない？これを私と花音が承諾したら、もう彩ちゃんは颯樹の事を言葉通りその時が来るまで知る事が万一があっても出来なくなる。それでも……良いかしら？」

「……それが、私達の仲を違えちやうとした大元の原因なら、私は……2人となかよくなって、4人で幸せになれるのなら、私は……今まで颯樹君に対して拘ってたものを捨てる。その覚悟で、さっきの言葉を言ったつもりだよ？」

「……分かったわ。貴女がその気でいて、それが揺るがないのなら……その約束、守るわ。花音も……それで良いわよね？」

「うん……彩ちゃん。もし、辛くなったら何時でも私達を頼ってね？慰める事くらいなら、出来るから」

「千聖ちゃん、花音ちゃん……ありがとう……」

やった……っ。神楽君、私……やったよ！千聖ちゃんと花音ちゃんと仲直りできた！

嬉しすぎて……うう、涙が止まらないよお……っ！

気がついたら、私の背中を、2人が摩つてくれて……慰めてくれた。

「これも…神楽君のおかげだ。神楽君が昨日…手を差し伸べてくれなかったら…私、今度こそ立ち直れなかったかもしれない…」

「うっ……………」

「?!」

あれ? 千聖ちゃん達、私が神楽君の名前を出した瞬間……苦虫を噛み潰したような顔をした。

「何かあったの?」と私が問いかけると……千聖ちゃんと花音ちゃんが、とても申し訳なさそうな顔をして、話してくれた。

私はそれを聞いて……「災難だったね……」と、苦笑いでそう答えたのだった。

「(想像以上…だな) 報告ありがとうございます。とりあえずは空いてる班のサポートに回って頂ければ。あと…桃原さんはメンバーがそろそろ揃う頃だと思うので、今日の

レッスンメニューを提示しておいて下さい」  
「分かりました」

放課後……音楽事務所Marieにて。

マネージャー班のスタッフ達の進捗状況を聞いた俺は、心の中でそう感心しながら、桃原さんともう1人のマネージャーにそう指示して……今度は収録スタジオへ向かった。

「おっ！お疲れ様です主任！」

「お疲れ様ですっ!!」

「牛多さん……主任は止めて下さいよ。俺が此処に入社してまだ1週間も経ってないと言  
うのに。それよりも……桃原さんから話は聞きました。新曲の収録段取り、MV収録等の  
段取りまで全て終わったそうじゃないですか。俺の記憶してた中でも、収録班にかなり  
負担が行ってしまったにも関わらず……無理を言ってしまう申し訳ありません」

「何言ってるんですかい！あんたはQ、H、Oのプロデューサー、つまりはウチら専属  
スタッフを取り纏めるボスなんだ。そんなアンタにあたま下げられると、ウチらの面目  
がなくなっちゃうってもんだ！そおだろ、皆!!」

牛多さんがそう言って作業中の2人に問いかけると、「勿論です！」と元気そうに答え  
た。

牛多さんもそうだが、先の桃原さん、機材班の伊達さん、衣装製作班の小林さんの4人は、社長に抜擢された12人のスタッフの中でも頭一つ抜けてるくらいの仕事裁きが出来た人達。それでいて牛多さん見たく人との接し方がとても上手……少なくとも、抜擢された12人の中に当たりが強い人とかは居ない。

そう考えると、改めて自分にとって良い事務所に所属出来たと心底思う。

「……と言っても、ホントにまだ1週間も経ってない……」大江さくんっ!!」……と、その声は小林さん。どうかされたのですか？」

振り向くと、早足でほんの少しだけ顔を青くさせながら、衣装製作班責任者の小林さんが話しかけてきた。

何か……作業中に問題でもあったのだろうか？

「大江さん……実は、Q・H・Oの皆さんの衣装のデザインが……中々決まらなくて……私、大

江さんの、Q. H. Oの子達の期待に応えられる衣装にしたくて……でも、このままじゃ、大江さんが指定した期日に間に合いそうになくて、私……私……っ!!」

「お、落ち着いて下さい小林さん。とりあえず、デザインは出来上がっているんですよ？もし良ければ、そのデザインを見せて貰っても良いですか？」

小林さんは、明るい性格で、それでいて頑張り屋で負けん気な性格の持ち主である。仕事の要領も他の1人人と同じくらい良いのだが……持ち前である性格故なのか、こうして1人で抱え込んでしまうらしい。

とりあえず、不幸中の幸いとしてデザインは出来上がってその候補を1つに絞れずにいるといった感じらしいので、出来上がってるデザインを見せて貰うことにした。

「……のだが。」

「えつと……これが、デザインの候補です」

「あ、ありがとうございます……（え、これ……全部?）」

小林さんに渡されたデザイン……一瞬誰かの役者の台本か?と思うくらい分厚さ。これら全部……衣装製作班の皆で出しデザインの案だそうだ。

何度も言うが、まだ一週間経ってない。この短時間で、これ程の案を出してくれたのだ。

「……………」

「あ、あの……やはり何か問題でも——「凄い」え?」

どれもこれも突っ込み所無く、彼女達のことを良く考えてデザインされている。余りの完成度に、俺は少しの沈黙の後……そう呟くのに精一杯だった。

「いえ、このデザイン一つ一つ彼女達の事を良く理解して作られているなど思いまして。だからこそ——」

デザインの資料を一つ一つ見ながら俺はそう感想を述べて、資料を閉じて、小林さんに返し会話を続けた。

「自分からはこれ以上言う必要の無い程の完成度です。なのでここから先は、彼女達5人と話し合って進めて下さい。気が済むまで、ゆっくりでも大丈夫です。小林さん率い

る衣装製作班の最高の衣装、お待ちしております」

「は、はいッ!!ありがとうございます!それでは早速、5人と相談して参ります!!」

俺はそう伝えて、俺は煌黒社長が待つアイドル課会議室へと歩みを再開した。何故アイドル課の会議室なのかは：俺も正直な所分らない。何せ、そこへ来るよう言ったのは社長のほうだから。

そして、歩みを再開してまもなく：後ろの方で「ふぎやあッ!!」と言う、間抜けな声が聞こえたが―十中八九彼女の『何時もの珍行動』だろうと思い、俺は振り返らずそのまま歩き続けたのだった。

(あの人：要領良いんだけど、運動神経が絶望的なんだよなあ……)

「失礼します。5人とも、個人練習お疲れ様」

「「「お疲れ様です、神楽プロデューサー」」」

社長達との話も終わり、レッスン室へ足を運んだ俺は中に入るなり個人練習をしてい

る5人に挨拶をした。

5人とも、その挨拶に呼応するかのように練習をピタツと止めて挨拶をし返した。

普通にいつも通り呼んでくれても良いのにと思ったが……お互いに、今は仕事をしてる身であり、上司と部下である以上そこは彼女達も同じ事を思っていたとしても、割り切る必要があるのだ。

「お疲れ様。今日より本格的にデビューライブに向けた練習を始める。それに伴い当日のセトリー及び新曲とカバー曲、その他ゲストバンド等の詳細が纏まったから目を通して置いてくれ」

「「「はいッ!!!」」」

そう言いながら、俺は5人に当日までのスケジュール、当日のセトリ、スコア、現段階で参加が決定しているゲストバンド等の資料を配った。

5人が資料とスコアに目を通して最中……レッスン室の隅にいた小林さんが、俺達の元へ歩み寄り、「少し宜しいでしょうか?」と断りを入れて、承諾が取れたことを確認して話し始めた。



「衣装製作班責任者の小林です。デビューライブ当日に着用される衣装の案が出揃いましたのですが……」

「す、凄い量の……案ですな……」

見覚えのある台本……ではなく、小林さんが作ったデザインの案の資料が海来に渡された時、思わず海来はそう零してしまった。

まあ無論、悪気があって言ったのでは無い事くらい分かる。ほか4人も同じ表情をしていたからだ。

「も、申し訳ございませんッ……!皆さんの事を知っていく内に、案がどんどん浮かび上がってしまいーお時間良ければ、この後お話のお時間を頂ければと……」

「……ありがとうございます。ふむふむ……(凄い。こんな感じ、久しぶりかも)」

これに関しては、俺が既に承諾済みのため、敢えて関わらない様にした。寧ろ……この手に、と言うより衣装関連は高校の頃から、他の誰よりも拘りを持った人物が居る。

今、資料を手に取り没頭して読んでいる彼女ー結虹がそ1人だ。

「……ごめんなさい、小林さんでしたよね？もし良ければ私とエネがその話に対応したいと考えて居るのですが、10分後にバンド課の会議室でお話は可能でしょうか？」

「えっ!?よ、宜しいのですか?！」

「はい。私、クインテット・ハートにいた頃は衣装を良く作っていたのです。小林さんのデザインを見て、久しぶりに衣装製作の欲が駆り立てられたのです。それに…エネもこお見えて想像力が豊かなので、きつとより良い話し合いが出来るかと」

「(成程……な)分かった。小林さん、此方からは結虹とエネをお貸しします。2人なら貴女のお役に立てるはずですよ。但し……結虹とエネ?後に海来達にも話しておくけど、話し合いが終わったら早急に新曲の練習を優先的に行ってくれ、いいね?」

「分かりました」

2人はそう返事すると、小林さんと共に会議室へと向かった。それを見届けた俺は、残された3人と向き合う。

「衣装に関してはあの2人に任せる。海来達3人はこれから予定通り練習を始めてくれ。先も言ったけど新曲を優先すること。次の休みには新曲のMV収録をするから、それに間に合うように、新曲2曲を2人が戻ってきてても大丈夫の様に完璧に仕上げてく

れ。今日のパートの指揮は海来にまかせる。……頼んだぞ」  
「「はいッ!!」」

俺はそう伝えて、レッスン室を出た。

今日この後は各班の責任者一人一人と当日、及び収録の打ち合わせを進める。その後はゲストバンドや楽団等の方たちと顔合わせをし、残り1枠空いてるゲストバンドとの交渉を通話を通して行いう事になっている。

「何かあったら連絡する様に」と部屋を出る際年を押ししたが……あの3人の事だ。余程の衝突が無ければアドバイス等は大丈夫なはずだ。

プロデューサーに就任して、まだ日は浅いが……当日までのスケジュールはびっしりと詰まってる。俺も、彼女達の為に気合いを入れて臨むとしようケツイするのだった。

くENDく

「成程……その手があつたなんて」

「やはり、エ中を連れてきたのは正解だったわ」

「あ、ありがとうございます結虹先輩、小林さん！」

「それではこのデザインで、もう一度大江さんに掛け合つてみたいと思います」

「ありがとうございます」

後日……

「先日は……迷惑を掛けて済まなかった。神楽のお陰で、僕も……3人の為に前に進む覚悟が出来た」

「そうか。想いを伝えるのは……いつ頃になるんだ？」

「今は事務所の方は忙しいし、お互い受験生だ。ほとぼりが冷めた頃——卒業式迄には、確りと伝えるよ」

「君がそうと決めたんなら……これ以上何も言わない。親友として、最後までその行く末見届けさせて貰うよ」

「ありがとう……神楽も、大変だろうが頑張るんだよ？ 決して無理だけはしないように」  
「お互い様に。颯樹……君とあの時再開出来た事を、改めて感謝するよ。ありがとう、そして……」

「ああ、此方からも例を言わせてくれ。彩の事、支えてくれてありがとう。……—達者でな」

## 番外編

## 番外編：少女達と夏休みと怪奇遊戯（ホラーゲーム）①

夏休み……それは、生徒達が楽しみにしている連休の1つ。これを機に、ある生徒は家族と旅行……ある生徒は夏祭り……ある生徒は海水浴等々を連休中に企画し、夏休みを謳歌するのが王道……と言うものだ。私、白金燐子も練習や生徒会とは別に今日この日、興味本位で買ったとあるゲームをRoseliaの皆と神楽君と海来ちゃんなどで……やる予定を立てていた。

（燐子）（と言つても……事前に神楽君と事前に何をやるか等諸々話し合ってるから……興味本位とは、違う）

実を言うと、この話を持ち込んだのは神楽君本人で……何でも、私達Roseliaとクインテット・ハート・オーケストラとの交流親睦を深める為……らしい。

色んなことを聞いて多少驚いたけど……私が色々と問い詰める事じやないと……直ぐに理解し、今に……いたる。

（あこ）「お待たせ〜りんり〜ん！」

(紗夜)「お待たせしました、白金さん」

(リサ)「おつ待たせ〜♪」

(友希那)「お待たせ、燐子」

(燐子)「皆さん…いえ、まだ時間は…少し有ります。後は…1人…ですね」

そんな中…友希那さん達が来てくれた。

何時も友希那さんが寝坊をして…今井さんや…神楽君や海来ちゃんに迷惑をかけてた友希那さんが、時間に余裕をもって…集合してる光景が、私にとっては…驚きが隠せなかった。

(紗夜)「それよりも白金さん？大江さんと蒼導さんがまだ来ていませんが…、確か夏休み前に白金さんから聞いた話だとあの二人も白金さんの家に集まると言っていますか？」

(友希那)「そう言えば…燐子の家へリサと向かう前に、神楽と海来と一緒に行くと思つてインターホン鳴らしたのだけれど…忙しかったのかどうか置いて置き、代わりに紅愛が玄関から出てきたわね？」

(リサ)「そ〜そ〜♪、燐子…何か聞いて無い？」

「何か聞いて無いかしら？」…と友希那さんに問い詰められた。さ、流石幼馴染…：私  
 なんかよりも…勘が鋭い。

実を言うと…：神楽君に今日のことについては口止めされている。どう答えようか  
 悩んでいると…：友希那さん達が来た方角から、赤の原付バイクに乗った女の人がこちら  
 に向かって来ているのに気が付いた…。

『女の人』…と分かったのは、遠くでも分かる位綺麗な顔立ち、スラつとしたフォーム。  
 そして何より、私達はあの容姿の子を知っている。

（紅愛）「ごめんなさい。遅くなりました」

（友希那、リサ、紗夜、あこ）「「紅愛!?!」（赤場さん! 紅愛姉!）」

（燐子）「赤場さん…：時間丁度です…、お待ちしておりました」

バイクから降り、ヘルメットを外しながらそう答えたのは赤場さん…：神楽君がプロ  
 デュースしている…：Q. H. Oのギター担当の赤場紅愛、その人だ。

皆…：赤場さんの姿を見て…：驚いていた。

（燐子）（まあ…：当然…：かな? だって…、この事は私と神楽君…：後は赤場さんだけ）



それでも……10まで知ってるのは……私だけ♡

一先ず……、未だに困惑している4人に——更によえば……赤場さんにも、ネタバレも含めて……説明するべく……「お茶……出しますので……、中に入りませんか？」と言つて……皆を家の中に招き入れた。

(リサ)「納得できないんだけど!!」

皆を私の部屋に案内して……麦茶でもてなしたあと……、神楽君に伝えられた事を説明した後……案の定と言うべきだろうか——今井さんが顔を青くさせながら……声を張り上げた。

(リサ)「燐子と紅愛にしか今日の事を知らせてない何て……!しかも親睦会を口実にやるゲームが『死印』つてゲームだなんて!!聞いてない聞いてない聞いてない聞いてない聞いてない聞いてない……ッ」

(紅愛)「そうよ!私は神楽から『俺と海来、結虹は夏休み実家で過ごさなきゃいけない



「お邪魔するわよ」と言いながら…私部屋に現れたのは…赤場さんと同じQ. H. Oのドラム担当の九導さんこと九導里那さんだった。

(里那)「ごめんなさい。インターホン鳴らしても応答無かったから上がらせて貰ったわ。それよりも…カグラからの伝言よ」

そう言った九導さんはスマホを取り出して…皆の前にスピーカーを向けて…ボイスメモに録音されてるであろう…神楽君の声を再生した。

(神楽)『燐子には予め伝えてはいたんだが…、もしホラー嫌いの2人リサと紅愛が駄々こね始めたら、双方連帯責任として特訓・練習メニュー2倍を執行させるから、済まないが理那の口から伝えて欲しい。あと…これも伝えたんだが、頑張った人にはお盆休みに実家に泊まり込みで招待してあげるから、全部Good ENDでクリアする迄頑張つてね♪…あ、そうそう。プレイ中燐子の家から出る輩が居たら、その場合も同じ処遇とするから…そのつもりで』

(里那)「……つて事だから、皆頑張つてね？ワタシ家事とか残ってるからこれで失礼するわ」

（燐子除く5人）『……………』

そう言つて…九導さんは手を振りながら部屋を後にした。

九導さんが部屋を出た後の…部屋の雰囲気はとも重かつた。

私を除いて…皆の顔が青くなり（あこちゃんに関してはポカンとした顔をしていた）

……、絶句していた。

（友希那）「全く……とことん用意周到なんだから。私の旦那は…」

（紗夜）「全くです……」

この際、今井さんと赤場さんは置いておいて…、友希那さんが…抜け駆けする事もお見通し何だもん…。

（燐子）「流石はR私o達s達e達l達i達aのマネージャー……私の花婿さんです……♡）み、皆さん

…此処で黙つていても…埒が明かないので…順番を…決めませんか？」

私の提案に…5人とも頷いて…、どう決めるか話し合つた。

結果——あみだで決めることになり……。

1 : 友希那 ↓ 2 : 燐子 ↓ 3 : 紅愛 ↓ 4 : リサ ↓ 5 : あこ ↓ 6 : 紗夜

(紗夜) 「交代のルールとしては…章が終わるか、ゲームオーバーになるか。これで良いですね？」

(リサ) 「ね、ねえ…途中プレイ不可になった場合とかは……」

(燐子) 「神楽君の実家で…お盆を過ごしたくないのなら…許可します」

(リサ、紅愛) 「が、頑張ります……」

氷川さんが…交代のルールを提案した瞬間…今井さんが如何にも早く終わらせたいと…言わんばかりの提案をして来たので…氷川さんが答える前に…私が答えた。

赤場さんともかく…今井さんと、友希那さんの2人には…何があるかと必ず…ゲームオーバーになるか、章をクリアするまで…やらせるつもりだ。

(燐子) 「それでは…り、臨場感を出す為に……カーテンを閉めて、照明を消しましょう」

(リサ) 「ちよ、ちよつと燐子お!? さささ流石にそれはややややり過ぎなんじゃあないか

なあ〜!？」

（紅愛）「そうよ。そ、それに暗がりゲームやテレビを見たりすると、視力低下の元になるわ暗くするのは…は、反対よ！」

（燐子）「そうですか…なら仕方ありませんね…」

私はそう言う…スマホを取り出して、とある操作のフリをした。

（リサ）「り、燐子…一体何を？」

（燐子）「神楽君に…報告をと。二人が私達に…気を遣って抗議してくださったので…」

（リサ）「分かった!!分かったから!!アタシと紅愛も我慢するから!!」

（紅愛）「だからお願い!神楽には報告しないで!」

本当は報告などしてないのだけ…私がそう言った瞬間、この変わりよう。「ふふふ…」と黒く不敵な笑みを浮かべながら…テレビの電源を入れ、P〇4を…起動させた。部屋も…暗くさせるの忘れずに…。

あと…これは神楽君にも言って居ない事なのだが…、既に私はS〇版で…全てプレ

イ済みだ……。その為、このゲームのストーリー……もつと言うなら進め方は、把握済みだ。  
(燐子)「友希那さんと、今井さん……ううん、このゲームに参加する皆には悪いけど……  
神楽君とお盆休みを過ごすのは……この私。誰にも……邪魔させない……」

その為に……、色んな選択肢の結果や分岐ENDを経験した。氷川さんやあこちゃんにも……、この話を共有しようか悩んだが……万一の懸念を、許したく無かった為……仕方なく、だ。

(燐子)「それでは友希那さん……、始めて下さい」

(友希那)「え、ええ……」

私の合図と共に、友希那さんは『はじめる』を選択した……。

画面には……、如何にも昔ながらって感じの通学路に……二人の女子生徒が何か会話をしながら下校しているシーンが映し出された。

友希那さんは……、ただ黙々と彼女達の会話を……聞いて、ストーリーを進めて行った。

（リサ）「ね、ねえ燐子？まさか序盤からホラー要素全開だなんて……言わないよね？」  
 （燐子）「分からない……です。何せ神楽君に言われて先日買って来たソフト……ですから……  
 （うん……、先日このソフトが届いた。それにしても今井さん……）」

今井さんは……、自分が何を言っているのか分かっていいるのだろうか？こういうのを……フラグ回収って言うんだだけ——

（リサ、紅愛）「きゃあああああああああああ……！！！！」

ほら……言わんこつちやない。

私達の目の前に映し出されたのは……図書室の机の上に……、古典の女教師である……山口先生の右腕が、謎の紅い痣——『シルシ』と共に置き去りにされていた映像だった。

それを見た今井さんと赤場さんが、甲高い悲鳴を上げた。

ホラーゲームなのだから……序盤からホラー要素満載になることだ……あり得るのに……。



(紗夜)「湊さん……顔が真っ青ですが、大丈夫ですか？」

(友希那)「え、ええ……大丈夫よ」

(あこ、燐子)(友希那さん……強がつてる……)

多分友希那さん……油断していたのだろう。黙々と……ストーリーを進めたのが裏目に出たのか……、顔が青ざめているのがわかる。

それでも友希那さんは……心配していた氷川さんからの問い掛けに対して……、「大丈夫」と答えて……ストーリーを進めた。

主人公の右腕にも……、先程の会話に出ていたシルシが付いた所で……画面が切り替わった。

場所は『九条家の屋敷』と呼ばれる……外観が少し気味が悪い御屋敷。

そこで友希那さんは……、先程と同じ様に……探索(ストーリー)を進めて行った。ホールにて可愛いけど……どこか不気味な人形が出てきたが……コントローラーである友希那さんは……、動じずどんどん進めて行く。

(リサ)「てか……な、何でまだ御屋敷暗いまんなの……？」

（紅愛）「屋敷に入る前、一部屋だけ明かりが付いてたじゃない……」

因みに今井<sup>ホラー</sup>さんと赤場<sup>苦手な二人</sup>さんは…、さっきの一件があつてからというもの……こんな

感じに嘆いていた。（更に言うなら先程の人形にも…多少なりとも驚いていた）

（燐子）（そろそろ……かな？）

そろそろ……と言うより、もうすぐ。それに気づいた私は…、「もう少しで序章が終わる」という事を伝えて…二人を元氣付けた。

場所は…ホールからとある一室。例にもれずその部屋も暗くて何も見えない。

——にも拘わらず、友希那さんは…、周りを気にせず黙々と…ストリーを進めて行った。そしてそれが……私の一言で…、完全に油断して安堵していた二人に……とどめを刺す行動とも知らずに。

（リサ）「え？今……窓が光……」

（紅愛）「一瞬、何か見えた様ななきg……」

それは——突然起こった。一瞬だが、落雷の影響で窓が光った。その際に…、室内の真ん中辺りに、何かあるのが見えた。

友希那さんも…、何が見えたのか分からなかったのだろう。それをはつきりさせるべく、今度は少しゆっくりストーリーを進めていった。

不気味なBGMと共に、友希那さんが○ボタンを押した瞬間――

(リサ、紅愛) 「きゃあああああああああああゝゝゝつ !! !!」

(友希那、紗夜、あこ) 「いやあああああああああああゝゝゝつ !! !!」

そこには……一人の女性の死体が仰向けになつて倒れていた。

しかし、その死体は…、余りにも異様すぎる死体で…至る所から種別が判別出来ない植物が生えてきている状態だ。その有様が中々禍々しくて……、今井さんと赤場さんだけでなく…友希那さん達までもが…甲高い悲鳴を上げていた。(私は…、この光景を何度も見てしまつていた為…皆には申し訳ないが…、悲鳴を上げてるフリをさせて貰つた)

そして……言うまでもなく…、今井さんと赤場さんは先程の死体を見て…気絶してしまつたのだつた……。

(友希那) 「名前……何にしようかしら？」

そして…友希那さん、何とかあの死体見ても気絶しないで頑張つて…遂に主人公の名前や容姿を決める所まで来た。

（友希那）「…そうね、いつその事『彼』の名前出良いんじや無いかしら？」

（紗夜）「確かに…私を差し置いて、白金さんと赤場さんにだけ…もつと言うなら全貌に関しては白金さんにだけしか説明してないと言う始末。しつかりと…この場で付けさせて貰わないと聞けませんね」

（友希那）「燐子とあこも…それで良いかしら？」

（あこ、燐子）「は、はい…」

そして名前は…何故か今回の元凶となつてしまった神楽君こと…『大江神楽』となつた。

神楽君が元凶になつてしまったことに関しては…、少し不満を覚えたが…神楽君を操つてこのゲームをクリアするんだと…想像してしまつたら、自然と「Yes」と…答えが出てしまったので、仕方ない。

(友希那) 「ふう……よ、漸く終わった……わ……」

『デッドリーチョイス』を無事に終わらした事で、チュートリアルという名の序章が終わった為……、私はその事を友希那さんに伝えた刹那……、友希那さんはそう言つて……糸が切れた人形見たく崩れ落ちて、気を失つた。

「後は……任せて下さい」……と、友希那さんにそう言つてベッド氷川さんと一緒に運んで、さつき友希那さんが使つていたコントローラーを手にして、腰を降ろした。

(燐子) 「氷川さん……私の次は赤場さんなので……次の今井さんも含めて……起こして置いて下さい」

(紗夜) 「わ、分かりました……」

何だか……氷川さんの顔が引きつってた様に見えましたが……大丈夫ですね？ 兎にも角にも……、頑張つてくれた友希那さんの為にもあの2人の……怯え切つた顔を拝めさせて貰う為にも。

(燐子) 「ゆっくりと……楽しく……プレイしないとですね♡」

{  
t  
o  
  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
o  
u  
s  
}

## 白金燐子誕生日回：奏でるは祝福の鍵盤音

「燐子ちゃん、今日はもう帰っていいよ」

「えっ…!?で、でも…私はまだ…」

「ココ最近…ずっと何か焦ってる様な感じで、燐子ちゃん全く集中出来ないんだよ？理由は聞かないけど、明日の17日も休みなんだから、これを機にちゃんとコンディション整えて？良い？」

「はい…」と言って、私は楽器を片付け…荷物を纏めて、帰りました…。

ココ最近の自分…焦りすぎで、空回り…ばつかし。練習の時以外も、日々の日常生活や…学校生活でも…。自分でも…そう自覚出来る位の不調っぷりだ。

F・W・F出場がかかったコンテストまで、時間が無いにせよ…そんなに、焦るほど…じゃないのに。

理由は…分かってる。

6月に行われた文化祭のライブステージ。そこで私は海来ちゃんの…うん、『クレイジー・キーボード・プリンセス』「『クレイジー・キーボード・プリンセス』狂乱の鍵盤姫」と謳われたピアノスト蒼導海来のピアノ演奏を目にした。

次元が違う——何て生易しいものじゃない。

そこだけ……彼女の周りだけ、宇宙や銀河が創造されてしまうような世界観……でした。ライブ後に轟いた拍手喝采。制限時間が迫って来てるにも関わらず……降り注ぐアンコールの豪雨。

全て、新鮮で……味わったことの無い感覚……。自分が抱いてる音楽に対する——  
否、ピアノに対する情熱、覚悟、姿勢等がいかなるものかを……彼女が繰り出す鍵盤の音色をもつて……思い知らされました。

だからこそ……焦っています。このままだと……皆に迷惑をかけてしまう。皆に、置いてかれて……しまう。

「（私のせい……で……もし、F・W・Fに……出れなかったら……）……私、どうしたら……ッ」

「あら？ 彼処に居るのは……」

「燐子？」

「……えッ!？」

聞き覚えのある声が……、後ろから聞こえ……私は、後ろを振り向きました。

そこには、私の愛する神楽君と……、八月一日さんが居ました。2人とも……手に野菜等



が入ったエコバッグを下げてる辺り——買い物帰り、なのだろう。もしかしたら……仕事終わりで、その足で買い物したのかも……いや、

——そんな事より。

「燐子？ どうして此処に？ 練習——」 「神楽君……ッ!!」 えっ!? ちよ、燐子!？」

「神楽君……ッ、私……私……ッ!」

「お、落ち着いて燐子先輩!?!ま、周りに人が居ますので……神楽様!」

「ああ、燐子……歩ける?」

私の中で……何かが弾けた。

焦りすぎた余り……誰にも相談しなかったから……誰かに、しかも……私の愛する神楽君に……手を差し伸べられた事が……何よりも、嬉しくて。

兎に角、周りにいる人達に迷惑がこれ以上かかつては……いけないと思った私は……「はい……」と頷き、神楽君と八月一日さんと共に……場所を移動したのだった。

「なるほど……」

「神楽様、燐子先輩。ハーブティーです、どうぞ」

「ありがとうございます……八月一日さん」

燐子を連れて、やってきたのは俺の家——ではなく、エキが住むマンションだった。

エキが、ハーブティーを用意してる間に、俺は燐子から何があつたのか……話せる範囲で説明してもらつた。

「詰まり……6月に行われた文化祭の海来のピアノライブを見て、燐子は色々分からされた……んで、多少なりともプレッシャーを感じてしまったと」

「は、はい……私……主催ライブに向けた……練習の時に……誓つたのに——海来ちゃん……演奏を見て、自分が……培つた物が……海来ちゃんの前ではその程度……思いたくないのに、思えてしまつて……。弱々しい思いは、練習の時だけは捨てよう……思つてたのに——」

「練習は愚か、学校、日常にまで支障をきたすほど焦つて……そして今日、それを見兼ねた海来にコンディションを整える様言われて早退させられたと」

俺の問いかけに、燐子は申し訳なきげに頷いた。それを聞いていたエキは「大変でしたね」と慰めていた。

此方としても……思う所がある為、燐子が焦つて不調になつてしまつたことに関して、そろそろ責任を取らなければと思つていた。

丁度……海来もその準備が整つたから、燐子にああ言つたんだらう。全く……昔から不器用と言うか、やることが偶に大胆過ぎると言うか。

「……海来からは、コンディションを整えるように言われたんだよな？」

「はい……皆には、本当に……申し訳無い事を——」「ハイ、ストップ」 つんむ!」

これ以上……燐子には自分をせめて欲しくない。

海来がやつた事にせよ、俺がそう仕向けた事が事の元凶の為……ここから先はマネージャーである俺が、海来に変わつて彼女をケアしなくてはならない。

そう思つて、俺は燐子がこれ以上自分を追い詰めない様に人差し指を燐子の口元へ持つていった。

「これ以上は…自分を責めるな。燐子は、自分しか持つてない物がある…：それさえ捨てなければ、君は何度でも立ち上げられる」

「そ、それって…」

「ん…：、上手く言えないけど、要は自分を見失うな。どんな現実を突き付けられても、自分の存在意義、誇り、プライドを捨てるな。…って感じかな？」

結局…、俺も人の事言えない訳だ。でも事実…今の燐子には、こう励ましてやれば—

——後は一押しするだけ。

そう思い、俺は燐子の手に一枚のチケットを持たせた。

「こ、これって…：…っ!？」

「俺達からの囁かな誕生日プレゼントだ。一日早いし、こんな場面で渡すものじゃ無いけど…：…受け取ってくれ」

「あ…：ありがとう…：、神楽君っ!」

「…：…まあ、後はこれ。俺からのプレゼント、明日はこれを着て行きなよっ!」

そう言って、俺はプレゼント仕様の紙袋を燐子に渡した。

「着替えて来ても……いいですか？」と聞かれて、俺は無言で頷いた。

その後エ中が、すかさず燐子を脱衣場へと案内した。

……因みに、さつき渡したプレゼントは特注品。海来が『10月17日に、燐子ちゃんにピッタリな舞台をセッティングしたから、プレゼントをお願い』と言われ、それに合わせて用意した物だ。

但し、俺に何の相談無しに舞台をセッティングしたことに関しては、きつつくつく説教をしてから、燐子には内緒で、今日に至るまで海来に準備させた。

「か、神楽君……どお、かな？ 似合う？」

「ああ、とても良く似合ってる」

「美しいですよ、燐子先輩♪」

「八月一日さんも……ありがとうございます」

エ中に連れられて、現れた燐子は……予想以上に美しかった。

これで……安心して、明日を迎えられる。

「それじゃあ……試着次いでに悪いけど、そろそろ帰ろ？ 親御さんも、心配してるだろう

し」

「は、はい…」

そうやって俺は、一足先に玄関で待った。

間もなくして、燐子も来た為、揃ってエ巾に「お邪魔しました」と一言掛けて、エ巾の家を後にしたのだった。

---

「燐子、誕生日おめでとう。これ…私達4人で作ったプレゼントよ」

「薔薇の刺繍がされてる手さげバッグ…、大切に…使わせて頂きますね」

次の日学校が終わった後、友希那さん達から誕生日プレゼントを…貰いました。

5輪5色の薔薇の刺繍がされた手さげバッグ…明日から、楽譜入れとかに使おうと…  
思います。

「それにしても、りんりんのその服装…超超可愛いよ〜っ!」

「確かそのデザインのヤツ…有名な服屋さんの季節限定品だよね!?すごく似合ってるよ  
〜燐子♪」

「ニット帽、ワンピースの至る所に刺繍、デコレーションされてる白のコスモスが…とてもマッチしていて素敵ですね」

今、私が来ているのは…神楽君からの早めのプレゼントです。

白の折襟のシャツに、黒のネクタイ。そして、黒のボウタイキャミソールワンピース。  
氷川さんの言うように…ワンピースの至る所には、白のコスモスの刺繍が、小さくさ  
れていて…更にニット帽には造花の白のコスモスが飾られている。

「白のコスモスには『優美』、『純潔』の花言葉があるわ。とても…燐子らしく、良いプ…  
ワンピースとニット帽ね」

「あ、ありがとうございます…／＼／＼（あれ？友希那さん…今なんて…?）」

途中…友希那さんが言いかけてた言葉が…少し気になりましたが…皆からの褒め言  
葉が、嬉しくて…余り気になりませんでした。

この場に…神楽君が居ないのは…少し残念ですが、神楽君は今…海来ちゃんのマネー

ジャーとして…最終調整をしてる為、そこは仕方がないと…割り切ることにしました。

「皆さん、お揃いのようね」

「赤場さん…それに、八月一日さん達まで……」

「神楽様、今は海来先輩の最終調整でてが離せないのです、私と紅愛先輩の2人で、お迎えに上がりました！」

そんな中、赤場さんと八月一日さんの2人が、私達の事を…迎えに来てくれた。

実を言うと、神楽君から貰ったチケット…他の4人も貰っていたらしくて、昨日の時点で海来ちゃんと九導さんが…皆に、渡してくれていたそうです。

「でも…場所って確か、d a bよね？道くらい知ってるのだけけど……」

「それでも、ここからだとなれなりに距離があるでしょ？だから2人が、アタシ達のためにワゴン車スタッフさんに頼んで持ってきてくれたんだよ？」

「そう言う事よ。時間も惜しいし……早速行くわよ」

そう言われて、私達は…赤場さん達と一緒にワゴン車に乗り、d a bへと向かったの



だった。

\*\*\*

「海来…調子の方はどうだ？」

「問題ないよ、神楽君。今なら…：時間余すことなく無限に狂い弾けそう」

「流石…：狂乱の鍵盤姫だね♪私と里那がメイクアップしてる最中、一切の雑念感じられない精神統一だったもんね？」

d a bの楽屋にて、開場時間から暫く経たない内に…：会場がステージが殆ど満席となった。

開演時間までもう少し時間があるが…：今回のライブの主演である彼女海来は、衣装に着替えてから——正確には衣装に着替えて、エキと紅愛が彼女達を迎えに行つてから…：ずっとこのように、普段の彼女では考えられないくらいの落ち着きっぷり。

今回のライブに関して、本当の主演では無くても…：自分に課せた役目を全うすべく、今の今まで精神統一をしていたのだ。

「全くね…カグラが傍に居るって言うのに、この落ち着きっぷり…伊達にその名を掲げてピアノリストとしての道を歩んでないと言う事ね？」

「私は…この自分でいる時だけは——その日果たすべき使命を全うする時まで、ありとあらゆる概念を捨ててそれに望んできた。だからこうして落ち着いてられる。ステージに立てば、たとえその場に誰が立とうと…私は、それを果たすべく狂い踊る」

「……上出来だ。なら海来、開演前に俺から一言だ」

ステージに立つ彼女は、他の誰よりも逞しく信頼できる。ただ…今日に限って言えば、正直な話——『楽しんで欲しい』を念頭に置いてライブして欲しい。

「……奏でるは、祝福の鍵盤音。今宵は、僅かながらでも未来のライバルになり得るピアノリストを祝い祝福の鍵盤音を、2人と共に奏でてくれ」

「……分かつた」

……。

そう言って海来は、今回の本当の主演が待つてるステージ袖へと向かったのだった

「お待たせ、神楽」

「5人とも、観客席へ誘導しました！」

「……俺達も向かおうか、彼女を祝う為に」

そう言つて、俺達5人も舞台袖へと移動した。

---

「皆さんどうも〜！こんにちは♪Q. H. Oキーボード担当蒼導海来です♪今日は、スペシャルミニライブに来てくれて、ホントにありがとう♪」

ものすごい歓声……まさか、もう一度生で海来ちゃんの演奏を聞ける日が来るなんて……思いもしなかった。

海来ちゃんの衣装は、黒メインの、ゴスロリ風の衣装だ。

あの時は……ただ、彼女の魅力や実力……力量などを分からされるだけだった。

……ただ……今日は違う。

私は……Roseliaのキーボードニスト。どんな事があつても、それさえ忘れな

ければ…私は大丈夫。

「それじゃあ一曲目——の前に、今日はね？スペシャルゲストを呼んでるんだ〜♪  
…燐子ちゃん！居る〜？来てくれてるかな〜？」

「…えっ!？」

「ん〜、居ないのかな〜？燐子ちゃん♪来てたら、手を振つてくれると、嬉しいな〜!」  
「（み、海来ちゃんが…呼んでる!?!こ、応えなきゃ…）はいっ…!こ、此処に居ますっ  
…!!」

そう応えて、手を高く挙げて、海来ちゃんに…分かるように振った。

その直後…：目の前が真っ白になった——かと思つたら…、私に…スポットライ  
トが、当てられていた。

「燐子ちゃんっ♪来てくれたんだね？一緒に演奏しようよっ!!」

左右に開かれた道を進みながら…、私は…差し伸べられた左手を手に取り…ステージ  
に上がった。

「今日はね！ここに居る白金燐子ちゃんの誕生日なんだ！皆々燐子ちゃんに、お祝いの拍手〜♪」

／／ワアアアアアアア——…ツ！！！！／／

「おめでとう〜！」と言うお祝いの言葉が拍手と共に飛び交う光景を、私は…恰も玩具を貰った子供見たく目を…輝かせて見ていました。

その様子を見ていた海来ちゃん…「ウンウン♪」と、頷きながら見ていた。

そして…私の方へ寄って、マイクを離して…私に話出した。

「お誕生日おめでとう♪コンディションはバツチリみたいだね♪一緒に演奏してくれるよね？」

「はいっ……！」

「セトリは……あの時のメドレーの順番と一緒だけど……」

「問題……ないですっ！」

私がそう答えた刹那——舞台袖からもう1台キーボードとアンプが用意された。既に用意された、右側にあるキーボードに…海来ちゃん、反対側…左側に…私。「準備OK」の意味合いで、互いに頷く。

「それじゃあ…Roseliaのキーボード白金燐子ちゃんと共に送る祝福の鍵盤音を、お聞き下さい」

——…この後の時間は、とても楽しかった…。

今まで、こんな盛大に祝われた事なんて…ただの1度も無かった。

今年…この日に限っては…一生終わらないで欲しいと、願う位…楽しくて儂く…、輝かしい時間でした。

忘れない…この時間を。ライバルと言っても…過言じゃない、私の友達と過ごしたこの一時を。

「——燐子ちゃん」

『お誕生日おめでとう~~~~ッ!!!』

「……ありがとうございますっ!!!」

ライブ終了後……私は、飛びっきりの笑顔で……海来ちゃんに、神楽君に、そして……観客席にいる皆に、飛びっきりの笑顔で……お礼を言いました。

〈END〉